

御経塚ツカダ遺跡(御経塚B遺跡)  
発掘調査報告書I

1984年

石川県野々市町教育委員会

御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）正誤表

訂 正 箇 所	誤	正
目 次 7—(4)	(4)土 <sup>・</sup> 拵	(4)土 <sup>・</sup> 坂
P 1 ℓ 15	木 <sup>・</sup> 呂 <sup>・</sup> 川	十 <sup>・</sup> 人 <sup>・</sup> 川
P 1 ℓ 20	木 <sup>・</sup> 呂 <sup>・</sup> 川	十 <sup>・</sup> 人 <sup>・</sup> 川
P 5 ℓ 7	完 堀	完 掘
P 5 ℓ 14	土 拵	土 坂
P 5 ℓ 19	はた西側	また西側
P13 ℓ 15	土 拵	土 坂
P17 表 第8図17	藁	藪
P20 ℓ 4	区 城	区 域
P21 ℓ 9	知 軸	短 軸
P29 ℓ 6	対 象	対 称
P33 表 図番号12	12	第17図
P61 ℓ 10	推 積	堆 積
P69 ℓ 9	平 担	平 坦
P75 ℓ 11	第 図11	第43図11
P75 ℓ 24	土面巾	上面巾
P79 表 最下段	括 径	胴 径
P90 ℓ 1	土 拵	土 坂
P90 ℓ 2	土 拵	土 坂
P90 ℓ 4	土 拵	土 坂
P90 ℓ 6	土 拵	土 坂
P90 ℓ 6	D縁部	口縁部
P95～P99 最下段	土 拵	土 坂
P101 表81—4 D	6—高不	高 坏
P105 ℓ 28	須恵器杯身	須恵器坏身
P106 ℓ 5	証 正	訂 正
P106 ℓ 7	「塚崎遺跡」	「塚崎遺跡」
P108 ℓ 2	土 拵	土 坂

# 御経塚ツカダ遺跡(御経塚B遺跡)

## 発掘調査報告書Ⅰ

1984年

石川県野々市町教育委員会

## 序

野々市町は県下でも人口急増の激しいところであります。とくに本町北部一帯は昭和40年代以来の高度経済成長期より著しい都市化の波を受け、田園地帯が変貌しつつあります。

近年このような状況のなかで埋蔵文化財の緊急発掘調査の件数も増加し、開発と埋蔵文化財との調整が大きな問題となっています。

先人が残した貴重な文化遺産は、私たち郷土の歴史を知るうえでかけがえのないものであり、これを保護し未来へ継承していくことは私たちの責務であります。

御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）は、この開発の急ピッチで進む地帯に位置し、昭和55年より58年にかけて、記録保存を目的とする緊急発掘調査を実施してきました。その結果、弥生時代末頃から古墳時代にかけての集落の跡が発見され、先人の営みを知ることができました。

本書により、私たちの財産である埋蔵文化財の理解が深まり、保護意識の高揚を念じております。

最後になりましたが、調査にあたり文化庁、県文化課、県埋蔵文化財センター、石川考古学研究会及び関係各位の御指導、御助言に深く感謝の意を表するものであります。

昭和59年3月

野々市町教育委員会

教 育 長 東 谷 弘

# 例 言

1. 本書は、昭和55年から昭和58年度にかけて野々市町教育委員会が調査した御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）の発掘調査報告書である。尚、昭和56年度から昭和58年度調査は、国庫補助金、県費補助金を得ている。
2. 年度別の現場調査は次のとおりである。

昭和55年度調査	昭和55年 9月23日～11月17日
昭和56年度調査	昭和56年10月27日～12月28日
昭和57年度調査	昭和57年10月12日～12月25日
昭和58年度調査	昭和58年 5月24日～7月21日
3. 発掘作業、遺物整理には次の方々の御教示、御協力を賜わった。  
高堀勝喜（石川考古学研究会常任顧問）、荒木繁行（同会顧問）  
橋本澄夫（石川県埋蔵文化財センター次長）、南 久和（金沢市文化課）  
湯尻修平（石川県埋蔵文化財センター）、小嶋芳孝（石川県文化課）
4. 発掘調査は野々市町教育委員会社会教育課 高本 実、吉田 淳が担当した。  
発掘協力者 七社直樹、北村 昭、加藤雄己、安嶋 均、山岸秀昭、前田晴彦、口村栄二、  
今川照一、吉川 均、菊野庸三、池幡 誠、金子良平、宮本洋子、由比 守、  
辻森由美子、川端敦子、松田智恵子、斉藤和代、  
（上記の方に補佐して頂いた）  
橋本富代子、北川弘子、塚本しよん、塚本久枝、北川歎子、新宅美代子、  
北村照子、木村玉子、荒川たか、川 正子、中敷静子、宮崎次納、平野重子、  
森田貞善、藤田英太郎
5. 発掘実施にあたり御経塚土地区画整理組合理事長 木村敬一氏はじめ組合員の諸氏、また史跡御経塚遺跡保存会会長市村正規氏ほか会員の諸氏より多大な協力を得ている。
6. 遺物の整理及び実測、トレースにあたっては次の諸氏の協力を受けた。  
土器復元、 荒木繁行、北村 昭、加藤雄己、菊野庸三、宮本洋子  
遺物実測、トレース 宮本洋子、石浦めぐみ、菊野庸三  
写真撮影 菊野庸三
7. 本書の執筆、編集は上記の諸氏の協力を得て吉田が担当した。

8. 本遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代の複合遺跡であるが、本書を調査報告書Ⅰとして、弥生、古墳時代の住居跡等遺構の資料のみを扱った。他の資料は別途報告する。

9. 本遺跡の出土遺物及び諸記録は野々市町教育委員会が一括して保存管理している。

## 目 次

例 言	
1. 位置と環境	1
2. 周辺の遺跡	1
3. 遺跡の発見と概往の調査	4
4. 調査の経緯	4
5. 調査の経過	5
6. 微地形と層序	13
7. 遺構と遺物	13
(1) 住居跡	13
(2) 掘立柱建物跡	72
(3) 溝	75
(4) 土拵	90
(5) 石器	104
8. 小 結	104
9. 附 記	108

# 1、位置と環境

御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）は石川郡野々市町字御経塚町地内の通称『ツカダ』に所在し、国鉄野々市駅より北北東へ約 600m、御経塚町からは北東約 300mを測る。また、北陸自動車道金沢西インターより国道8号線を2km南下し、石川広域農道との交差点東側の水田に本遺跡は分布している。全国的にも著名である御経塚遺跡（縄文時代後期中葉～晩期）の史跡公園が国道を隔て位置する。

この野々市町北部一帯は稲作を中心とする田園地帯であり、美田のなかに集落が点在するのどかな風景であった。しかし、県下最大都市である金沢市に南郊することや、国道8号線の開通、市街化区域への編入などにより近年ベッドタウン化が著しくなった。本町の人口推移が昭和40年以來3倍の約30,000余人になったことから窺れよう。このような社会地理的情勢のなかに本遺跡はおかれている。

白山連峰を源とする手取川は鶴来町付近において流路を北から南西方向に変え日本海にたどりつく。この手取川によって、野々市町全域を含む扇径約12km、展開度約110度の大扇状地が形成されている。東側は富樫山地と接し低い急崖をつくり、伏見川の形成する泉野扇状地と重なり不鮮明となる。この手取川扇状地の北端部に本遺跡は立地している。

手取川の最も古い旧河道とされる富樫用水系の本呂川が東 100mに近接し、西 400mのところには郷用水系の馬場川がともにゆるく北流し犀川に注いでいる。<sup>(註1)</sup>

本遺跡地の標高は海拔約10mを測り、ほぼ東西に走るこの等高線より北方が地下水自噴地帯であった。また、南方の扇状地端部においても地下水位は高く地表面との差は余りなかったことが知られている。<sup>(註2)</sup>

発掘時においては、遺跡地の東側に現在の木呂川と80m離れこれとほぼ平行な流路方向をもつ河道跡を検出し、西側でもほぼ北に流路をもつ河道跡を検出した。この両河道跡に挟まれた巾約50mの自然堤防である微高地上に遺跡が存在していることを確認している。<sup>(註3)</sup>

(註1) 平野外喜平 1970 『秘史手取川』 北国出版社

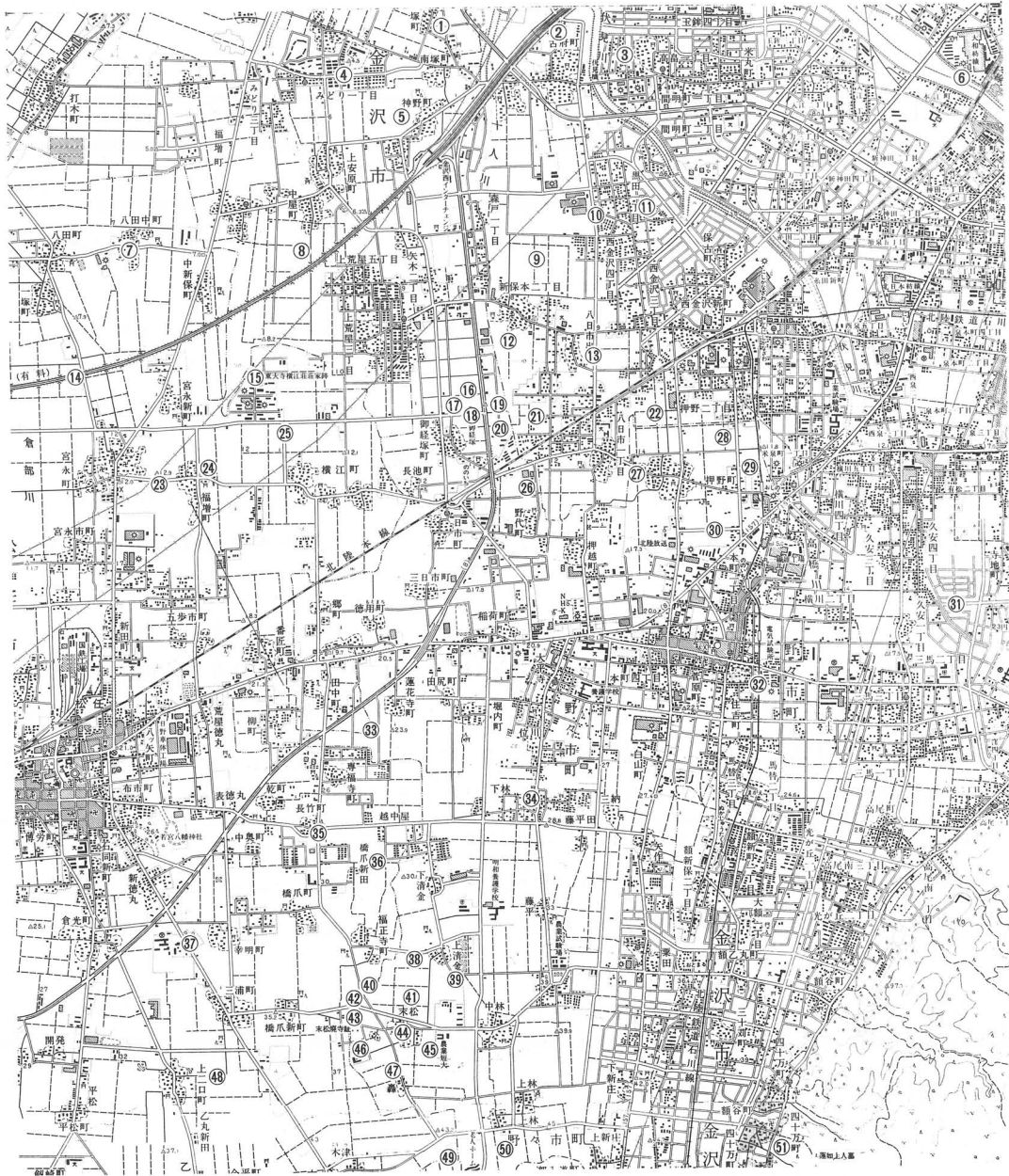
(註2) 金崎肇 1956 「押野村をめぐる自然」 『押野村史』 石川郡押野村史編集委員会  
吉岡康暢 1975 「平野扇状地の遺跡」 『金沢周辺の第四系と遺跡』

(註3) 高堀勝喜 1983 「遺跡の範囲と集落の形態」 『御経塚遺跡』 野々市町教育委員会

# 2、周辺の遺跡

御経塚ツカダ遺跡の周辺地域における遺跡を概観してみよう。(第1図)<sup>(註1)</sup>

手取川扇状地北端部は、縄文時代より弥生・古墳時代にかけて遺跡が密に分布する地域である。<sup>(註2)</sup>  
この地域に人々が住み、生活の営みは縄文時代中期に始まり、古府ヒビタ遺跡⑩、これに続き北



第1図 周辺の遺跡 (1/50000)

1500 0 500 1000 1500  
 昭和54年12月28日発行 (3色刷) 許可なく複製を禁ずる  
 著作権所有兼発行者 国土地理院

- |                     |                          |                      |
|---------------------|--------------------------|----------------------|
| 1. 北塚遺跡 (縄文・古墳)     | 18. 御経塚遺跡 (縄文)           | 35. 長竹遺跡 (縄文・中世)     |
| 2. 古府クルビ遺跡 (弥生~平安)  | 19. 御経塚ツカグ(B)遺跡 (弥生~古墳)  | 36. 橋爪遺跡 (縄文)        |
| 3. 高島遺跡 (弥生~古墳)     | 20. 御経塚アスナロ(B)遺跡 (古墳~平安) | 37. 三浦遺跡 (古墳~平安)     |
| 4. 上安原緑団地遺跡 (弥生~古墳) | 21. 八日市B遺跡 (奈良~平安)       | 38. 清金アゲトウ遺跡 (平安~中世) |
| 5. 南塚遺跡 (縄文・古墳)     | 22. 押野西遺跡 (弥生~古墳)        | 39. 末松信濃館跡 (中世)      |
| 6. 犀川鉄橋遺跡 (縄文・古墳)   | 23. 福増東川遺跡 (弥生)          | 40. 末松福正寺遺跡 (古墳)     |
| 7. 八田中雁田川遺跡 (縄文・古墳) | 24. 福増遺跡 (縄文・弥生)         | 41. 末松B遺跡 (弥生)       |
| 8. 中屋遺跡 (縄文)        | 25. 横江アズキダ遺跡 (縄文~中世)     | 42. 末松廃寺跡 (白鳳)       |
| 9. 新保本町チカモリ遺跡 (縄文)  | 26. 野代遺跡 (縄文・古墳)         | 43. タイカン遺跡 (奈良~中世)   |
| 10. 古府ヒタ遺跡 (縄文)     | 27. 上宮寺跡 (室町)            | 44. 末松古墳             |
| 11. 黒田遺跡 (古墳・平安)    | 28. 押野大塚古墳               | 45. 末松A・C遺跡 (縄文・平安)  |
| 12. 新保本町ツカグ遺跡 (弥生)  | 29. 押野大塚遺跡 (弥生~古墳)       | 46. 大館館跡 (平安~室町)     |
| 13. 八日市ヤスマル遺跡 (古墳)  | 30. 押野タチナカ遺跡 (弥生~室町)     | 47. 法福寺跡             |
| 14. 宮永遺跡 (古墳)       | 31. 円光寺向田遺跡 (古墳~平安)      | 48. 上二口遺跡 (平安)       |
| 15. 横江荘々家跡 (弥生・平安)  | 32. 富樫館跡 (平安)            | 49. 安養寺遺跡 (平安)       |
| 16. 御経塚C遺跡 (古墳)     | 33. 田中ノダ遺跡 (弥生)          | 50. 上林遺跡 (弥生・平安)     |
| 17. 御経塚経塚           | 34. 三林館跡 (安土桃山)          | 51. 額谷遺跡 (弥生~古墳)     |



塚遺跡<sup>(註3)</sup>①が所在する。後・晩期にはいと、本遺跡<sup>(註4)</sup>と複合する御経塚遺跡<sup>(註5)</sup>⑧（国指定史跡）、巨大木柱根の出土で知られる新保本町チカモリ遺跡<sup>(註6)</sup>⑨、また中屋遺跡<sup>(註7)</sup>⑧が近在する。弥生時代にはいと、扇央部に中期初頭とされる柴山出村式期の上林遺跡<sup>(註8)</sup>⑩が所在する。稲作を基盤とする集落が定着し遺跡数の増加する弥生時代後期～古墳時代前期にかけて扇端部においては押野タチナカ遺跡<sup>(註9)</sup>⑩、野代遺跡<sup>(註10)</sup>⑪、押野大塚遺跡<sup>(註11)</sup>⑫、押野西遺跡<sup>(註12)</sup>⑬、宮永遺跡<sup>(註13)</sup>⑭などが所在し、北部低湿地域には伏見川を挟んで古府クルビ遺跡<sup>(註14)</sup>⑮、高島遺跡⑯が位置している。

ここで野々市町管内で確認されている遺跡の分布状況を見ると、北部の御経塚町・押野町、南部の末松町付近に集中している。北部の遺跡の多くは縄文時代後・晩期～古墳時代前期に含まれ南部では白鳳期の末松廃寺跡を代表として、末松ダイカン遺跡⑰など律令時代の遺跡が知られている。この南部一帯は末松町在住の高村誠孝氏が熱心に踏査されたところである。

概略的に周辺の遺跡を見てきたが、本遺跡付近一帯が手取川扇状地北端部開発の中心的地域であったことが窺れる。<sup>(註14)</sup>

(註1) 1980、1982補追『石川県遺跡地図』石川県教育委員会 より抜粋した。

(註2) 高堀勝喜、南久和他 1974『金沢市古府遺跡』金沢市教育委員会

(註3) A 高堀勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」  
『石川県押野村史』押野村史編集委員会

B 高堀勝喜他 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会

(註4) (註3) Aと同じ

南久和、1983 『金沢市新保本町チカモリ遺跡 一遺構編一』金沢市教育委員会

(註5) 出越茂和 1981 『金沢市中屋遺跡』金沢市教育委員会

(註6) 湯尻修平・塚野秀章 1975 『安養寺遺跡群(上林地区)調査報告』石川県教育委員会

(註7) 昭和55年～昭和58年にかけて野々市町教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代中期～末期にかけての堅穴住居跡を16棟確認している。

(註8) 昭和56年 区画整理事業の残土より土器片を採集。

(註9) 昭和53年・56年に野々市町教育委員会が発掘調査を実施。

(註10) 四柳嘉章 1976 「松任市宮永遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』  
石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

(註11) 橋本澄夫 高橋裕 1976 「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

(註12) 橋本澄夫 1975 『金沢市高島遺跡』金沢市教育委員会

(註13) 河原純之 吉岡康暢 1971 『史跡末松廃寺』野々市町教育委員会

(註14) 吉岡康暢 「平野・扇状地の遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』北陸第四紀研究グループ

### 3、遺跡の発見と概往の調査

本遺跡は縄文時代後・晩期<sup>(註1)</sup>の御経塚遺跡と複合することから、発見された時期はこの遺跡同様明治末期の耕地整理時と思われる。

史跡御経塚遺跡保存会長の市村正規氏は、「田んぼの耕作や田植のとき、素足に土器片やヤジリがつかえてじゃまくさいと古老から聞かされた」と語っておられる。また橋本澄夫氏『石川県考古学便覧』（1970）によれば、「昭和28年、11月7日付北国新聞、柏野村八日市新保及び御経塚地内から多数の弥生式土器（土師器か）の破片が出土した」と記されている。

概往の調査について少し触れたい。御経塚遺跡については昭和31年より13次にわたり発掘調査が実施されてきた。御経塚B遺跡<sup>(註2)</sup>については前述のうち第4次調査にあたる、I 昭和48年実施の金沢バイパス西側拡張に係かる調査と、II 昭和48・49年実施の県営アスナロ団地造成に係かる調査<sup>(註3)</sup>、III 昭和56年実施の都市計画道路疋田・御経塚線築造に係かる調査<sup>(註4)</sup>の3調査があげられよう、Iの調査では本書報告土器と同時期の甕と小型台付壺が出土し、平安時代中期に属する溝状遺構が検出されている。IIの調査では12棟の堅穴住居跡（古墳時代前期1棟、奈良時代7棟）と、奈良時代後半から平安時代中頃にかけての掘立柱建物群が検出されている<sup>(註6)</sup>。IIIの調査では縄文時代晩期の住居跡1棟、弥生時代末～古墳時代の堅穴住居跡3棟、II調査と関連する掘立柱建物跡を5棟検出している。またI調査で検出された溝状遺構を国道8号線を挟み確認している。

これら一連の調査において、国道8号線の東側では弥生時代末期～古墳時代を中心とする北部区域と奈良時代から平安時代を中心とするアスナロ団地側の南部区域に2つに分かれ、都市計画道路付近では複合（縄文時代とも複合）していることが判明した。

(註1) 高堀勝喜他 1983 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会

(註2) 橋本澄夫 高橋裕 1973 『野々市町御経塚遺跡 —金沢バイパス関係埋蔵文化財調査概報』 石川県教育委員会

(註3) 石川県教育委員会が実施

(註4) 筆者 1981 『御経塚ツカダ(御経塚B遺跡)遺跡発掘調査概報』野々市町教育委員会

(註5)(註1) 滋井真 「弥生時代以降の遺物」

(註6) 高橋裕氏より教示を得た。

湯尻修平 1983 「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺横江庄遺跡』松任市教育委員会、石川考古学研究会

### 4、調査の経緯

遺跡周辺は、昭和43年に金沢バイパス（現在国道8号線）建設を契機に開発が進行した。昭和45年7月1日に金沢市を中心とする金沢都市計画区域の市街化区域に本遺跡地内は編入さ

れ、石川広域農道建設や国道拡幅工事、県営アスナロ団地造成など急激な変貌をとげた。

その後昭和54年9月に同地域の土地区画整理事業計画が策定され昭和55年度より区画街路造成工事が実施されることとなった。このため、野々市町教育委員会は、事業主体である御経塚土地区画整理組合と協議を行ない、街路部分の緊急調査を実施することとなった。（昭和55年度調査）この調査は昭和55年9月23日～11月17日にかけて行なわれ、弥生時代末期の住居跡6棟、古墳時代後期1棟が検出された。

昭和55年度調査は街路部分のみであったため、住居跡の完堀は2棟にとどまり、他の5棟は未検出部分を残すことになった。そこで野々市町教育委員会は、本遺跡内の宅地化は必至の情勢であることや、昭和55年発見の遺構完堀を目的として、昭和56年度より国庫補助事業による3ヶ年継続の緊急調査を実施すべく、事業計画を立案し採択された。

## 5、調査の経過（第3図参照）

### 昭和55年度（1980年）調査

9月23日より11月17日にかけて野々市町教育委員会が発掘調査を実施した。弥生時代末期堅穴住居跡5棟、古墳時代後期1棟を検出した。また、東側旧河道跡、溝状遺構、土拵等を確認した。調査面積は約840㎡である。

### 昭和56年度（1981年）調査

前年度の住居跡未検出部分の発掘を主目的として調査区を設定し、10月27日より12月28日にかけて、国庫補助・県費補助を受け野々市町教育委員会が発掘調査を実施した。新たに弥生時代末から古墳時代前期の堅穴住居跡2棟発見した。はた西側において河道跡と推定される落ち込みが見られ前年度調査での東河道跡に挟まれた微高地上に立地する集落の中心地と判断した。調査面積は約680㎡である。

### 昭和57年度（1982年）調査

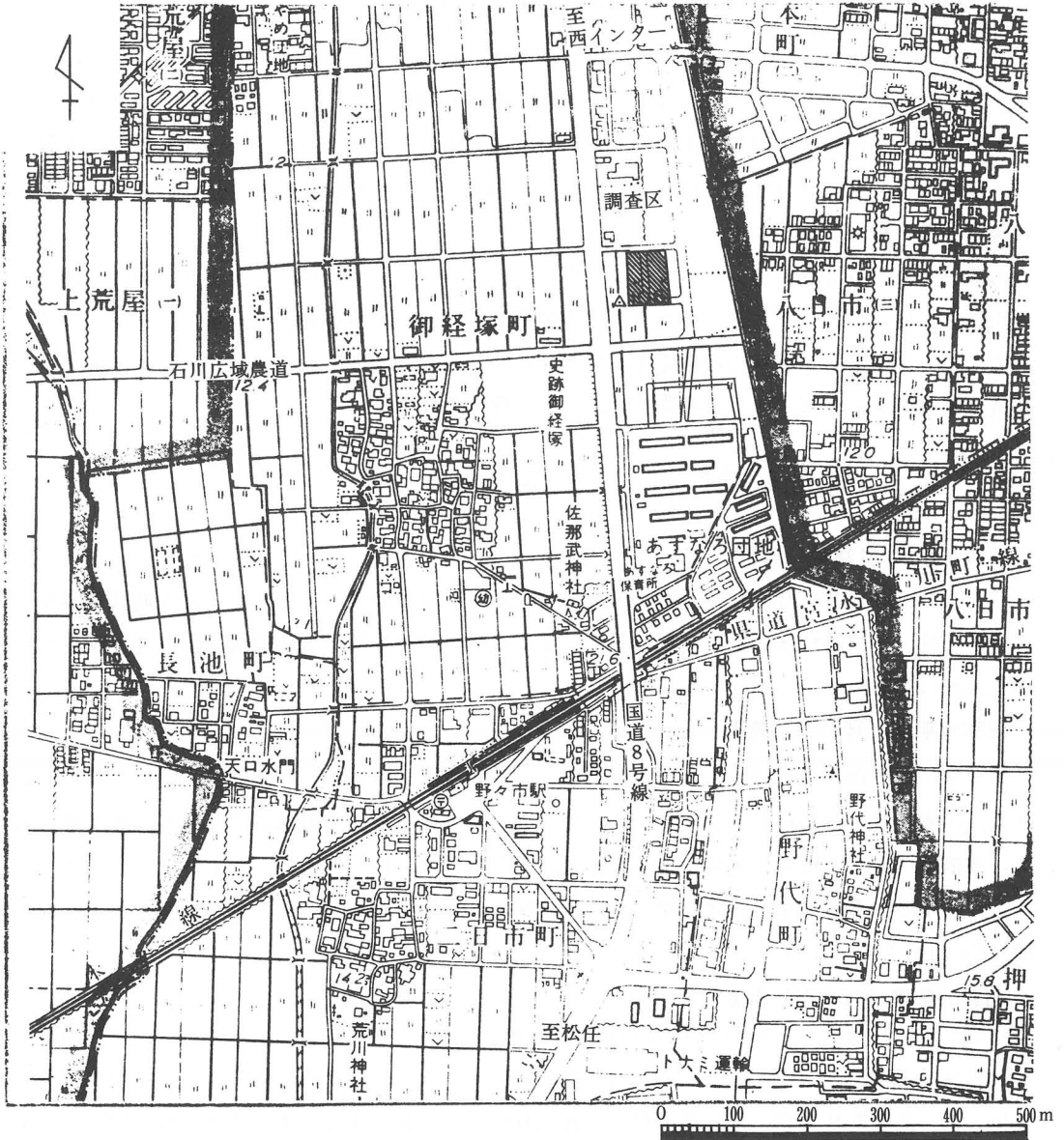
過去2年の結果により昭和55年度調査区の東側においても住居跡の存在性が高く、東河道跡までの地域を調査区と設定した。10月12日から12月25日にかけて野々市町教育委員会が発掘調査を実施した。弥生時代末期の住居跡4棟と、掘立柱建物跡と推定する2条の溝状遺構を検出した。また、トレンチ調査区を設け住居跡の確認と東河道跡の流路方向の調査を行なった。調査面積約700㎡である。

### 昭和58年度（1983年）調査

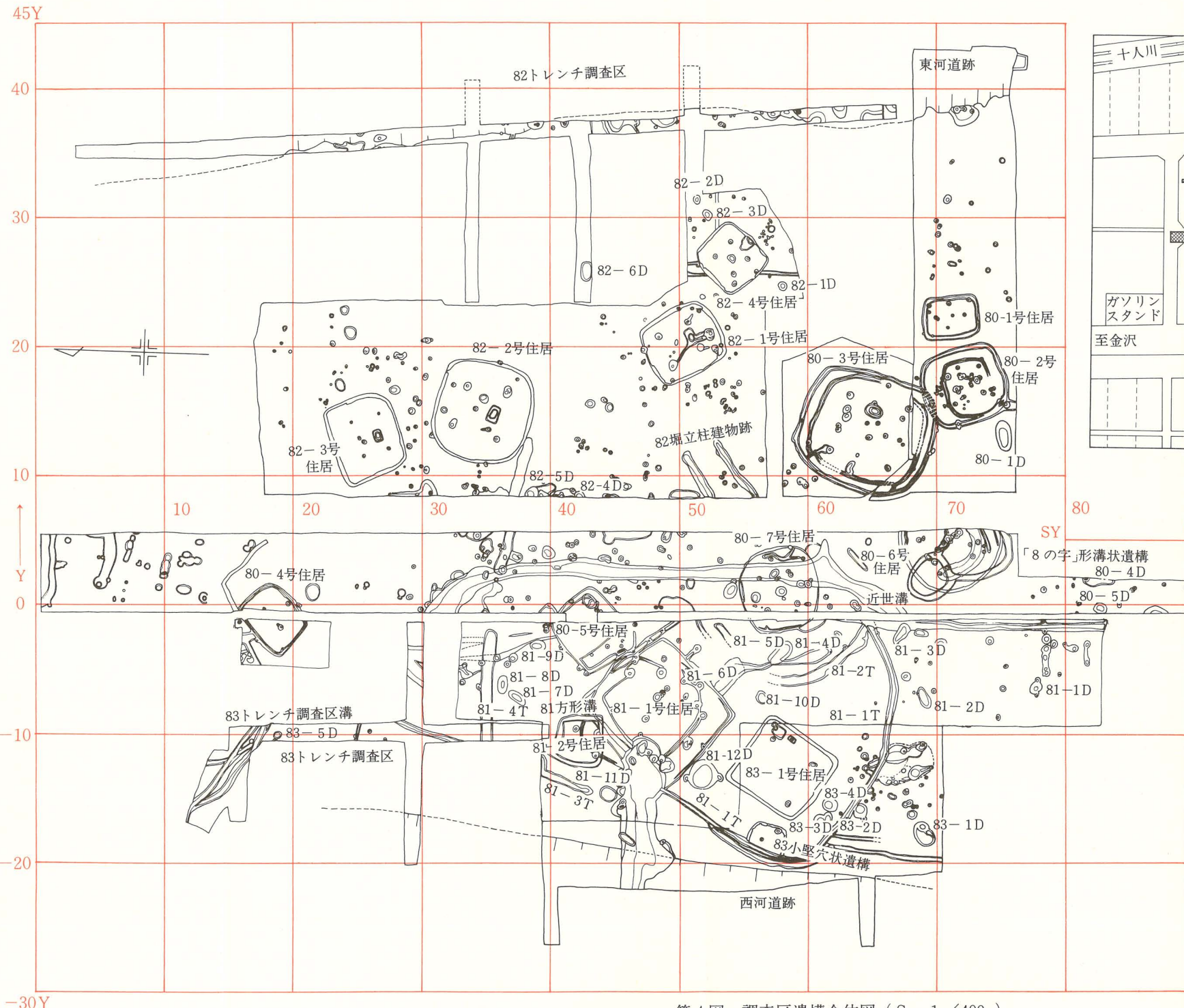
過去3ヶ年の調査を基に西河道跡と、昭和56年度に検出した溝状遺構の状況及び住居跡の分布を目的に調査区を設定した。5月24日より7月21日にかけて野々市町教育委員会が調査を実施した。古墳時代前期住居跡1棟検出と西側の河道跡の肩部を検出し、またトレンチ調査区を設け北西部における遺跡の状態を調査した。面積は約310㎡である。

以上、調査の経過に関する概略である。

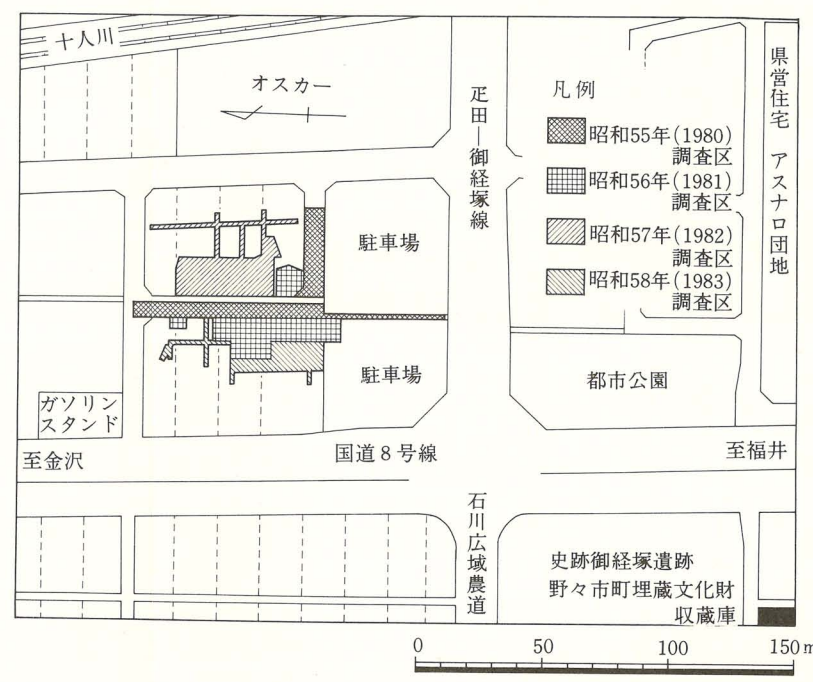
調査に全面的協力を頂いた、御経塚土地区画整理組合理事長木村敬一氏をはじめ各組合員の方々、また地元御経塚町の皆さんに謝意を申し上げます。



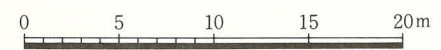
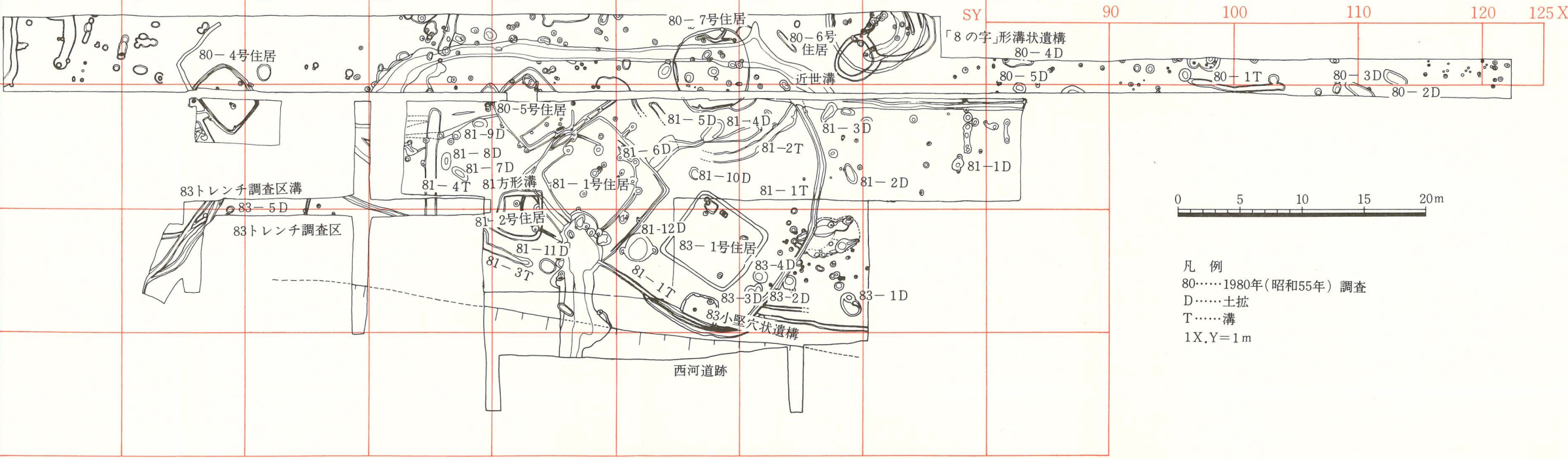
第2図 調査区の周辺 (1/10000)



第4図 調査区遺構全体図 (S = 1 / 400)



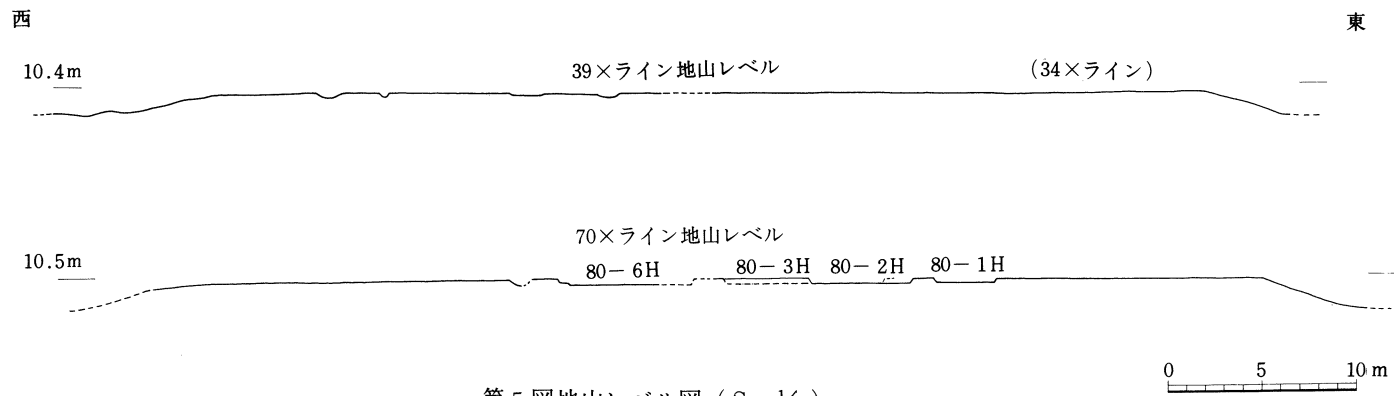
第3図 調査区位置図 (S = 1/3000)



凡例  
 80.....1980年(昭和55年)調査  
 D.....土拵  
 T.....溝  
 1X, Y = 1m







第5図地山レベル図 (S = 1/400)





## 6、微地形と層序 (第5図参照)

調査前は一面が水田であり、調査区田面の標高は北部10.22 m、南部10.82 mを測り距離100 mに対しレベル差は0.6 mであった。

調査で得られた同地点での地山の標高は北部9.9 m、南部10.5 mを測りレベル差は0.6 mである。約1/170で北に傾斜している。

第5図は東西両河道跡に挟まれた微高地(遺構検出面)の断面図である。両河道間は肩部で、39 Xライン約52m、70 Xライン約57mを測る。自然河道に数学的な検討を加えるのは場違いであるが、流路の角度より両河道は70 Xラインから北へ約200m付近で交わる可能性を持つ。

基本的な層序は、1、耕土、2、黒褐色粘質土(遺物・礫含)3、茶褐色粘質土(遺物含)、4、灰褐色粘質土(遺物含)、5、地山(黄色シルト)であるが、調査区の大半は遺物の包含層は無く耕作土直下が地山という単純さである。包含層自体もごく薄く、昭和56・58年度調査区に存在する。これは、微高地が明治期の耕地整理時に削り取られたことを物語っている。

(註) 第5図は地山レベルで推定した個所もある。

## 7、遺構と遺物

調査区全域にわたり遺構を確認している。堅穴式住居跡は14棟、倉庫跡1棟、土拵44基、溝状遺構7条、ピット120以上検出している。(第4図参照)

### 遺構の記述について

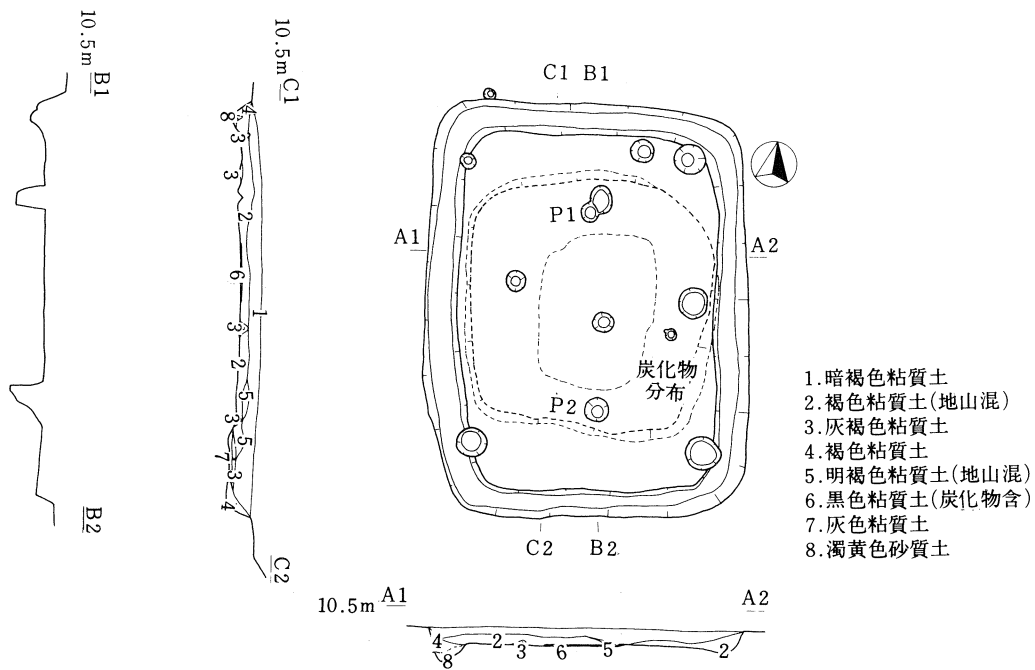
各遺構には、西暦の下2桁で表わす発見時年を冠して名称をつけた。(例、80-1号住居は1980年 昭和55年調査である)。

### 1 住居跡

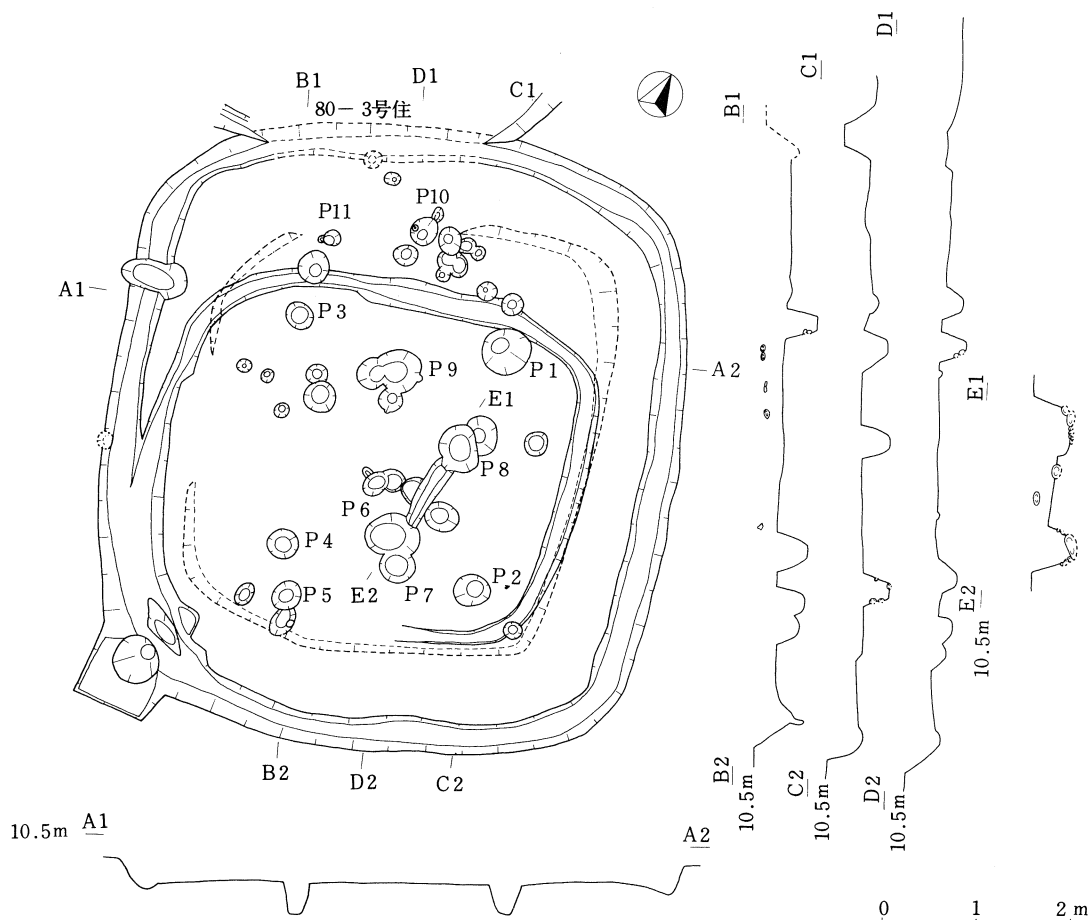
#### (1) 80-1号住居跡(第6図)

調査区の南端で検出された住居跡の一つで80-2号住居跡とは僅か60cm離れる。また、東河道跡との肩部より14mを測る。

隅丸長方形のプランを呈し、長辺4.25 m、短辺3.3 mを測る。壁溝は全周し、巾20~30cm、深さ5~10cmで、壁高は約20cmを測る。主柱は2個P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>で深さは36cm、40cm、北壁~P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>~南壁の間隔は1.1 m、2.1 m、1.15 m、このラインにより平面プランは対称する。床面積は約12.6㎡である。破線で落ち込みを示す内側の床面は固く締り焼土は検出されなかったが、中央部に炭化物の分布が認められた。覆土は基本的に上層の暗褐色粘質土と地山混褐色粘質土の2層に分かれる。土器は全て覆土上層暗褐色土から出土しており、口縁部より底部までを有する土器は皆無である。

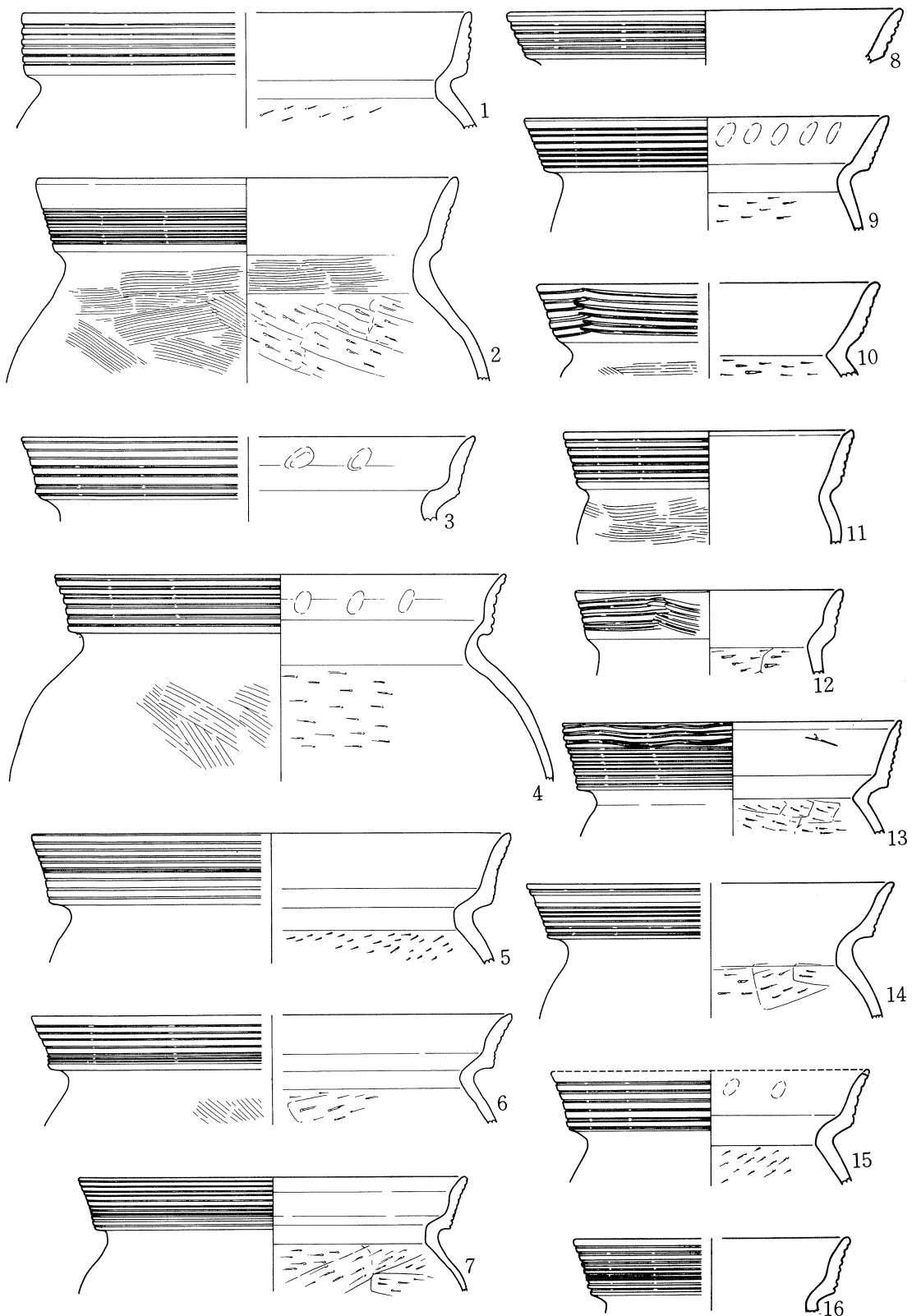


80-1号住居跡実測図

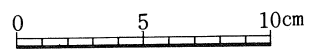


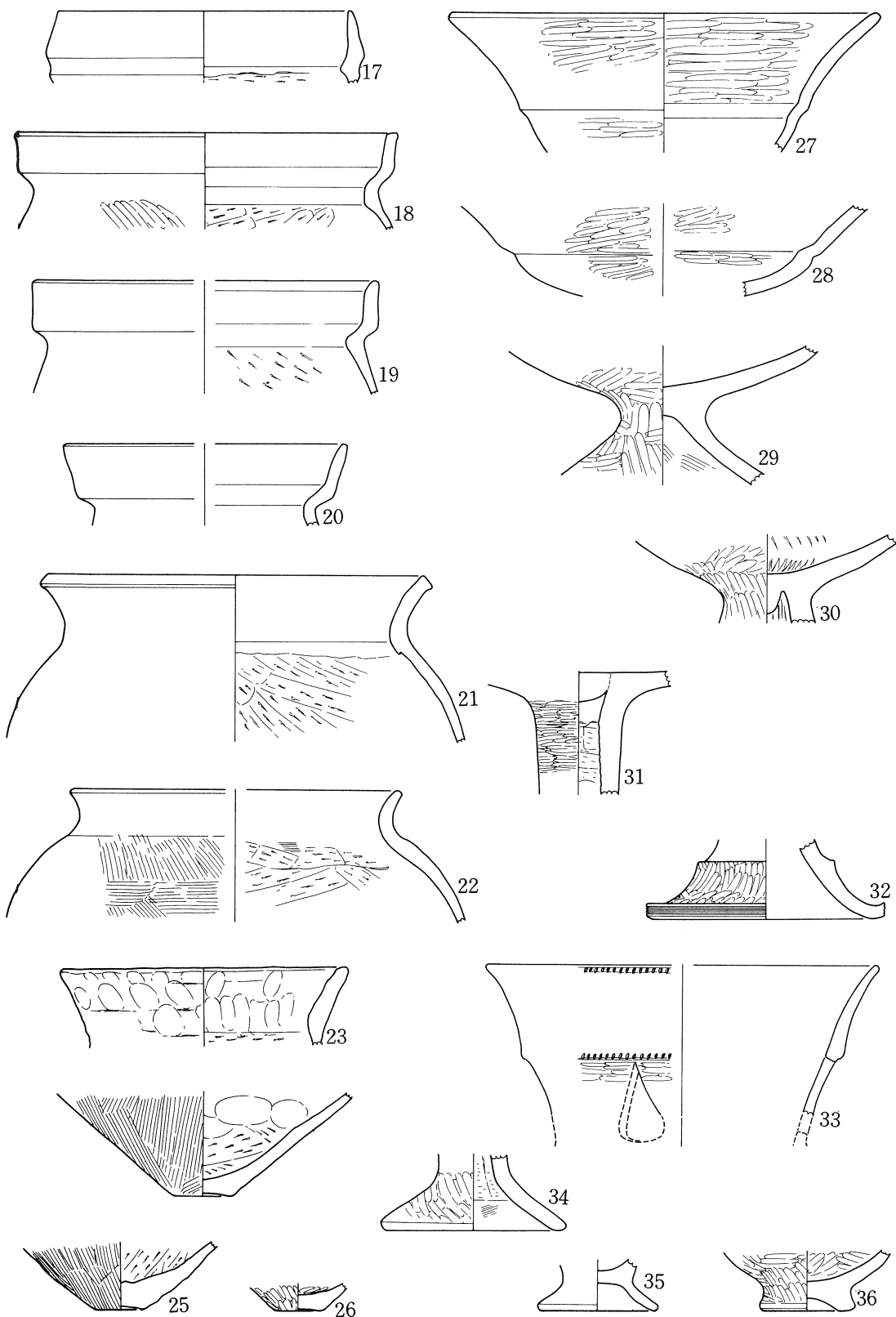
80-2号住居跡実測図

第6図 80-1号・80-2号住居跡実測図 (S=1/80)

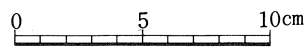


第7图 80-1号住居跡出土土器实测图(1) (S=1/3)





第 8 图 80-1 号住居跡出土土器実測図(2) (S = 1/3)



80-1号住居跡 出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部)	胎 土	色 調	焼成
第7図	1	口径 214 頸径 195	外 擬凹線 5 内 ナデ	外 不明 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	黒褐色	良
	2	口径 200 頸径 173	外 擬凹線 6 内 ナデ、ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	橙乳白色	並
	3	口径 216 頸径 179	外 擬凹線 7 スス附着 内 ナデ 指頭圧痕強		微礫 多 細粒砂 多	橙乳褐色	良
	4	口径 205 頸径 188	外 擬凹線 6 スス附着 内 ナデ 指頭圧痕	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 微礫 多	橙黄褐色	良
	5	口径 229 頸径 192	外 擬凹線 9 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 多	橙乳白色	並
	6	口径 230 頸径 194	外 擬凹線 7 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多	橙褐色	並
	7	口径 184 頸径 158	外 擬凹線 11 内 ナデ	外 スス附着 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙乳褐色	良
	8	口径 186	外 擬凹線 5 ナデ 内 ナデ		細礫 少 微粒砂 多	淡赤褐色	並
	9	口径 174 頸径 137	外 擬凹線 7 スス附着 内 ナデ 指頭圧痕	内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	乳褐色	並
	10	口径 160 頸径 130	外 擬凹線 6 内 ナデ	外 スス附着 内 ケズリ	中礫 少 微礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良
	11	口径 136 頸径 115	外 擬凹線 6 内 ナデ	外 ハケ	中礫 少 細粒砂 少 微粒砂 多	黒褐色	良
	12	口径 126 頸径 106	外 擬凹線 5 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 少 微礫 多	黒褐色	良
	13	口径 162 頸径 129	外 擬凹線 9 (2回) 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 少 微礫 少 微粒砂 多	橙乳白色	良
	14	口径 175 頸径 136	外 擬凹線 8 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良
15	口径 151 頸径 116	外 擬凹線 6 スス附着 内 ナデ	内 ケズリ	中礫 少 細粒砂 多	橙褐色	良	
16	口径 130 頸径 100	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ		細礫 少 微礫 少 細粒砂 多	橙褐色	良	
第8図	17	口径 140	外 ナデ 内 ナデ	内 ケズリ	中礫 少 細礫 少 細粒砂 多	淡褐色	良
	18	口径 182 頸径 165	外 ナデ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細粒砂 多	淡赤褐色	並
	19	口径 166 頸径 152	内 ナデ	内 ケズリ	中礫 多 細粒砂 多	橙褐色	並
	20	口径 132 頸径 105	外 ナデ 口唇面取り 内 ナデ		細礫 少 微礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良
	21	口径 180 頸径 164	外 ナデ 内 ナデ	内 ケズリ	大礫 少 微礫 多 細粒砂 多	橙乳白色	並
	22	口径 160 頸径 150	外 ナデ 内 ナデ	外 ハケ スス附着 内 ケズリ	中礫 微 細粒砂 少	褐色	良

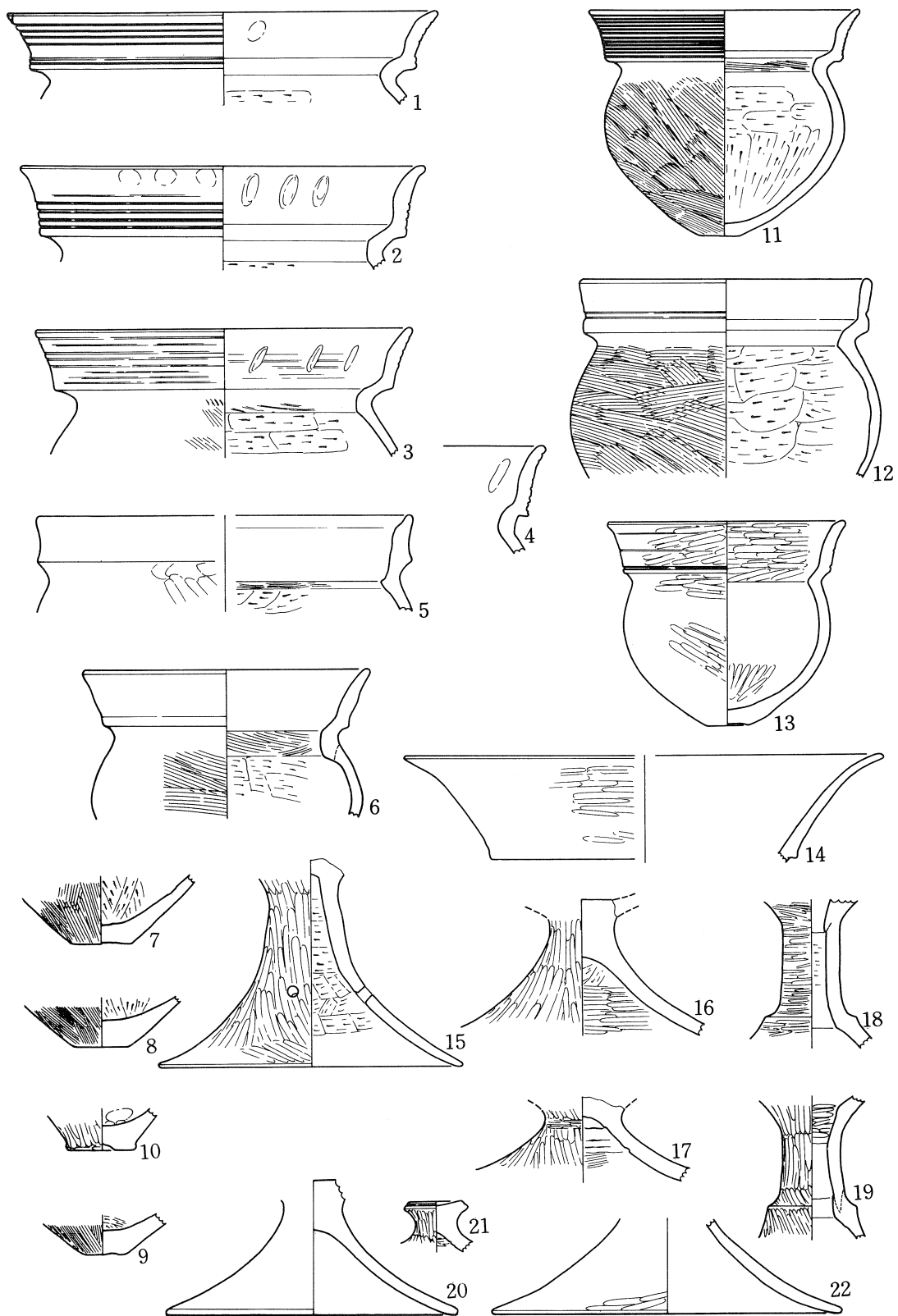
図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第8図 23	甕	口径 138 頸径 111	外 ナデ 指圧痕 内 ナデ 指圧痕	内 ケズリ	細礫 少 微礫 多	橙 褐色	並
24	底部	底径 26		外 ハケ 内 ケズリ 指圧痕	中礫 少 細礫 少 微粒砂 多	暗 褐色	良
25	底部	底径 24		外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 少 微粒砂 大	橙淡褐色	並
26	底部	底径 20		外 ヘラ磨き スス付着 内 ヘラ磨き	中礫 少 微粒砂 多	暗 褐色	良
27	高杯	口径 204	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少 細粒砂 少 微粒砂 多	黒 褐色	良
28	高杯		外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		微礫 少 微粒砂 多	淡 褐色	良
29	高杯		外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少 微礫 少 微粒砂 多	淡 褐色	良
30	高杯		外 ヘラ磨き 内	内 絞り目あり	中礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	褐 色	良
31	高杯	脚径 40		外 ヘラ磨き ナデ 内 ナデ ケズリ	大礫 少 細粒砂 多	褐 色	良
32	器台	底径 104		外 端部擬凹線 3 ヘラ磨き 内 ナデ 絞り目	細礫 少 細粒砂 少 微粒砂 少	黒 褐色	良
33	装飾 器台	口径 189	外 ヘラ磨き,きざみ目,丹ぬり 内 ヘラ磨き 丹ぬり		微礫 少 細粒砂 多	橙 褐色	良
34	高杯	裾径 900		外 ヘラ磨き 丹ぬり 内 ナデ ハケ	細礫 少 細粒砂 多	橙 赤色	良
35	台付 底部	底径 55		外 ナデ 内 ケズリ 端部ナデ	細礫 少 微礫 多	橙 褐色	並
36	台付 底部	底径 42		外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き 端部水平面取り	細礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	橙乳白色	良

凡例 土器観察表の胎土は、大礫（3～4mm）、中礫（2～3mm）、細礫（1～2mm）微礫（0.5～1mm）、細粒砂（0.2～0.5mm）、微粒砂（0.2mm以下）として観察したものを表示している。

## (2) 80-2号住居跡（第6図）

80-1号住居と近接し80-3号住居跡とは切り合い関係にある。調査後の写真整理などで、80-3号住居により切られていることを確認している。発掘調査時においては筆者が未熟な為、古い遺構より検出を始めてしまった。不手際を反省したい。

長辺6.6m、短辺6mの胴が張る隅丸長方形を呈す。床面積は32.4㎡を測る。壁溝は巾20cm～30cm、深さ約20cmで、全周するが西壁中央より住居内へ溝が分かれる。これは推定北壁より1.8m、東壁より1.1m離れ、南側では検出できなかったが、約4m辺の隅丸形状を持つ。床面をはずし地山まで出したところこの溝は消え、代わって4.4m×4mの隅丸方形を呈す浅い掘り込みを検出した。（破線で示す。）この掘り込み内は地山混褐色土で埋められ、床面と同レベルであった。これは、プラン拡大による建て替えと解釈したい。



第9图 80-2号住居跡出土土器实测图 (S=1/3)

0 5 10cm



壁高は24cm前後を測る。主柱はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>が4個台形状に配置されよう。西南主柱穴はP<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>が考えられるが、南壁からの距離がP<sub>2</sub>1.8mに対し、P<sub>4</sub>2.0m、P<sub>5</sub>1.5mを測りP<sub>4</sub>の可能性が大であろう。柱穴間はP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>2.6m、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>2.2m、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>2.1m、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>2.4mである。この柱穴に囲まれた区域東側に巾約20cm、深さ20～24cmの溝で連結されたP<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>を検出した。溝の深さはP<sub>6</sub>で20cm P<sub>8</sub>で24cmを測り北へ傾斜する。検出状況より旧の住居につくものであろう。焼土は確認していないが、P<sub>9</sub>周辺は炭化物が厚さ2cm程度で分布していた。P<sub>9</sub>の土層を観察すると土層は前述の土層との中間に地山混褐色土を挟み下層には炭化物混の黒色粘質土が存在していた。P<sub>9</sub>を一度埋め同一個所を同一方法で利用（焚火か）したものであろう。P<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>間は出入口であろうか。また南西隅より住居外南方向へ伸びるであろう深さ約10cmの溝の端を検出した。土器のほとんどは覆土からの出土であるが、第9図6、18は床面より約3cm浮き、12はP<sub>7</sub>の肩部より出土している。13は完形で床面より7cm浮いて出土した。

### 80- 2号住居跡 出土土器観察表

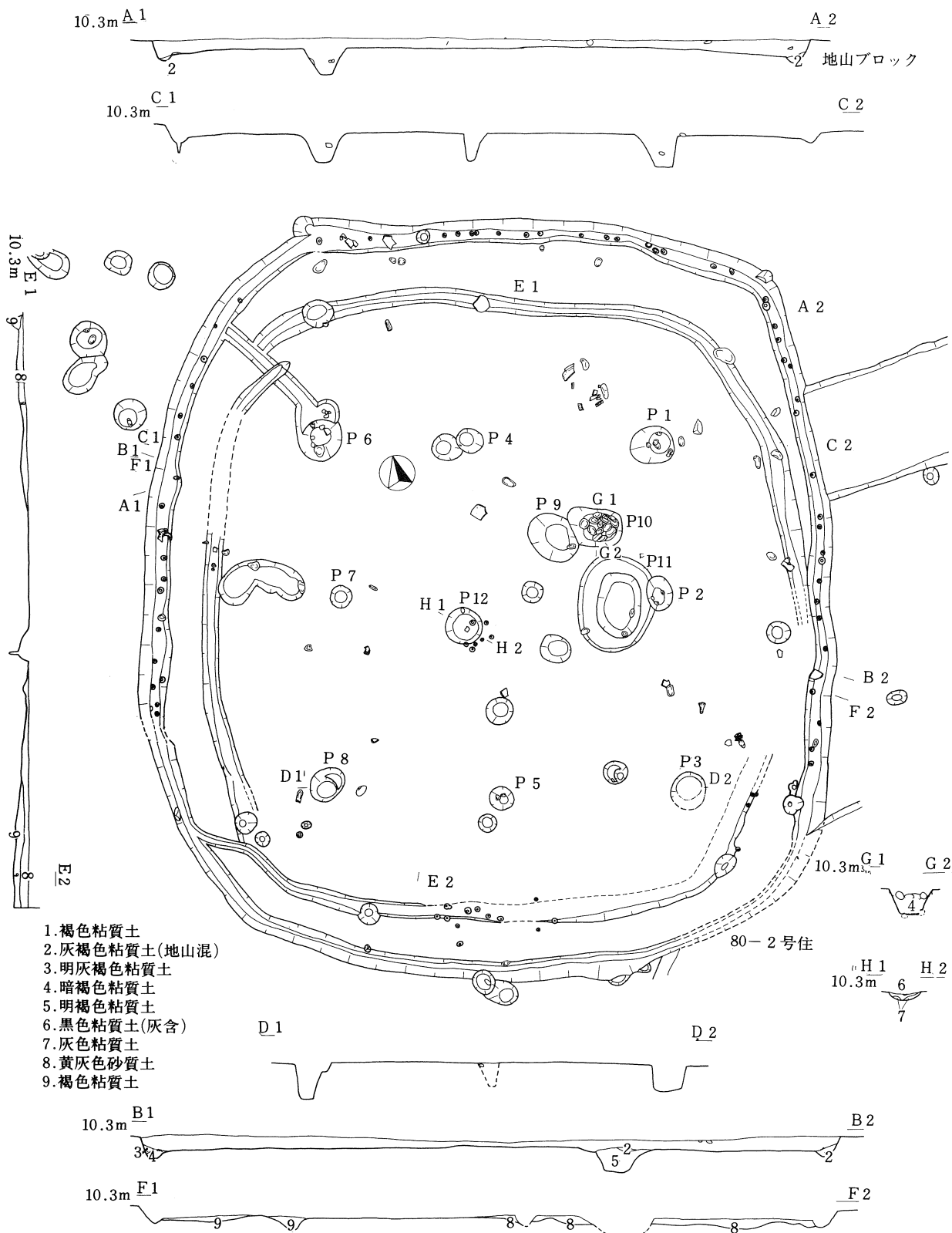
図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第9図 1	甕	口径 205 頸径 165	外 擬凹線4 指頭圧痕 内 ナデ	内 ケズリか	細礫 多	淡橙褐色	良
2	甕	口径 193 頸径 152	外 擬凹線4 上半ナデ 指頭圧痕 内 ナデ 指頭圧痕	内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	明褐色	良
3	甕	口径 178 頸径 141	外 擬凹線10 ナデ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多	黒褐色	並
4	甕		外 擬凹線9 指頭圧痕 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	淡褐色	やや不良
5	甕	口径(180) 頸径(168)	外 ナデ 内 ナデ 頸ハケ	内 ケズリ	微粒砂 多	淡茶褐色	良
6	甕	口径 134 頸径 106 胴径 129	外 ナデ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	明褐色	良
7	底部	底径 28		外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多	褐色	並
8	底部	底径 25		外 ハケ 内 ケズりのあとナデか	中礫 少 細粒砂 多	灰褐色	良
9	底部	底径 18		外 ハケ 内 ケズりのあとナデか	細礫 多	灰褐色	良
10	底部	底径 32		外 へら磨き 底ナデ 内 指頭による押え	微粒砂 多	橙褐色	良
11	甕	口径 128 頸径 98 胴径 115 底径 18 器高 109	外 擬凹線12 ナデ(ハケ目消す) 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ、下半ケズリ上げ 底ケズリのあとナデ	細礫 多	茶褐色	良
12	甕	口径 137 頸径 123 胴径 149	外 ナデ 擬凹線1 ハケ 内 ナデ	外 ハケ(ヨコ→タテ) 内 ケズリ	細粒砂 多 微粒砂 多	黒褐色	良
13	甕	口径 112 頸径 90	外 擬凹線3 へら磨き 内 へら磨き	外 へら磨き 内 へら磨き	細礫 多 微粒砂 多	赤乳白色	並
14	高坏	口径(229)	外 へら磨き 内 へら磨きか		細礫 少 微粒砂 少	橙褐色	並

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底 部)	胎 土	色 調	焼成
15	第9図 高坏	裾径 145		外 透孔3 脚へら磨き 内 ケズリ 裾ナデ	細礫 多 微粒砂 多	橙 褐 色	良
16	高坏			外 へら磨き 内 へら磨き	微礫 少	橙 色	良
17	高坏			外 へら磨き 内 へら磨き(一部ハク)	微粒砂 少	乳 褐 色	良
18	器台			外 へら磨き 丹ぬり痕 内 ナデか	微粒砂 多	淡 褐 色	良
19	器台			外 へら磨き 内 ケズリのちナデ	微粒砂 少	灰茶褐色	良
20	蓋	裾径 134		外 へら磨き 内 へら磨き	細礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
21	蓋	つまみ径 32		外 へら磨き 内 ケズリのあとへら磨きか	微礫 少 微粒砂 少	茶 褐 色	良
22	蓋	裾径 168		外 へら磨き 内 上方ナデ、下半へら磨き	微粒砂	明 褐 色	良

### (3) 80-3号住居跡 (第10図)

80-2号住居跡と複合し、調査区の南側で検出した。長辺10.3m、短辺9.1mを測り隅丸長方形を呈す、検出した住居跡のなかでは最大の規模で床面積81.7㎡を測る。壁高は20cm残存し、壁溝は巾20cm前後、深さ10cmで壁に沿い全周する。壁溝内には径5~7cmの小ピットを20cm~30cmの間隔で検出した。<sup>(註1)</sup>主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>が方形に配置される。P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間4.7m、P<sub>1</sub>-P<sub>6</sub>間4.6m、P<sub>3</sub>-P<sub>8</sub>間4.9m、P<sub>6</sub>-P<sub>8</sub>間4.6mを測り、また各対応する壁よりこのラインまでの距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>ラインが約3m、他の3つはいずれも約2mで、主柱穴を結ぶ方形は住居プラン内やや南に位置する。この主柱穴間にひと回り小さい柱穴P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>が配置される。P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間中心内側に2段掘りの特殊ピットP<sub>11</sub>が位置する。長軸132cm、短軸106cmの平面楕円状で、深さ10cm、巾10cm~20cmの段を持ち、内側に、深さ20cmの90cm、60cmを測る楕円状のピットを検出した。P<sub>10</sub>は深さ34cmを測り、同10cmのレベル面で自然石により覆われていた。焼土は検出されなかったが、P<sub>12</sub>には炭化物(灰)が堆積していた。壁より約1m内側に床面を検出したところ隅丸方形を呈する濁黄褐色のプランが現われ、長辺8.3m、短辺7.7mの同形を呈する溝が検出された。旧の住居跡の輪郭を示す壁溝であろう。80-2号住居跡と同様、プラン拡大による建て替えと考慮しており、主柱穴は共用されたものと推察する。覆土は、暗褐色粘質土であり、上層は耕作時の攪乱土が混じる。

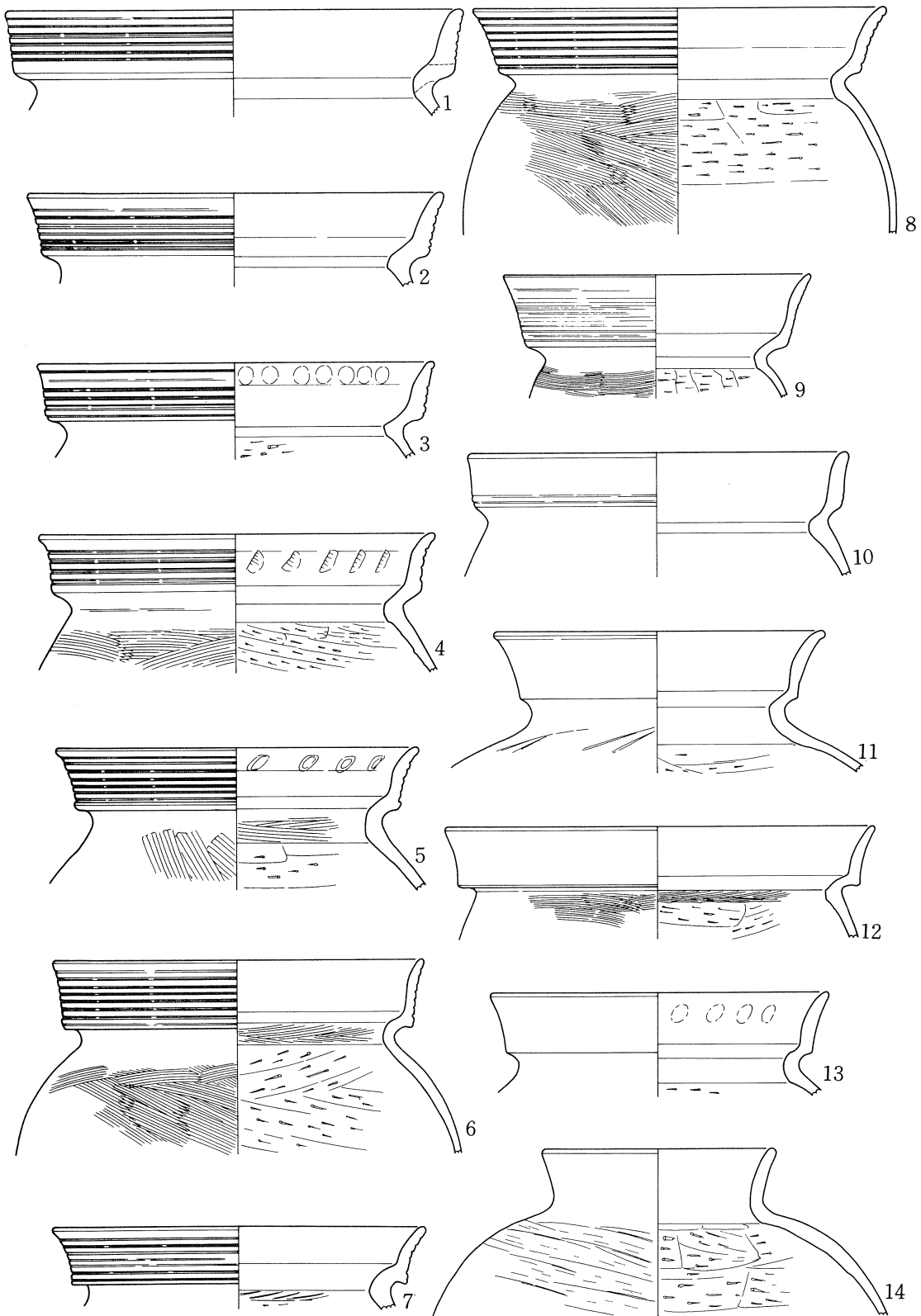
土器はほとんどが覆土より出土した。床面より第11図7、8が、壁溝より5、14、第12図29が出土した。また、はり床下より、19、31、34が出土している。



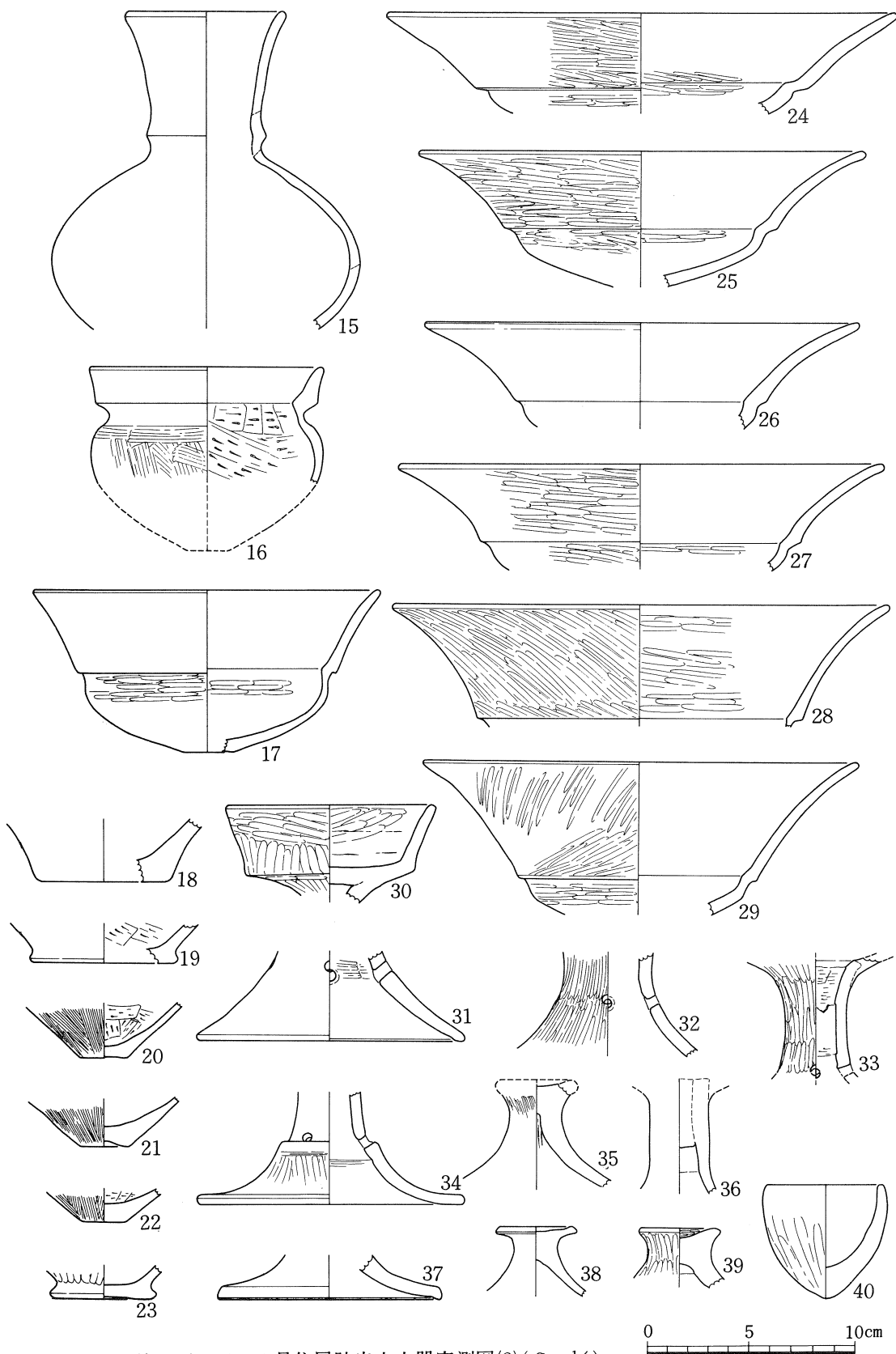
1. 褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土(地山混)
3. 明灰褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 明褐色粘質土
6. 黒色粘質土(灰含)
7. 灰色粘質土
8. 黄灰色砂質土
9. 褐色粘質土

第10図 80-3号住居跡実測図 (S=1/80)

0 1 2 m



第11图 80-3号住居跡出土土器実測図(1) (S=1/3)

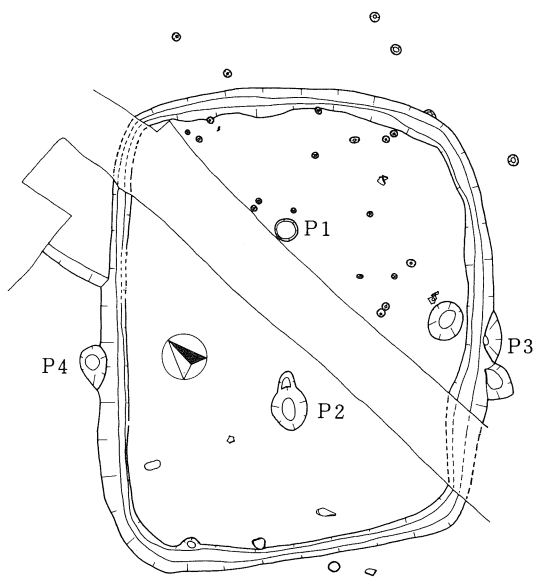


第12图 80-3号住居跡出土土器実測图(2) (S=1/3)

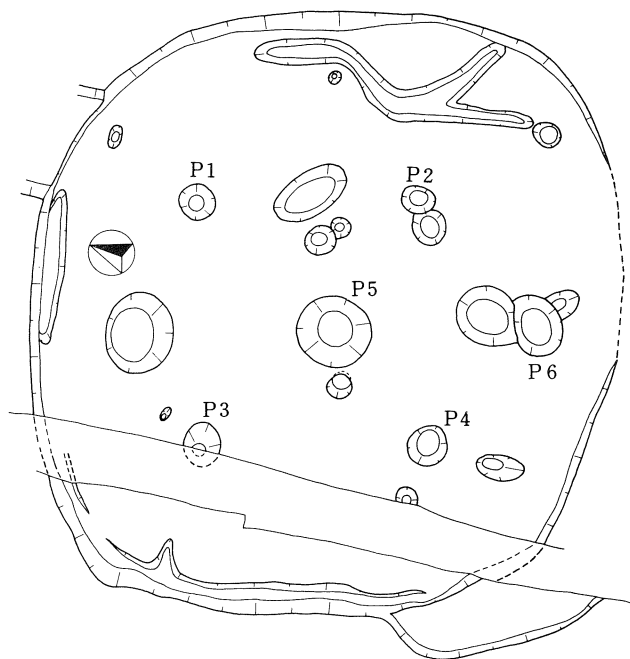
80-3号出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第11図	1	口径 214 頸径 187	外 擬凹線 6 ナデ 内 ナデ		中礫 少 微粒砂 多	灰 褐 色	やや 不良
	2	口径 196 頸径 165	外 擬凹線 6 (不規則) 内 ナデ ケズリ		細礫 少 微粒砂 多	灰 褐 色	やや 不良
	3	口径 187 頸径 159	外 擬凹線 5 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ケズリ		中礫 少 微粒砂 多	灰 褐 色	良
	4	口径 186 頸径 157	外 擬凹線 4 ナデ 内 ナデ ケズリ		細礫 多	淡茶褐色	良
	5	口径 171 頸径 137	外 擬凹線 6 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 微粒砂 多	黒 褐 色	良
	6	口径 176 頸径 148	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多	茶 褐 色	良
	7	口径 175 頸径 143	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多	暗茶褐色	やや 不良
	8	口径 194 頸径 155 胴径 205	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 微粒砂 多	褐 色	やや 不良
	9	口径 144 頸径 105	外 ナデ ナデ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少	淡茶褐色	良
	10	口径 172 頸径 160	外 擬凹線残る		中礫 少 細礫 少 細粒砂 多	橙 褐 色	やや 不良
11	口径 154 頸径 120	外 ナデ ナデ 内 ナデ	内 ケズリ	細礫 少	灰乳褐色	やや 不良	
12	口径 202 頸径 173	外 ナデ ナデ 内 ナデ ケズリ	外 ハケ	細礫 少 微粒砂 少	橙 褐 色	良	
13	口径 158 頸径 133		内 ケズリ	微礫 多	橙 褐 色	良	
14	口径 110 頸径 100	外 ナデ ナデ 内 ナデ	外 ケズリ 内 ケズリ	細礫 多	橙 褐 色	良	
第12図	15	口径 75 頸径 54 胴径 150			細礫 少 微粒砂 多	灰赤褐色	良
	16	口径 112 頸径 94 胴径 112	外 ナデ ナデ 内 ナデ	外 ケズリナデ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多	橙乳白色	良
	17	口径 167 頸径 118 器高 79	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	細礫 多	黄 褐 色	良
	18	底部 底径 63			細礫 多	明 褐 色	良
	19	底部 底径 72		内 ケズリ	細礫 多	乳 褐 色	良
	20	底部 底径 22		外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細粒砂 多	茶 褐 色	良
	21	底部 底径 23		外 ハケ 内 ケズリか	中礫 少 細粒砂 多	暗灰褐色	不良
	22	底部 底径 20		外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多	灰茶褐色	良

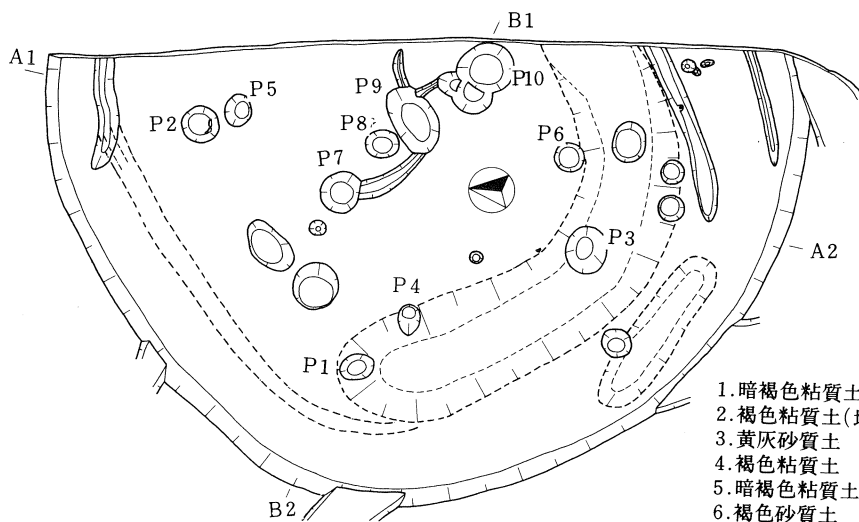
図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第12図 23	碗	底径 52		外 ヘラ磨き 内 ケズリ, ナデ	微粒砂 多	黄乳褐色	良
24	高坏	口径 243	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		微粒砂 少	暗褐色	良
25	高坏	口径 214	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少	橙褐色	良
26	高坏		外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨きか		微粒砂 少	淡橙色	良
27	高坏	口径 232	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き		微粒砂 多	淡茶褐色	良
28	高坏	口径 238	外 ヘラ磨き (斜方向) 内 ヘラ磨き		中礫 少 微粒砂 多	暗灰色	やや不良
29	高坏	口径 210	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨きか		細礫 少 微粒砂 多	橙褐色	並
30	高坏	口径 98	外 口辰ナデ ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少 細粒砂 多	乳褐色	良
31	高坏	裾径 130		外 ヘラ磨き 内 ケズリ, ナデ	微粒砂 少	橙 色	やや不良
32	高坏			外 ヘラ磨き 内 ナデ	微粒砂 少	橙褐色	良
33	器台			外 ヘラ磨き 内 ケズリ	微粒砂	淡茶褐色	良
34	器台	裾径 130		外 不明 裾部ヘラ磨き	微礫 少 微粒砂 多	橙褐色	良
35	蓋		つまみ部 外 ヘラ磨きか 内 ケズリ後 指頭ナデ		微礫 少	黄乳褐色	良
36	高坏			外 ヘラ磨きか 内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 少	赤褐色	やや不良
37	高坏			裾 外 ナデ 内 ナデ	中礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
38	蓋	つまみ径39			細礫 少 微粒砂 少	淡灰色	良
39	蓋	つまみ径40	外 ヘラ磨き 内 ナデ		微粒砂 多	明褐色	良
40	小型 砲弾形		外 ヘラ磨きか 内 ケズリの後指頭ナデ		細礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良



80-4号住居跡

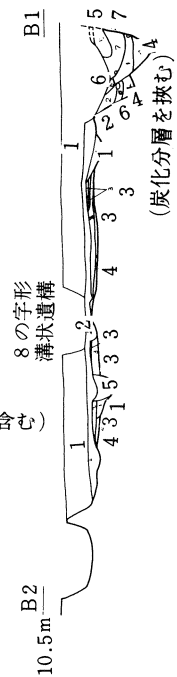


80-7号住居跡



80-6号住居跡

1. 暗褐色粘質土
2. 褐色粘質土(地山多く含む)
3. 黄灰砂質土
4. 褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土(地山混)
6. 褐色砂質土
7. 褐色粘質土(地山混)

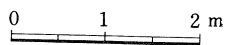


10.5m A1

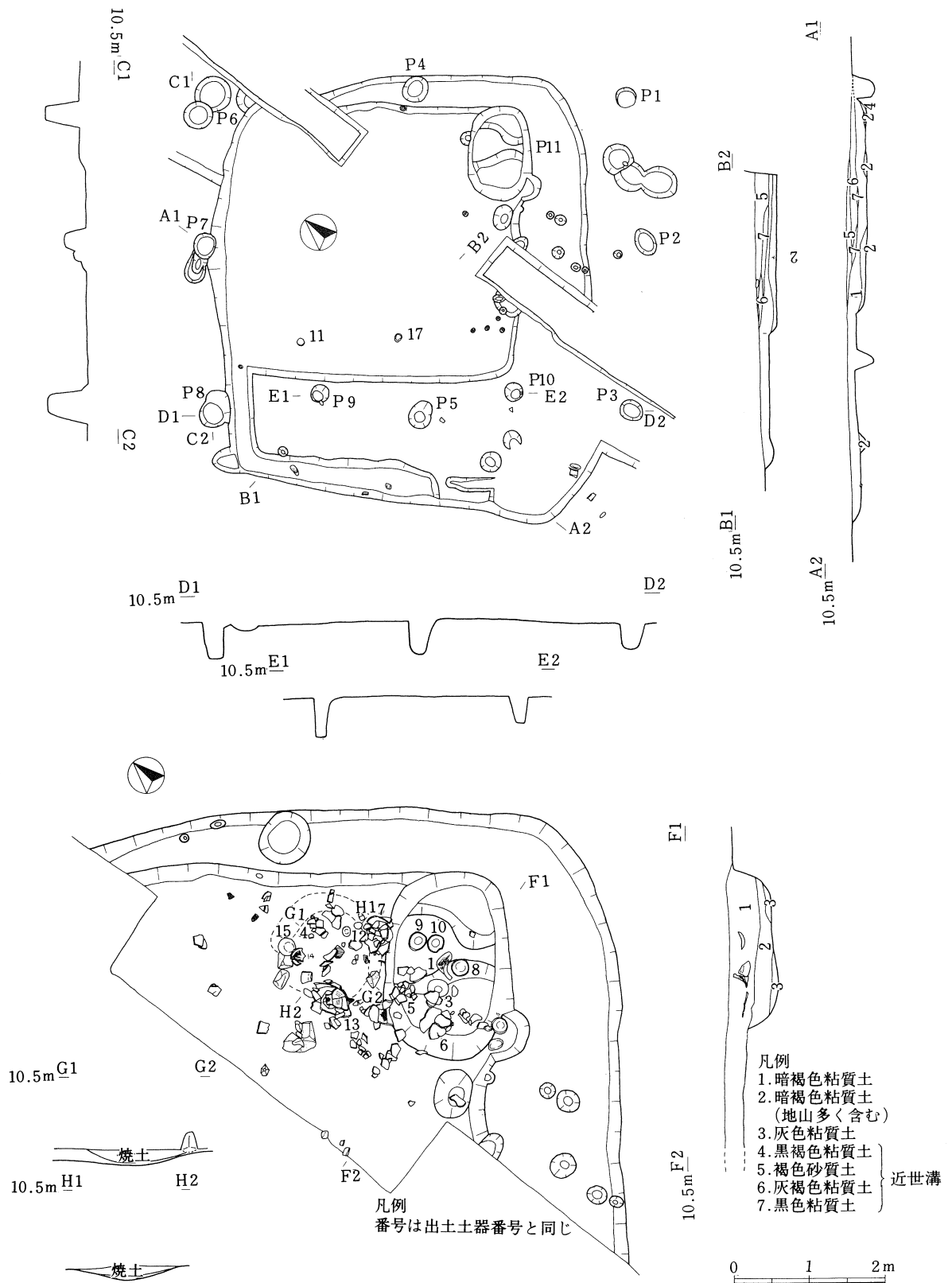
A2

10.5m B2

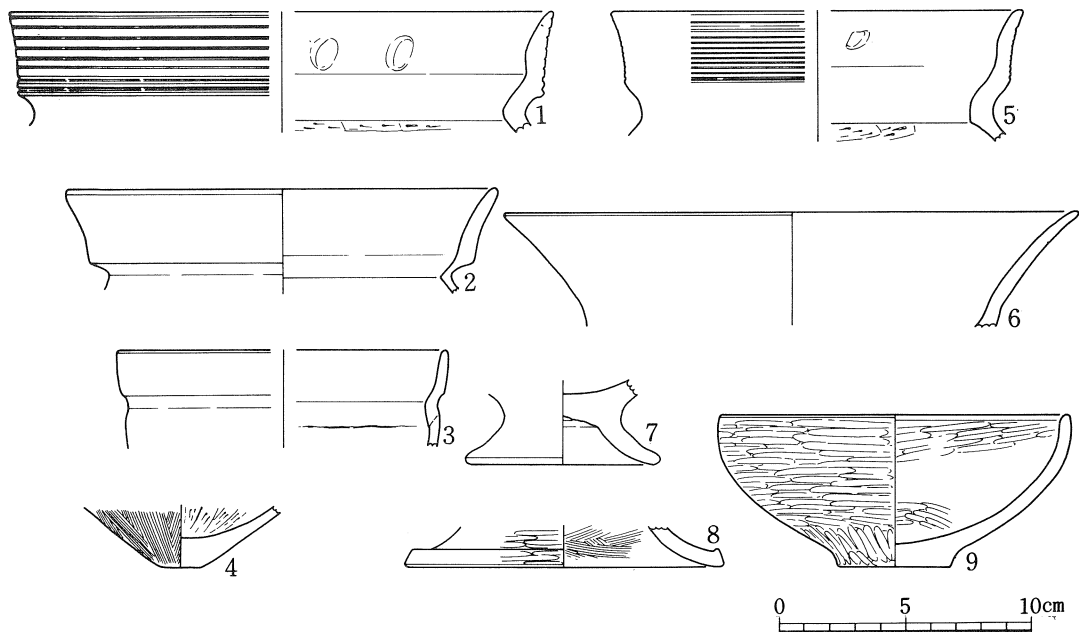
第13図 80-4号・6号・7号住居跡実測図 (S=1/80)







第14図 80-5号住居跡実測図 (S=1/60) 土器出土実測図 (S=1/40)



第15図 80-4号住居跡出土土器実測図 (S=1/2)

#### (4) 80-4号住居跡 (第13図)

調査区の北部において80、81年に検出したもので、集落北端の住居跡と推定している。長辺5m、短辺4mの隅丸長方形を呈すが中央部は近世の用水が南北に走る。壁高は24cm前後を測り、壁面周囲に巾6~12cm、深さ5~10cmの壁溝がめぐる。支柱穴は2個で長辺の軸に平行し、北東壁~P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>~南西壁それぞれの間隔は1.5m、1.9m、1.6mを測る。径約20cm、深さは床面より35cmを測る。また柱穴を結ぶラインでほぼ対象となるP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>が壁と重なり深さ約20cmで掘られている。

炉跡は確認されなかった。覆土は、用水溝の褐色砂質土と黒褐色粘質土であった。土器の出土は少量で、第15図1、9が床面より出土した。

#### 80-4号住居跡 出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第15図 1	甕	口径(212) 頸径(193)	外 擬凹線8 内 ナデ・指頭圧痕	内 ケズリ	微礫 多	橙乳白色	良
2	甕	口径 168 頸径 134	外 ナデ、口唇丸い 内 ナデ		微礫 少 微粒砂 少	乳褐色	良
3	鉢	口径(130) 頸径(121)	外 内 ナデか		細礫 多	明褐色	並
4	底部	底径 15		外 ハケ 底ケズリ 内 ケズリ	細粒砂 多	灰褐色	良

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
5	第15図 甕	口径(160) 頸径(137)	外 擬凹線14か 内 ナデ・指頭圧痕	内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 少	灰 褐 色	並
6	高坏	口径(224)	外 内 ヘラ磨き・赤彩痕		微礫 少 微粒砂 多	明 褐 色	やや 不良
7	台付 底部	台径 76			細礫 少 微粒砂 小	乳 白 色	並
8	高坏	裾径(125)		外 ヘラ磨き 内 ハケ状	微粒砂 少	明 褐 色	良
9	埴	口径 132 底径 45 器高 60	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き後ナデ	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き後ナデ	微礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良

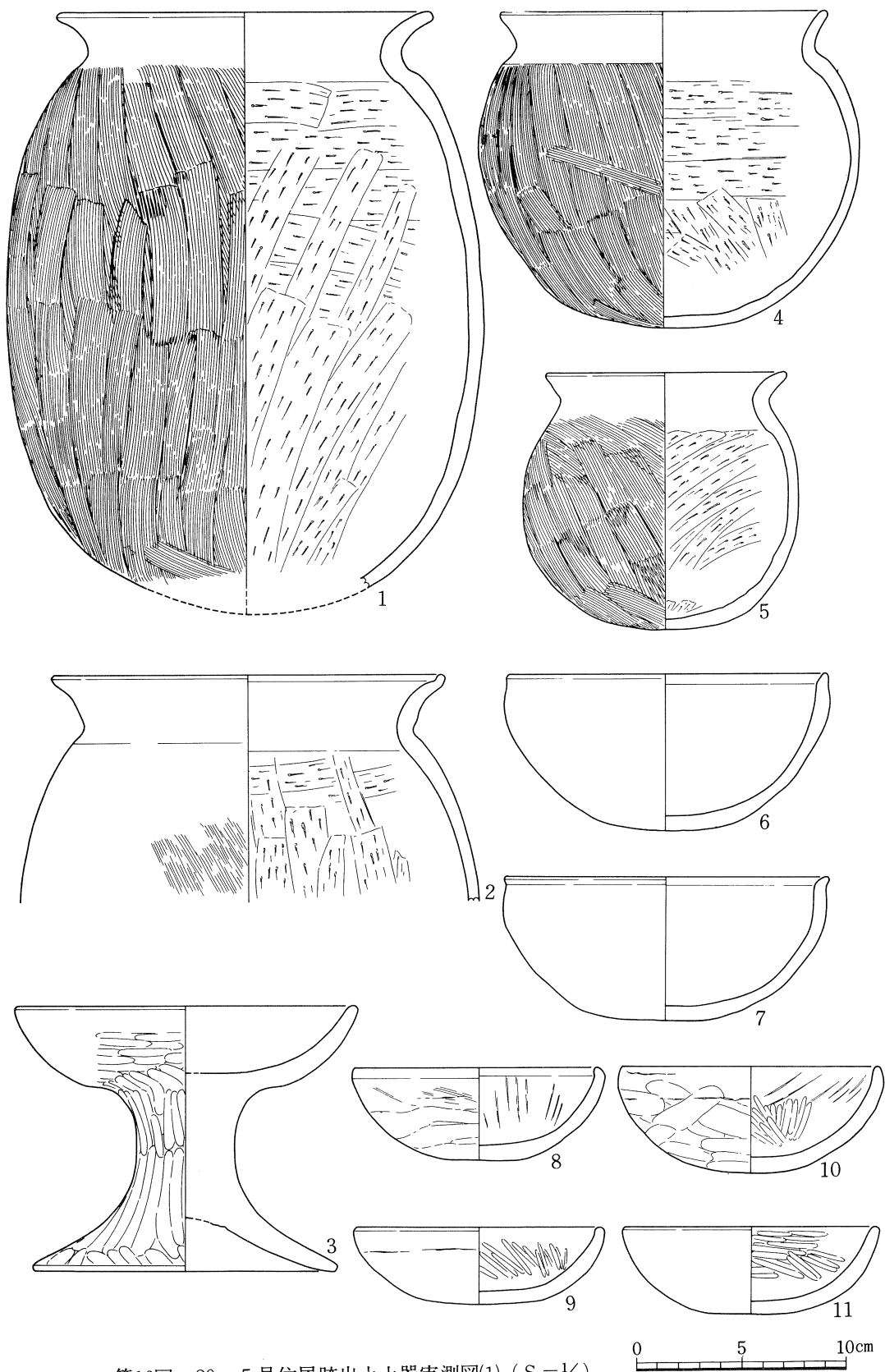
#### (5) 80-5号住居跡 (第14図)

調査区のほぼ中央部で発見し、80、81年において検出した。住居中央部には近世の用水溝が走る。長辺5.7m、短辺4.8mの隅丸長方形のプランを持つであろう。

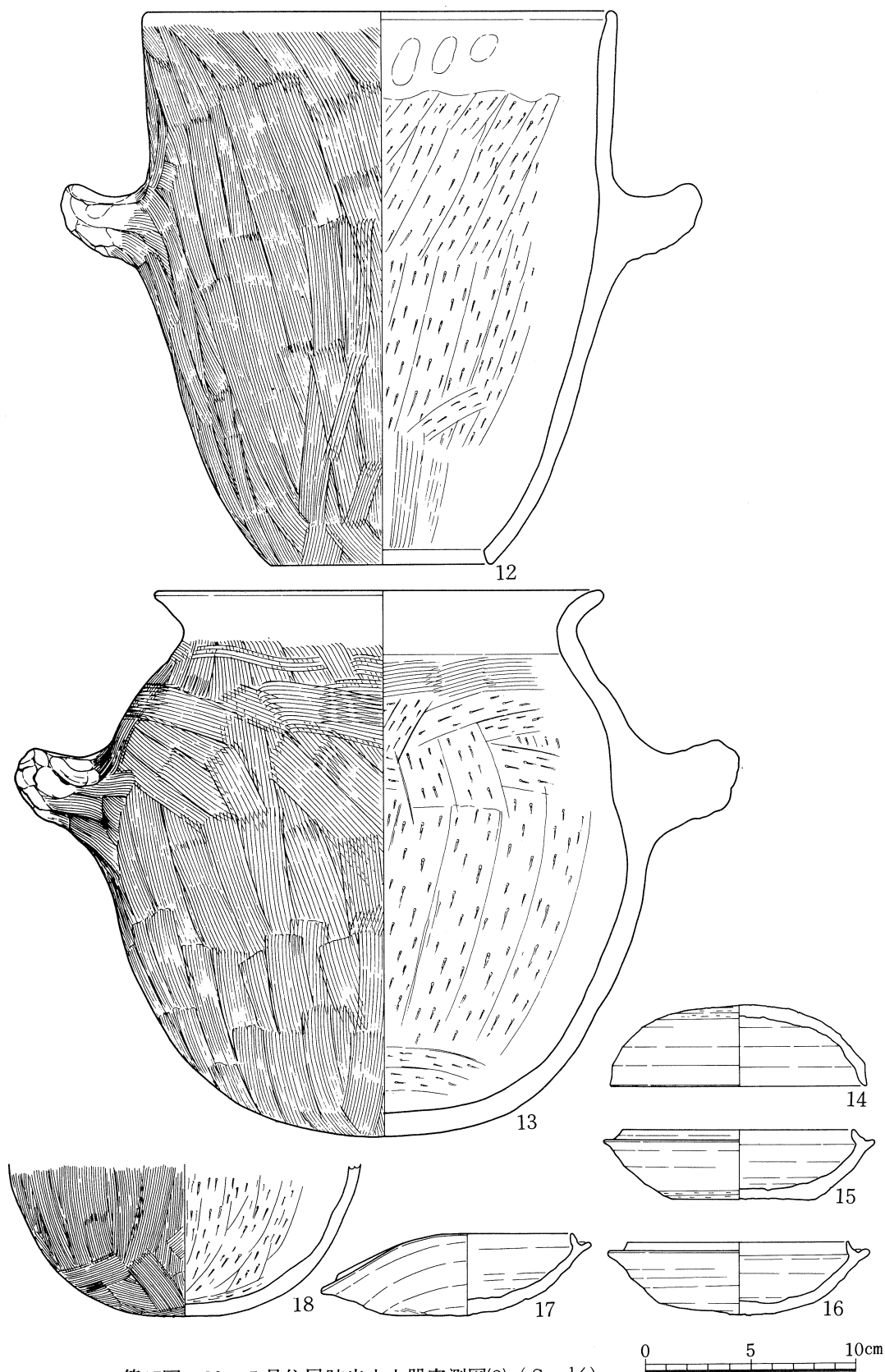
段状構造を有し、外側壁高約10cm、内側壁高は10cm～15cmを測る。高低2つの面を持ち高い面を段状部分、低い面を床面とすると、床面は一辺3.6mの方形をなす。この方形の北西辺を除き他の3辺に段状部分を有し、北東辺巾約30cm、東南辺巾約80cm、西南辺巾約150cmを測る。面積は25.3㎡のうち床面は12.1㎡である。主柱穴を8個もち2間×2間に配置される。P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は間隔1.8m、2.2m、計4m。P<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>は2m、2.2m、計4.2m。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>-P<sub>6</sub>は2.9m、2.6m、計5.5m。P<sub>3</sub>-P<sub>5</sub>-P<sub>8</sub>は2.8m、2.7m、計5.6mを測る。このうち南側のP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>列と相対するP<sub>6</sub>～P<sub>8</sub>列は住居掘り方の外部に位置し、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は段状部に位置する。またP<sub>5</sub>を中点としてP<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>が段状部に位置し、この間隔は2.6mを測る。P<sub>11</sub>はカマドの南側、床面の東南隅に位置し長軸1.2m、短軸0.8m、深さは20cmを測る。貯蔵穴であろうか。床面はP<sub>2</sub>～P<sub>7</sub>ラインで対称となり、P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>ラインで住居のプランは対称となる。P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>が段状部に位置し間隔は2.6mを測る。P<sub>11</sub>はカマドの横、床面の東南隅に位置し、長軸1.2m、短軸0.8m、深さは20cmである。貯蔵穴が推定しえる。

北東辺南より床面壁際に径約60cmの円状に厚く焼土の堆積が認められ、これをとりまくように馬蹄形を成す薄い灰色粘質土を検出した。この灰色粘質土が焼けていないことや、煮炊時に土器の支脚として使われた焼け石が移動していることから上部はかなり削平されたと推測される。このことから馬蹄形を成すカマドが設置されていたと思われる。<sup>(註2)</sup> 覆土は上層より近世用水溝の影響である褐色粘質土、遺物を含む黒褐色粘質土と地山混灰褐色粘質土に分かれる。

土器は本住居跡で使用された土器が全点出土していると思われる。ほとんどがカマド周辺の床面より出土した。



第16图 80-5号住居跡出土土器実測図(1) (S=1/3)



第17图 80-5号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)

80-5号住居跡 出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部) 部	胎 土	色 調	焼成
第16図 1	甕	口径 178	外 ハケ、ハケ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ 内 下方ケズリ(横) 下半ケズリ(縦)	細礫 多 微粒砂 多 細粒砂 多	橙 褐色	良
		頸径 148					
		胴径 228					
		器高 292					
		口径 187					
2	甕	口径 187	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ・一部ナデ	細粒砂 多	明茶褐色	並
		頸径 158					
3	高坏	口径 162	外 ヘラ磨き(やや荒い) 内 ヘラ磨き	外 ヘラ磨き(上→下) 内 ナデ	細粒砂 多 微粒砂 多	坏内 黒褐色 外 茶褐色	良
		脚径 47					
4	甕	口径 154	外 ハケ、ハケ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ、底ハケ 内 ケズリ (斜方向) 下→上	微礫 多 細粒砂 多	橙 褐色	良
		頸径 142					
5	甕	口径 114	外 ナデ、ナデ 内 ナデ	外 ハケ、底ハケ 内 ケズリ (斜方向) 下→上	細礫 多 微粒砂 多	橙灰褐色	良
		頸径 99					
6	壺	口径 150	外 ナデ 内 ナデ スス付着		微礫 少 細粒砂 多	茶 褐色	良
		器高 76					
7	壺	口径 155	外 ナデ 内 ヘラ磨き後ナデ		細粒砂 多 微粒砂 多	赤 褐色	良
		器高 69					
8	壺	口径 117	外 ケズリ後ナデ 内 ナデ		細粒砂 多	暗 褐色	良
		器高 45					
9	壺	口径 112	外 ケズリ後ナデ 内 ナデ		微礫 多 細粒砂 多	暗茶褐色	良
		器高 38					
第17図 10	壺	口径 120	外 指頭によるナデか 内 ケズリ後ヘラ磨き		微礫 多 中粒砂 多	暗 褐色	良
		器高 51					
11	壺	口径 120	外 ナデ 内 ヘラ磨き	外 底ハケ痕跡 内 底面ナデ	微礫 多 細粒砂 多	茶 褐色	良
		器高 42					
12	甗	口径 222	外 ナデ(巾2cm) 内 ナデ 指頭圧痕あり	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 多	灰乳褐色	やや悪い
		底径 105					
13	鍋	口径 213	外 ハケ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ(下→上) 底 同心円状のケズリ	微礫 多 細粒砂 多	茶 褐色	良
		頸径 188					
14	坏蓋	口径 120	外 ナデ 内 ナデ	外 底部 ケズリ 内 ナデ	中礫 微 微礫 少 細粒砂 多	青 灰色	良
		器高 39					
15	坏身	口径 108	外 ナデ 内 ナデ	外 底部上方1cmケズリ 内 ナデ	中礫 少 細礫 少 微粒砂 多	灰 色	良
		底径 65					
16	坏身	口径 104	外 ナデ 内 ナデ	外 底部ケズリ後ナデ 内 ナデ	中礫 少 細礫 少 微粒砂 多	青 灰色	良
		器高 35					
17	坏身 (ゆがむ)	口径(120)	外 ナデ 内 ナデ	外 ケズリ痕 内 ナデ	中礫 少 微礫 多 微粒砂 多	灰 色	並
		器高 38					

## (6) 80-6号住居跡 (第13図)

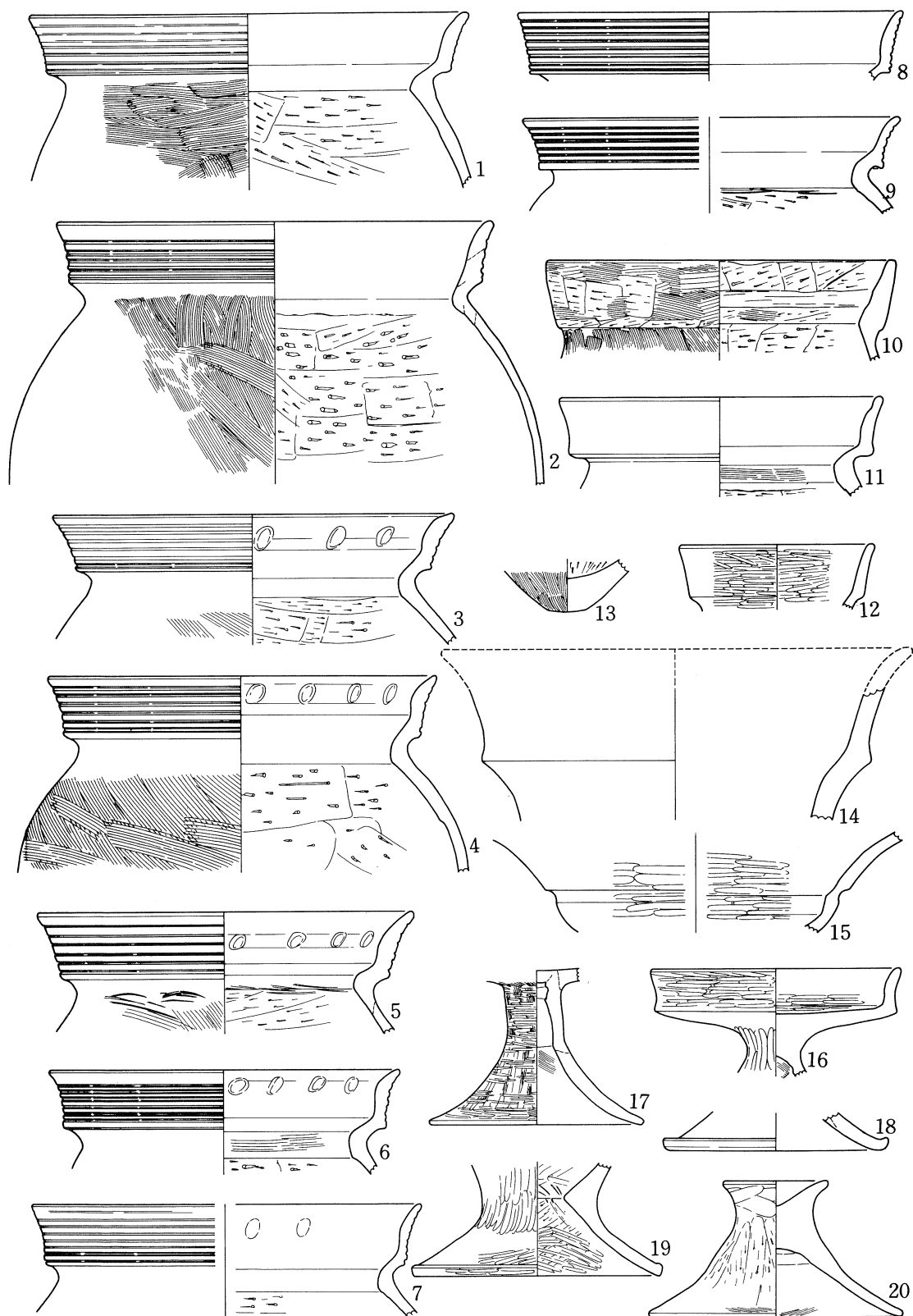
調査区南側において検出し、東側が用水溝により消滅しているが、80-3号住とは近接し、80-2号住居跡とは約5m離れよう。「8の字」形溝状遺構と複合し、これにより切られている。胴の張る隅丸方形で辺約6m位の大きさであろう。この住居の検出も失敗している。住居は土層より2回の建て替えが推定できる。上層より暗褐色粘質土、貼り床(地山混褐色土)、薄い1cm程度

の炭化物層、貼り床（地山混褐色土）が基本である。住居を新、古で示そう。主柱穴はいずれも4個が方形配置と予想されるが、うち1個は未検出である。新では、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>と考えており、P<sub>1</sub>—P<sub>2</sub>間3m、P<sub>1</sub>—P<sub>3</sub>間2.7mである。古においては一辺約5mの隅丸方形であろうと、住居内の落ち込み等で推測している。主柱穴はP<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>7</sub>を考えており、P<sub>5</sub>—P<sub>6</sub>間2.8m、P<sub>5</sub>—P<sub>7</sub>間2.35mを測る。80—2号住居跡と同様な溝で連結されたピットP<sub>7</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>を検出している。溝はいずれもP<sub>9</sub>に向かって傾斜している。このうちP<sub>10</sub>は新につき、他は旧に付属するものと考えている。覆土は暗褐色粘質土で、貼り床は地山混褐色土である。

土器は、床面より第18図2、3、7、9、10、11、19、20が出土し、P<sub>10</sub>より16が出土している。

80-6号住居跡出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第18図 1	甕	口径(219) 頸径(175)	外 ヘラ状具によるナデ(凸線),ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良
2	甕	口径 208 頸径 182	外 擬凹線5, ナデ 内 ナデ, ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多	淡茶褐色	良
3	甕	口径 191 頸径 154	外 擬凹線6, ナデ 内 ナデ・指頭圧痕, ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 微粒砂 多	暗褐色	良
4	甕	口径 184 頸径 157	外 擬凹線6(不明確), ナデ 内 ナデ, ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
5	甕	口径 179 頸径 142	外 擬凹線6, ナデ 内 ナデ・指頭圧痕, ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 多	暗茶褐色	良
6	甕	口径 166 頸径 130	外 擬凹線6, ナデ 内 ナデ・指頭圧痕, ナデ	内 ケズリ	微粒砂 少	赤褐色	良
7	甕	口径(182) 頸径(159)	外 擬凹線8, ナデ 内 ナデ, ナデ	内 ケズリ	微礫 多	橙 色	並
8	甕	口径 183	外 擬凹線8, ナデ 内 ナデ		微礫 多	茶褐色	やや不良
9	甕	口径(178) 頸径(150)	外 擬凹線6, ナデ 内 ナデ, ナデ	外 内 ケズリ	微礫 多	茶褐色	良
10	甕	口径 165 頸径 143	外 ハケ後ケズリ, ハケ 内 ケズリ, ケズリ	外 ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
11	甕	口径(154) 頸径(125)	外 ナデ, ナデ 内 ナデ, ナデ・ハケ	内 ケズリ	細粒砂 少 微粒砂 多	灰褐色	良
12	甕	口径 92	外 ヘラ磨き, 赤彩 内 ヘラ磨き		細粒砂 小 微粒砂 小	灰赤色	良
13	底部	底径 18		外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多	橙茶褐色	良
14	壺	口径(226)			微礫 多	赤乳白色	やや不良
15	高坏		外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 多 中粒砂 少	明褐色	並



第18图 80-6号住居跡出土土器実測図(S=1/3)

0 5 10cm



図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第18図 16	高坏	口径 117	外 ヘラ磨き, ヘラ磨き後ナデ 内 ヘラ磨き後ナデ	外 ヘラ磨き, 内 ハケ	微礫 多 微粒砂 多	橙 褐 色	良
17	高坏	裾径 103		外 ハケ後荒いヘラ磨き 内 ナデ	微粒砂 少	灰茶褐色	良
18	器台	裾径(107)		外 ヘラ磨き, 端ナデ, 赤彩 内 ナデ	微粒砂 多	赤 色	良
19	器台	裾径 121		外 ヘラ磨き 内 ケズリ後荒いヘラ磨き	微礫 少 細粒砂 少	橙 乳 色	良
20	蓋	つまみ 50 口径 120 器高 66	外 荒いヘラケズリの後ナデか 内 ヘラケズリの後ナデか		中礫 微多 微礫 微粒砂 多	暗 灰 色	良

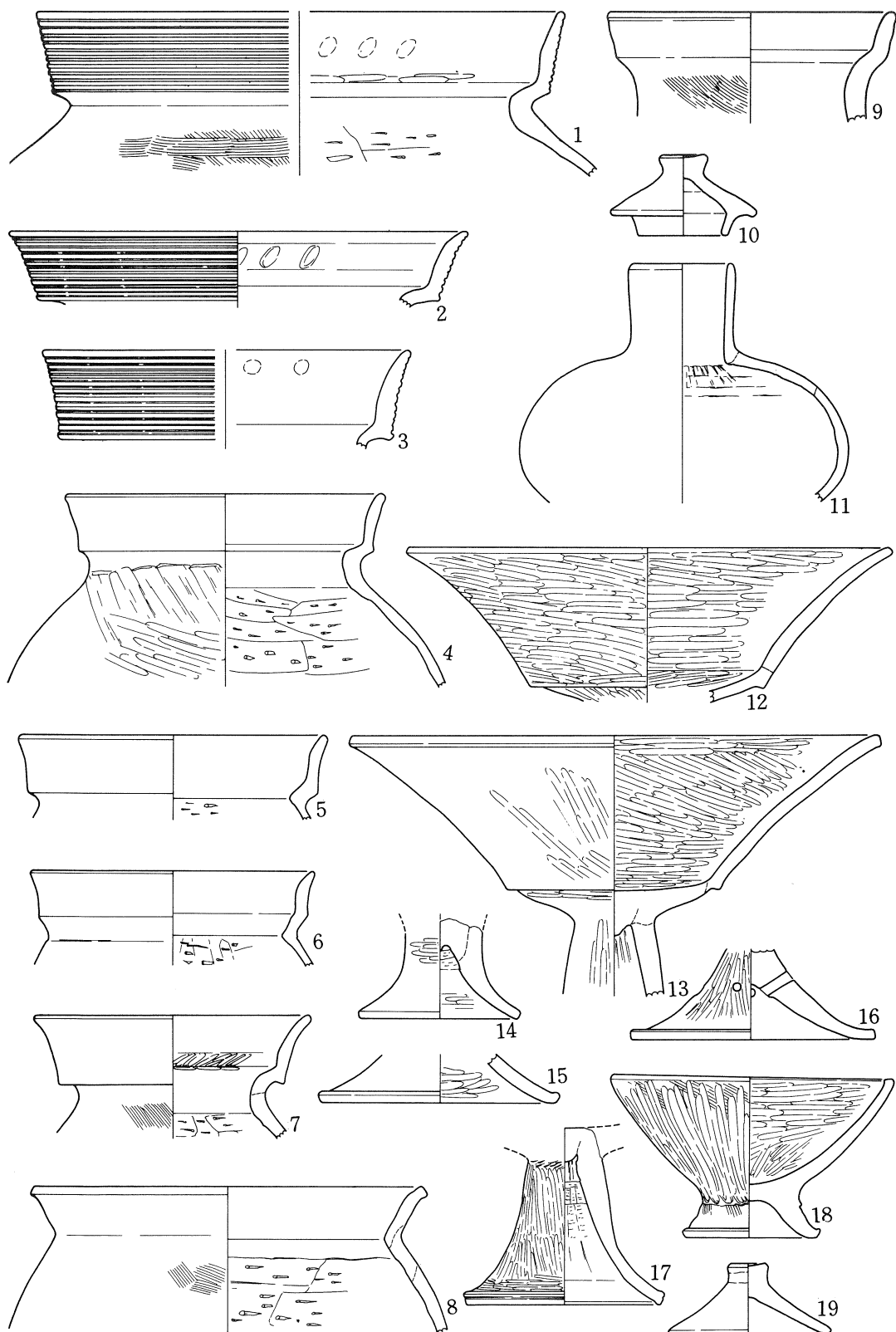
### (7) 80-7号住居跡 (第 13 図)

調査区のほぼ中央西側に位置し、80-6号住居跡とは7mを隔てる。住居の中央部は南北に走る近世の用水溝により切られている。胴の張る玉子状に近い隅丸長方形の平面形を呈し、相対壁間は東西6.4m、南北推定6.1mを測り、床面積31.8㎡の規模をもつ。壁高は最も高い西壁で20cmを測る。壁溝は一部分において検出できた。主柱4個、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>が方形に配置されP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間2.4m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間2.6m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間2.6m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>間2.4mを測る。またP<sub>5</sub>は深さ3cmの浅い掘り方をもち炭化物(灰)で埋まっていた。80-2号住居跡とほぼ同規格である。覆土は上層が暗褐色粘質土、床面上に厚さ約5cm程度の地山混茶褐色土が堆積していた。

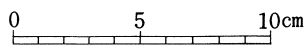
土器は床面より第19図4、13、P<sub>5</sub>より19、P<sub>6</sub>より3が出土している。また釜形の蓋10、口径46mmの細い口縁部を持つ壺、11は胎土、焼成が同じで、蓋の口径は42mmでセットである。

### 80-7号住居跡 出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第19図 1	甕	口径(248) 頸径(217)	外 擬凹線11 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ(一部磨き)	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 微礫 少	暗 灰 色	やや 不良
2	甕	口径 216	外 擬凹線10 内 ナデ 指頭圧痕		微礫 少 細粒砂 多	明 褐 色	良
3	甕	口径(172)	外 擬凹線12 ナデ 内 ナデ		細粒砂 多	明 褐 色	良
4	甕	口径 148 頸径 128	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ケズリ 内 ケズリ	中礫 多 微礫 多 細粒砂 多	暗 灰 色	やや 不良
5	甕	口径 144 頸径 121	内 ナデか	内 ケズリ	大礫 多 細礫 多 細粒砂 多	暗 灰 色	並か
6	甕	口径 133 頸径 118	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙 褐 色	並
7	甕	口径 130 頸径 89	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微粒砂 多 細粒砂 多	暗茶褐色	良



第19图 80-7号住居跡実测图 (S=1/3)



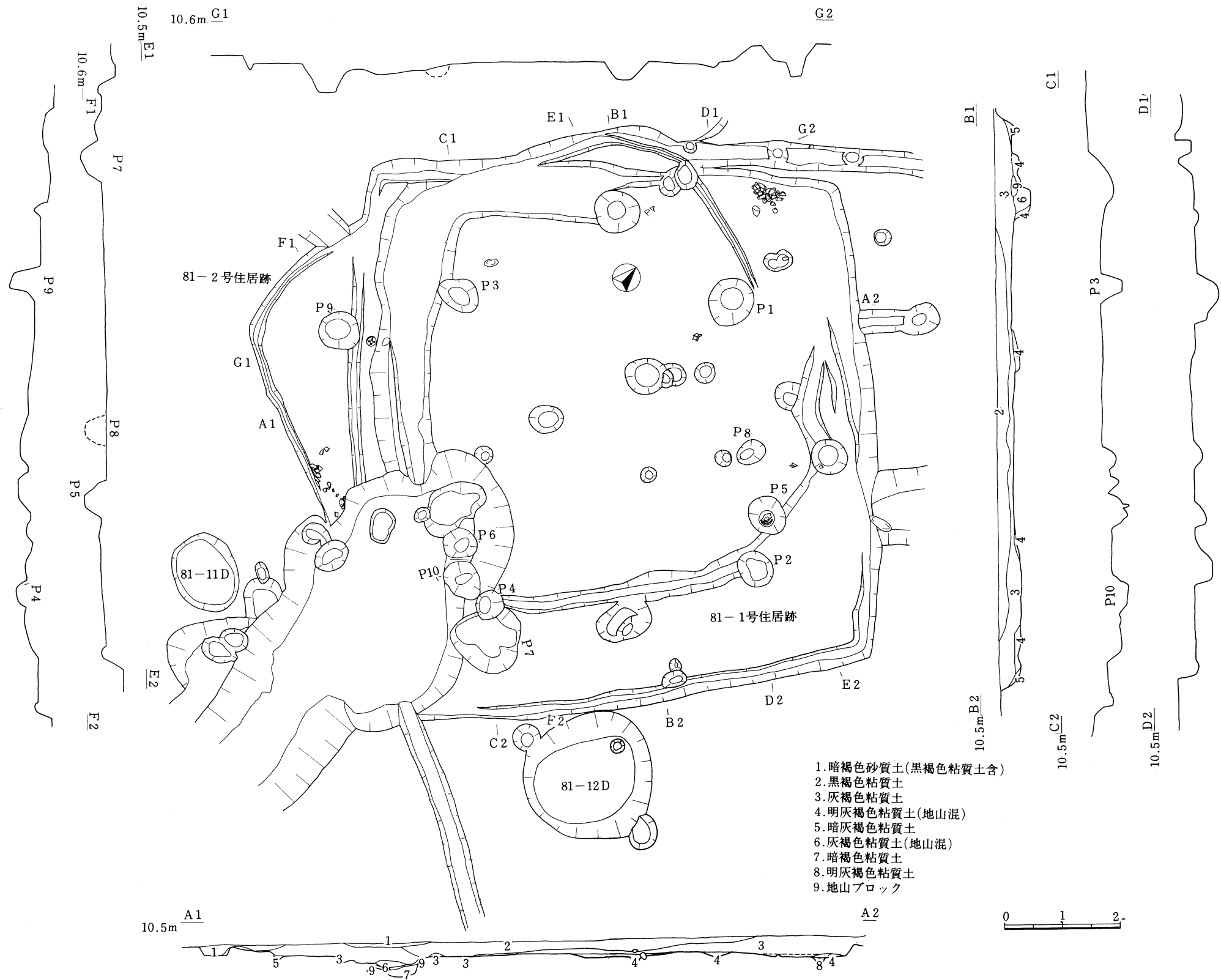
図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部)	胎 土	色 調	焼成
第19図 8	甕	口径 184 頸径 164	外 ナデか 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	橙 灰 色	並
9	壺	口径 132 頸径 107	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ		微礫 少 細粒砂 少	橙 褐 色	良
10	蓋	つまみ径23 口径 42 器高 39			粒砂 少	赤 褐 色	良
11	壺	口径 46 胴径(154)	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨きか 絞り目	外 ヘラ磨きか 内 接合痕	細粒砂 微	赤 褐 色	良
12	高坏	口径 226	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		微礫 少 微粒砂 少	橙明褐色	良
13	高坏	口径 248	外 ヘラ磨き後ナデ 内 ヘラ磨き		細礫 少 細粒砂 少	灰茶褐色	良
14	高坏	裾径 76		外 ヘラ磨きか 内 ケズリの後ヘラ磨きか	細粒砂 少	淡灰褐色	良
15	高坏	裾径 113		外 ハケ後ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き	微粒砂 多	赤明褐色	良
16	高坏	裾径 115		外 ヘラ磨き・透穴4 内 ケズリ後ナデか	細礫 微 微粒砂 少	明 褐 色	良
17	高坏	裾径 96		外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデ	細礫 少	褐 色	良
18	台付鉢	口径 132 底径 64 器高 78	外 口唇はヘラケズリにより面 取り後ナデ ハケ後ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	外 台部ナデ 内 台部は指頭ナデ	中礫 微 細粒砂 多	茶 褐 色	良
19	蓋	つまみ径17 口径 75			細粒砂 多 微粒砂 少	灰 褐 色	並

#### (8) 81-1号住居跡、2号住居跡(第20図)

調査区の西側に位置し、81-2号住居跡が1号住居跡より先に営なまれている。また西側は、巾約3mの溝状遺構により削られている。1号住居跡は一辺約9mを測る方形プランを呈し、床面積は推定81.9m<sup>2</sup>である。壁高は東北壁30cm、東南壁33cmを測る。壁溝は深さ3~5cm、巾10cm~15cmを測り、東南部において検出しえた。支柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>の4個と考えており、方形に配置され、4辺とも4.7mを測る。

調査時において床面を検出したところ4個の支柱穴を方形に囲み巾約80cmの溝状の汚れが見い出された。掘り方は東南部において床面との差3~5cmを測るが、西北壁付近から西南壁にかけて徐々に深さを増し床面より30cmに達した。東南壁西より住居外に傾斜しながら伸びる溝状遺構と繋なろう。P<sub>5</sub>内には胴下半を失なった甕形土器(第21図、10)が口縁を下にした状態で出土した。炉は検出してない。

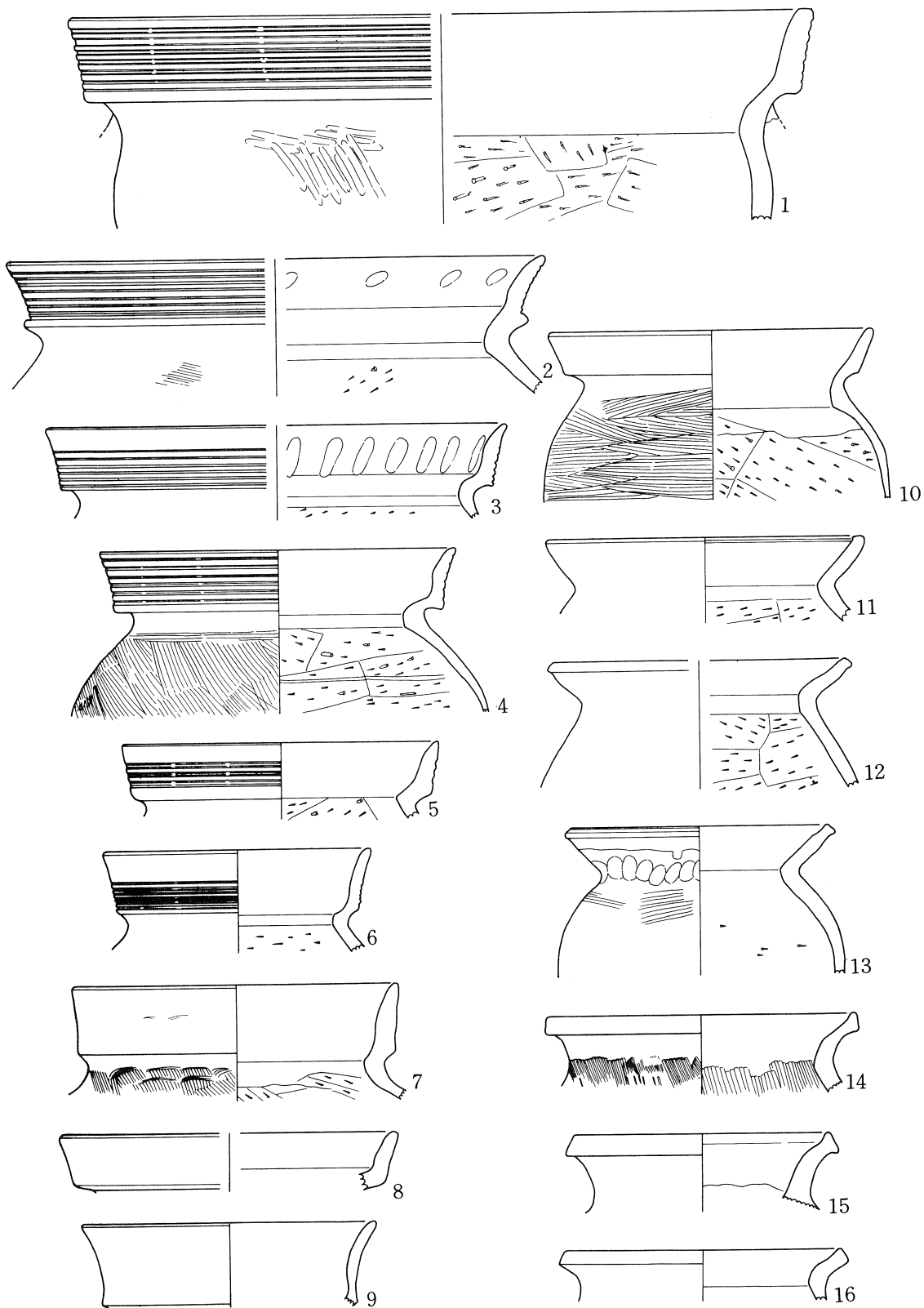
81-2号住居跡は西北壁と西南壁の一部を検出しているが、81-1号住居跡内に残存した壁溝などより一辺約8.3mを測る隅丸方形を呈するであろう。壁高は残存部で15cmを測り、巾10cm深さ10cmの壁溝が周っていたと思われる。床面は81-1号住居跡とほぼ同じ高さを測る。支柱穴は



第20図 81-1号.81-2号住居跡実測図 (S=1/80)

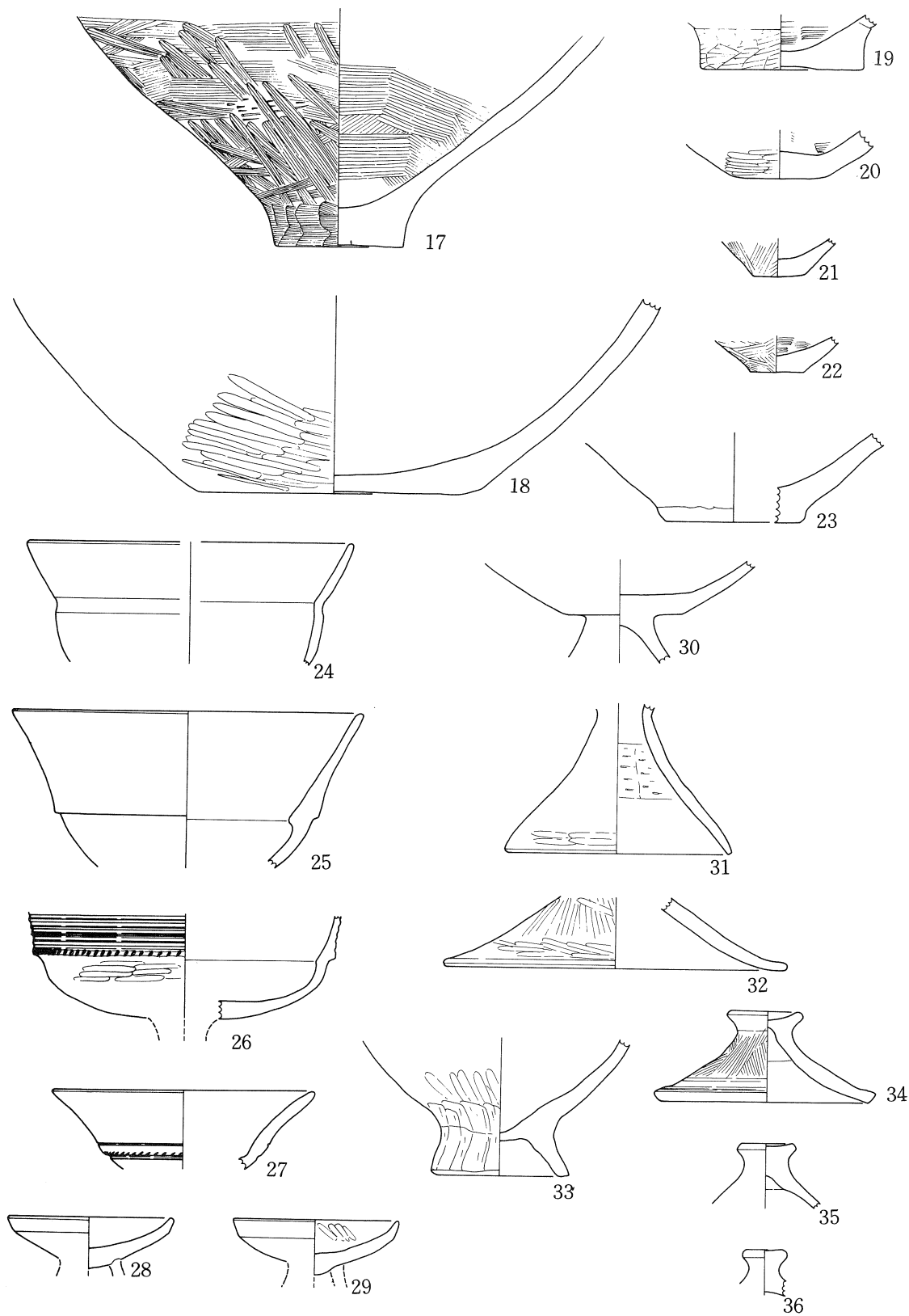




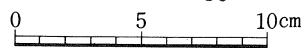


第21图 81-1号住居跡出土土器实测图(1) (S=1/3)

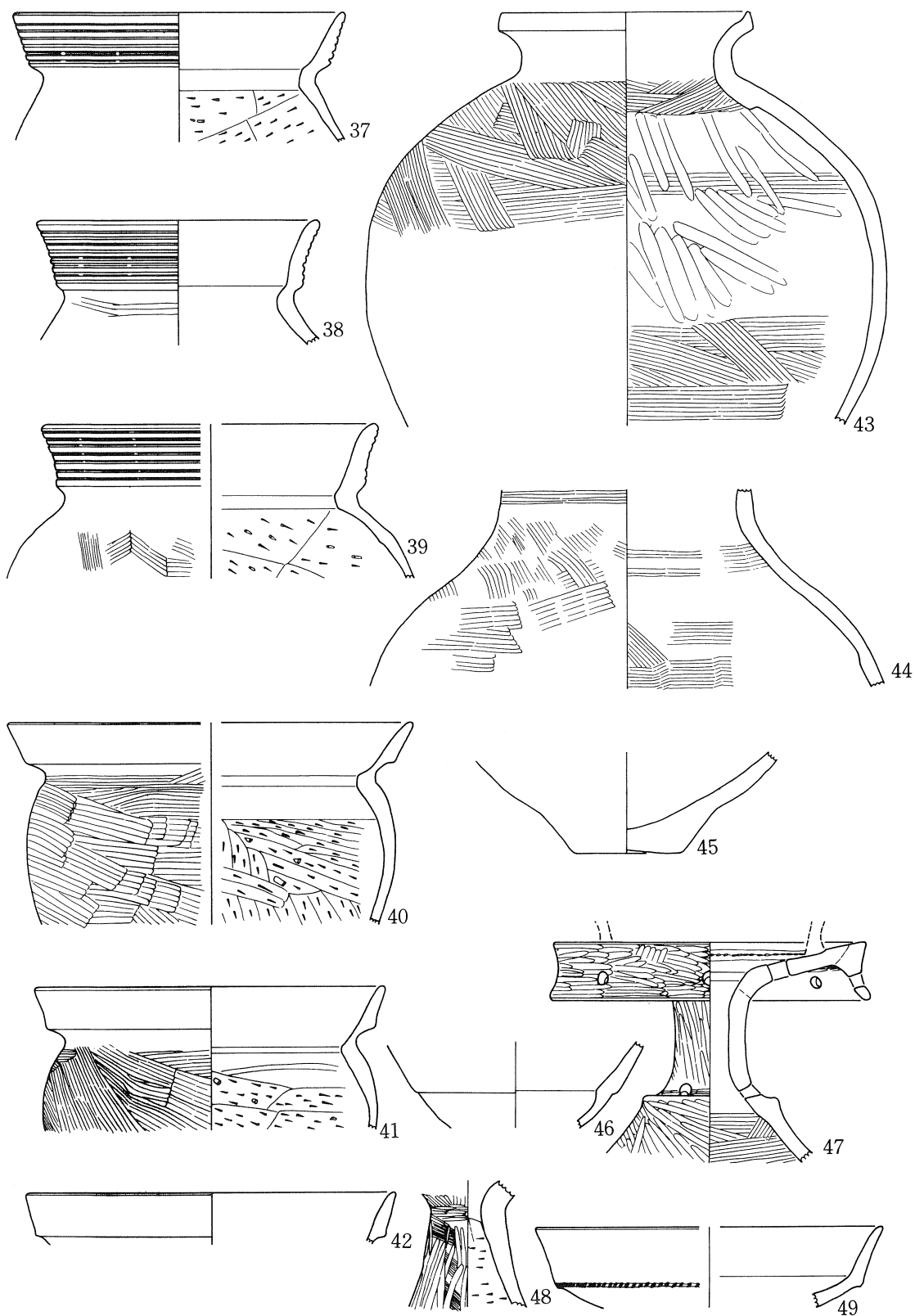
0 5 10cm



第22图 81-1号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)

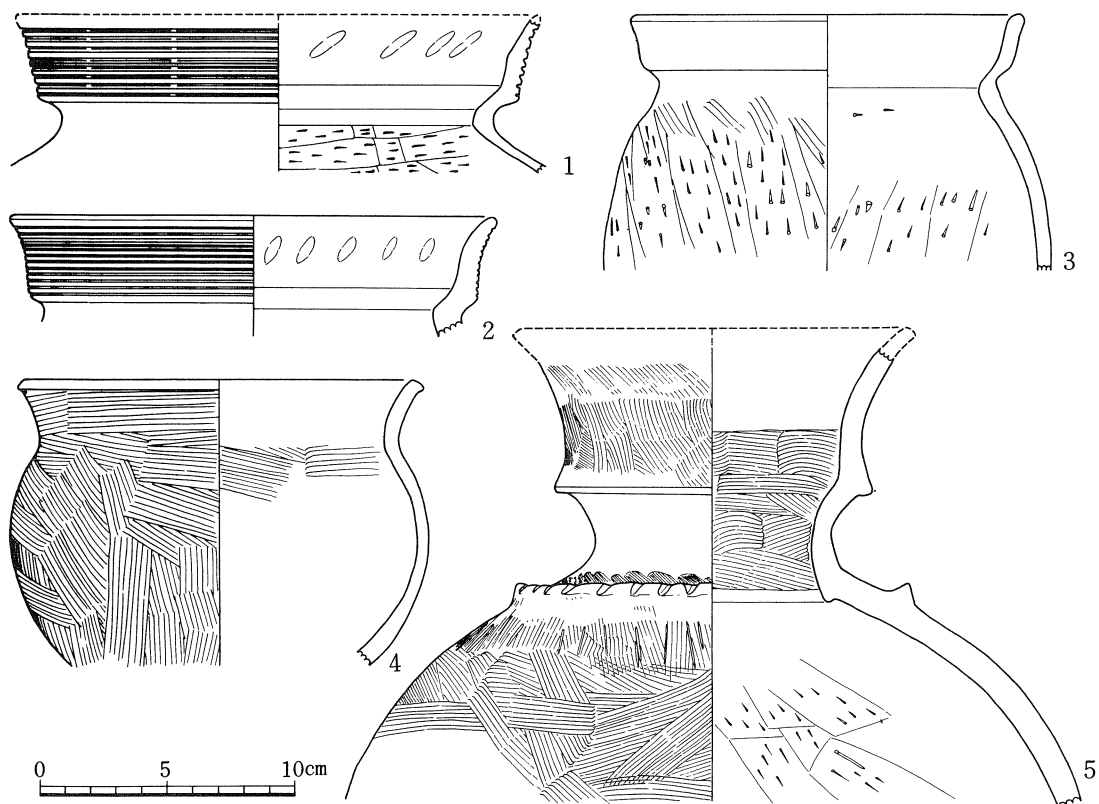






第23图 81-1号住居跡出土土器实测图(3) (溝内出土土器)

0 5 10cm



第24図 81-2号住居跡出土土器実測図 (S=1/3)

P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>と考えており、P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>間4.7m、P<sub>7</sub>-P<sub>9</sub>間5.2m、P<sub>8</sub>-P<sub>10</sub>間5.3m、P<sub>9</sub>-P<sub>10</sub>間5.2mを測る。

覆土は上層が暗褐色粘質土、下層茶褐色粘質土に分かれ、土層による両住居跡の切り合い関係の明確な判断は出来なかった。

81-1号住居跡の平面形内覆土より第21・22図1~36(10を除く)の土器が出土している。また溝状遺構内より第23図37~49の土器が出土した。

81-2号住居跡からは第24図1~5の土器が壁際より出土している。

### 81-1号住居跡 出土土器観察表

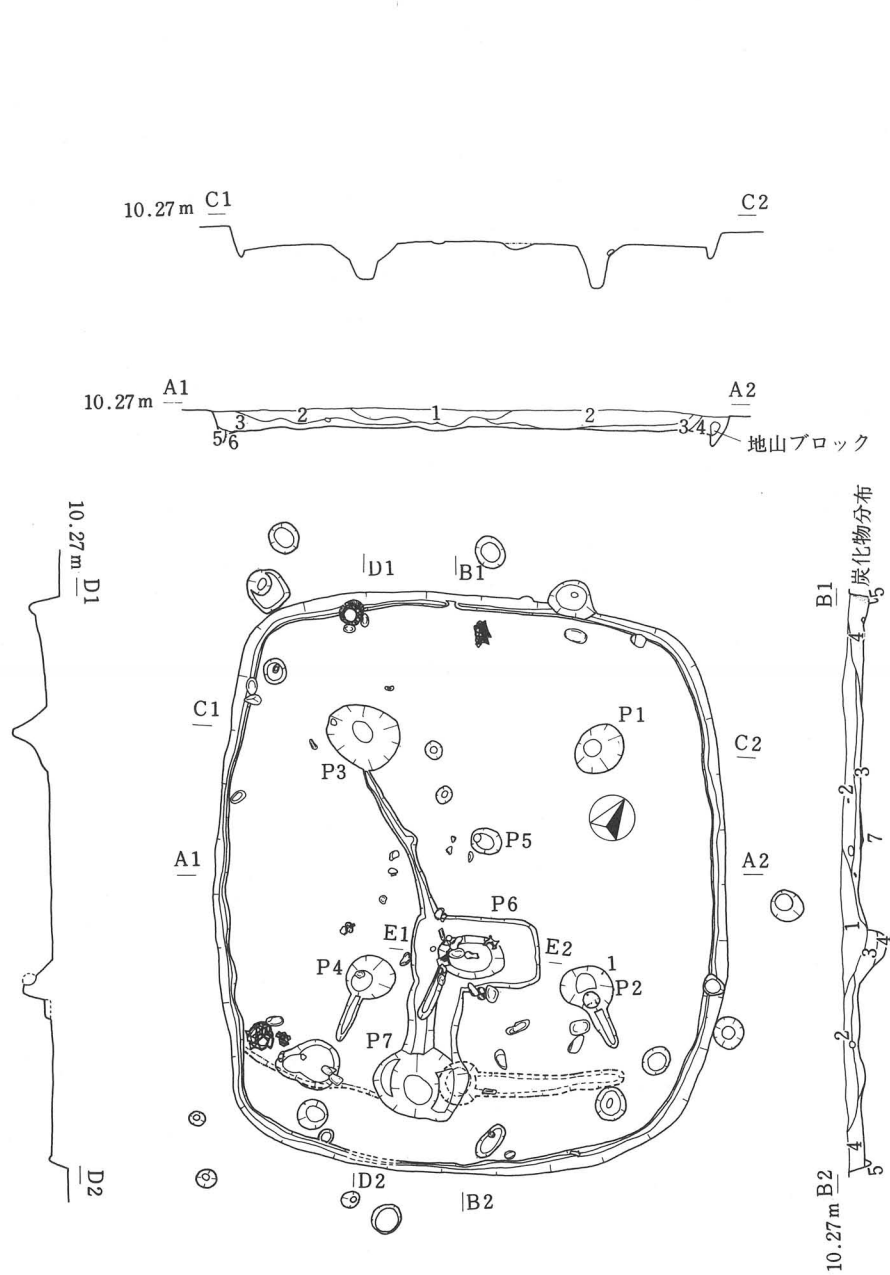
図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 部 (底部)	胎 土	色 調	焼成
第21図 1	甕	口径(356) 頸径(309)	外 擬凹線7, 口唇水平面取り 内 ナデ	外 ハケ・把手の痕跡 内 ケズリ	中礫 少 微礫 多 細粒砂 多	橙黄褐色	良
2	甕	口径 258 頸径 224	外 擬凹線8, ナデ 内 ナデ・指頭圧痕, ナデ	外 ハケ, 煤附着 内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	褐色	良
3	甕	口径(222) 頸径(189)	外 擬凹線6, ナデ 内 ナデ・指頭圧痕, ケズリ		細礫 多	橙褐色	良

図番号	器種	大きさ mm	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第21図 4	甕	口径 172 頸径 140	外 擬凹線 6, ナデ 内 ナデ , ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	淡 褐 色	並
5	甕	口径 152 頸径 130	外 擬凹線 3 (浅い), ナデ 内 ナデ , ケズリ		細礫 少 微礫 多 細粒砂 多	褐 色	並
6	甕	口径 128 頸径 107	外 擬凹線 (数不明), ナデ 内 ナデ , ケズリ		中礫 少 細礫 多 微粒砂 多	淡灰褐色	良
7	甕	口径 (156) 頸径 (144)	外 ナデ・輪積痕, ナデ 内 ナデ , ケズリ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 微 微礫 多 微粒砂 多	淡 褐 色	良
8	甕	口径 (160)	外 ナデ 内 ナデ		微礫 多 細粒砂 多	褐 色	良
9	甕	口径 142	外 ナデ 内 ナデ		細粒砂 多	橙乳褐色	良
10	甕	口径 152 頸径 125	外 ナデ , ナデ 内 ナデ , ナデ	外 ハケ調整後ナデ 内 ケズリ	細礫 少 微礫 多 細粒砂 多	淡 褐 色	良
11	甕	口径 152 頸径 125	外 口唇面取り, ナデ 内 口唇肥厚, ナデ	内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	乳 褐 色	良
12	甕	口径 (141) 頸径 113	外 ナデ , ナデ 内 ナデ , ナデ	外 ナデ 内 ケズリ	細粒砂 多	乳 褐 色	良
13	甕	口径 124 頸径 95	外 接合痕と軽い指頭圧痕 内 ナデ	内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	淡 褐 色	良
14	甕	口径 150 頸径 127	外 ナデ , ハケ 内 ナデ , ハケ	外 ハケ 内 ハケ	微礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
15	甕	口径 124 頸径 104	外 ナデ , ナデ 内 ナデ, ナデ・接合痕		中礫 微 微礫 多 微粒砂 多	橙 褐 色	良
16	甕	口径 134 頸径 118	外 ナデ , ナデ 内 ナデ , ケズリ		微礫 少 微粒砂 多	暗 褐 色	良
第22図 17	底部	底径 62		外 ハケ, 底面ケズリ 内 ハケ	微礫 少 細粒砂 多	橙乳白色	良
18	底部	底径 130		外 へら磨き・化粧土 内 へら磨き, ナデ	中礫 微 微礫 多 細粒砂 多	淡 褐 色	良
19	底部	底径 78		外 ケズリ, 底ケズリ・ナデ 内 ハケ, ケズリ	微礫 微 微粒砂 多	橙 褐 色	良
20	底部	底径 44		外 へら磨き 内 ハケ	細礫 少 細粒砂 多	黒 褐 色	良
21	底部	底径 24		外 ハケ	微礫 多 細粒砂 多	橙淡褐色	良
22	底部	底径 26		外 ハケ 内 ハケ	微礫 少 微粒砂 多	淡 褐 色	良
23	底部	底径 (66)		外 ハケ後ナデ 内 ナデ	微礫 多 微粒砂 多	褐 色	良
24	鉢	口径 (158) 頸径 (129)			細粒砂 少 微粒砂 多	黄 橙 色	不良
25	高坏	口径 (170)	外 へら磨き 内 へら磨き		細粒砂 少 微粒砂 微	橙 褐 色	良

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第22図 26	高坏		外 坏段部に擬凹線5 内 きざみ目 へラ磨き		細粒砂 微 微粒砂 多	赤褐色	良
27	高坏	口径 126	外 へラ磨き 擬凹線 内 きざみ目 へラ磨きか		細礫 少 細粒砂 多	赤褐色	並
28	器台	口径 78			微粒砂 多	橙褐色	良
29	器台	口径 80			微粒砂 多	橙褐色	良
30	高坏	脚径 33			細礫 少 微粒砂 多	赤褐色	不良
31	器台	裾径 112		外 へラ磨き 内 ケズリ後ナデ	微礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	橙褐色	良
32	高坏	裾径 164		外 へラ磨き 内 ナデ	細粒砂 多	赤褐色	並
33	台付鉢	底径 58		外 へラ磨き 絞り目 内 へラ磨き 端部面取り	微粒砂 多	淡赤褐色	良
34	蓋	口径 101 つまみ径 37 器高 45	外 つまみ部ナデ ハケ 内 板状工具ナデ ケズリ 端部はへラ磨き		微礫 多 細粒砂 多	淡黄橙色	良
35	蓋	つまみ径 25	外 細かいへラ磨き 内 ナデ		微粒砂 多	橙褐色	良
36	蓋	つまみ径 18			微礫 多 細粒砂 多	橙乳褐色	並

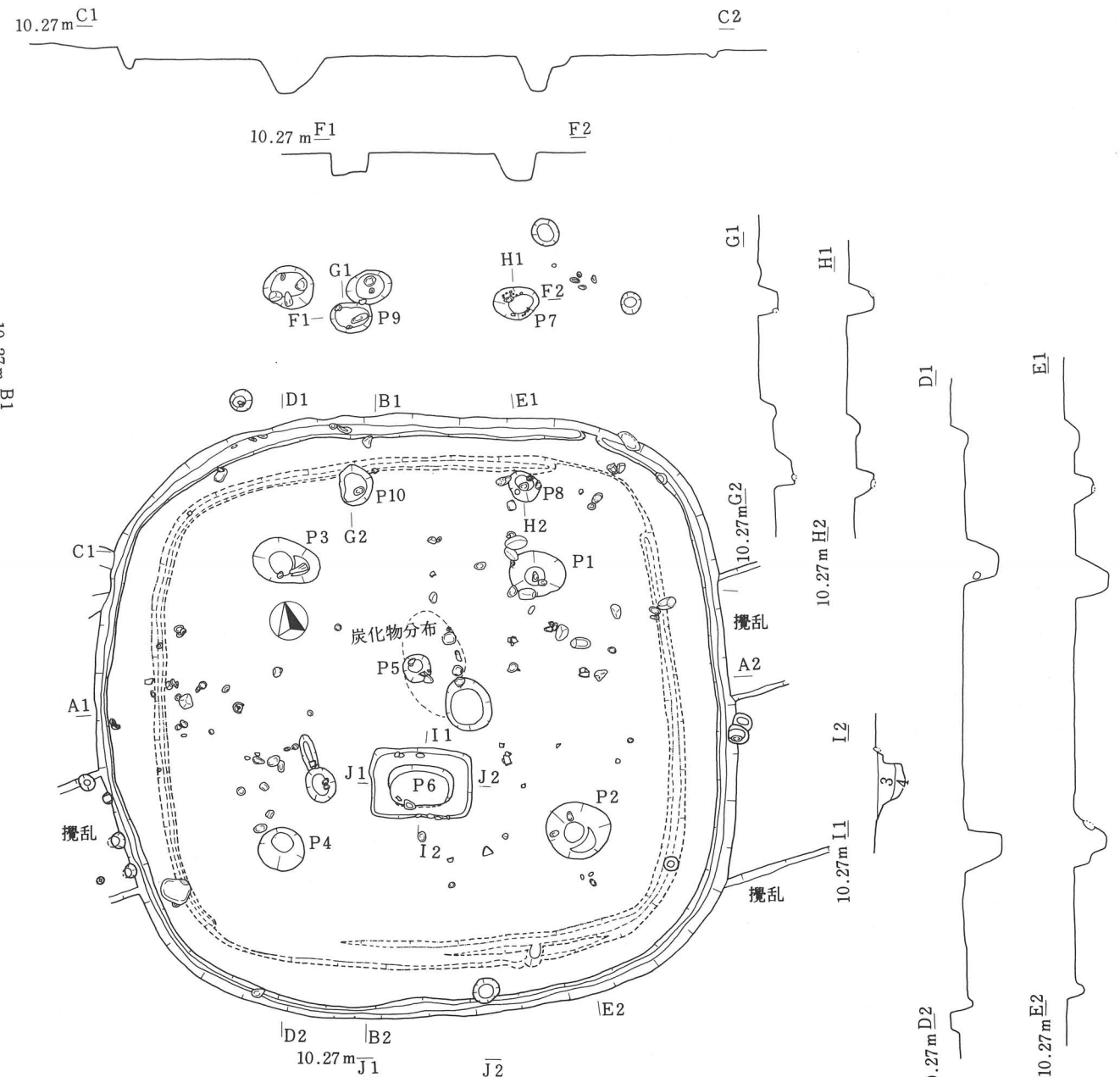
### 81-1号住居跡溝内出土土器

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第23図 37	甕	口径 156 頸径 130	外 擬凹線 6 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 微 微粒砂 多	橙乳白色	並
38	甕	口径 132 頸径 109	外 擬凹線 8 内 ナデ ナデ	外 ハケ	微礫 多 細粒砂 多	淡赤褐色	不良
39	甕	口径 158 頸径 140	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 多 微粒砂 多	黒褐色	並
40	甕	口径(194) 頸径(158)	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	乳褐色	良
41	甕	口径 166 頸 140	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 少 微粒砂 多	橙乳褐色	良
42	甕	口径 176	外 ナデ 内 ナデ		細礫 少 細粒砂 少 微粒砂 多	乳褐色	並
43	壺	口径 118 頸径 100 胴径 250	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ハケ 指頭によるナデ	微礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
44	壺	頸径(120)	外 ハケ 内 ナデの上ハケ	外 ハケ 内 ナデの上ハケ	微礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	橙褐色	良
45	底部	底径 50		外 底面ケズリ 内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良



82-1号住居跡

1. 黄灰色粘質土(地山混)
2. 灰褐色粘質土(地山混)
3. 灰褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 褐色粘質土
6. 褐色粘質土(地山混)
7. 黒色粘質土(灰含)



1. 攪乱
2. 褐色粘質土(地山少々混)
3. 褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 黄灰褐色粘質土

82-2号住居跡

第25図 82-1号・82-2号住居跡実測図 (S=1/80)





図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第23図 46	高坏		外 ヘラ磨きか 煤付着		細粒砂 少 微粒砂 多	橙淡褐色	良
47	装飾 器台	受部径150 柱状部径34	外 ヘラ磨き 垂下帯透穴8 内 ヘラ先のきざみ目による接合 痕 ヘラ磨き	外 裾部透穴4 ヘラ磨き 内 柱状部ナデ 裾部 ハケ	細粒砂 微 微粒砂 多	橙乳白色	良
48	器台			外 ハケの上よりヘラ磨 内 き ケズリ 輪積痕 紋り目	微粒砂 多	褐色	良
49	高坏	口径(166)	外 体部の境きざみ目 ヘラ 磨き 赤彩 内 ヘラ磨きか		微礫 少 微粒砂 多	淡黄褐色	良

### 81- 2号住居跡出土土器観察表

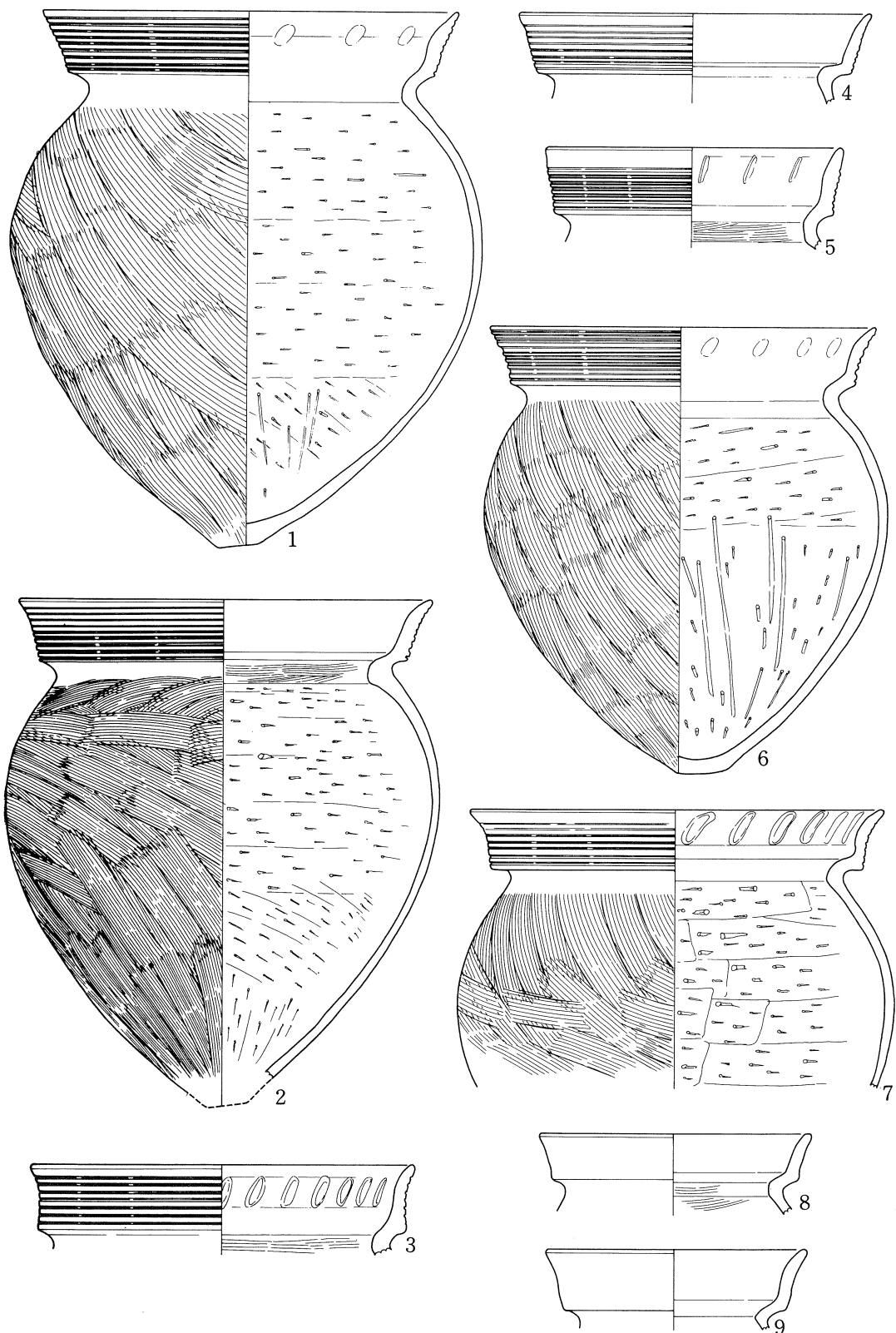
図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第24図 1	甕	頸径 170	外 擬凹線8 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	粗粒砂 多 中粒砂 多	淡褐色	良
2	甕	口径 188 頸径 163	外 擬凹線12 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ		微礫 微 微礫 多 細粒砂 多	橙淡褐色	良
3	甕	口径 150 頸径 132	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ後ケズリ 内 ケズリ	微礫 少 細粒砂 多	黒褐色	良
4	甕	口径 152 頸径 126	外 口唇部面取り ハケ ハケ 内 ハケか	外 ハケ 煤付着 内 ハケか	微礫 少 細粒砂 多	黄橙色	良
5	壺	口径(150) 頸径 94	外 上半ハケの上ナデ下半ハケナデ 内 ハケ ハケ	外 ハケ きざみ入り凸帯 内 ケズリ後ナデ	微礫 少 微粒砂 多	灰褐色	良

#### (9) 82- 1号住居跡 (第 25 図)

調査区のほぼ中央東側に位置し、長辺 6 m、短辺 5.3 m の隅丸長方形を呈する。床面積は 66.4 m<sup>2</sup> を測る。壁高は床面より 20cm を測り、巾 5 cm 程度、深さ 15cm の壁溝が周る。主柱穴は P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub> はほぼ方形に、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub> 間 2.6 m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub> 間 2.4 m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub> 間 2.4 m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub> 間 2.6 m で配置される。この P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub> 間内側に 2 段掘りの特殊ピット P<sub>5</sub> が位置し、南に 80cm 離れ同様な P<sub>7</sub> が位置する。P<sub>5</sub> は長辺 130 cm、短辺 75cm の長方形の平面内に長軸 68cm 短軸 45cm の楕円状にピットが掘られる。段部は深さ 7 cm~10cm、ピット部は床面より深さ 22cm を測る。P<sub>7</sub> は両脇に段部を持つ長軸 100 cm、短軸 74cm の楕円形を呈し、深さは床面より段部 8 cm、ピット部 25cm を測る。また、P<sub>6</sub> と P<sub>7</sub> は巾 52cm の掘り込みで結ばれこの中には P<sub>7</sub> へと傾斜する溝をもつ。焼土は検出されなかったが P<sub>5</sub> は炭化物が堆積していた。床面は西北の方向に緩く傾き貼り床がなされている。非常に固く締った厚さ 1 cm~2 cm の層をもち、地山は床面下約 10cm (平均) に位置する。覆土は床面より暗褐色粘質土、灰褐色粘質土が堆積し、上層中央部には地山混黄灰色土が見うけられる。

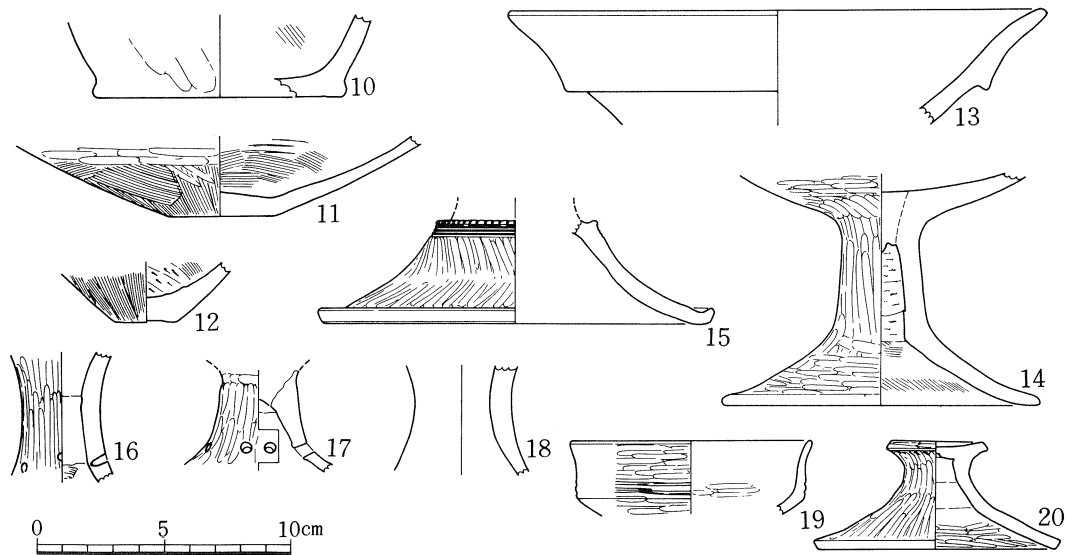
土器は床面より、第26図 1、2、6、第27図 16、20、P<sub>6</sub> より第26図 7、第27図 14 が出土している。





第26图 82-1号住居跡出土土器実測図(1) (S=1/3)

0 5 10cm



第27図 82-1号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)

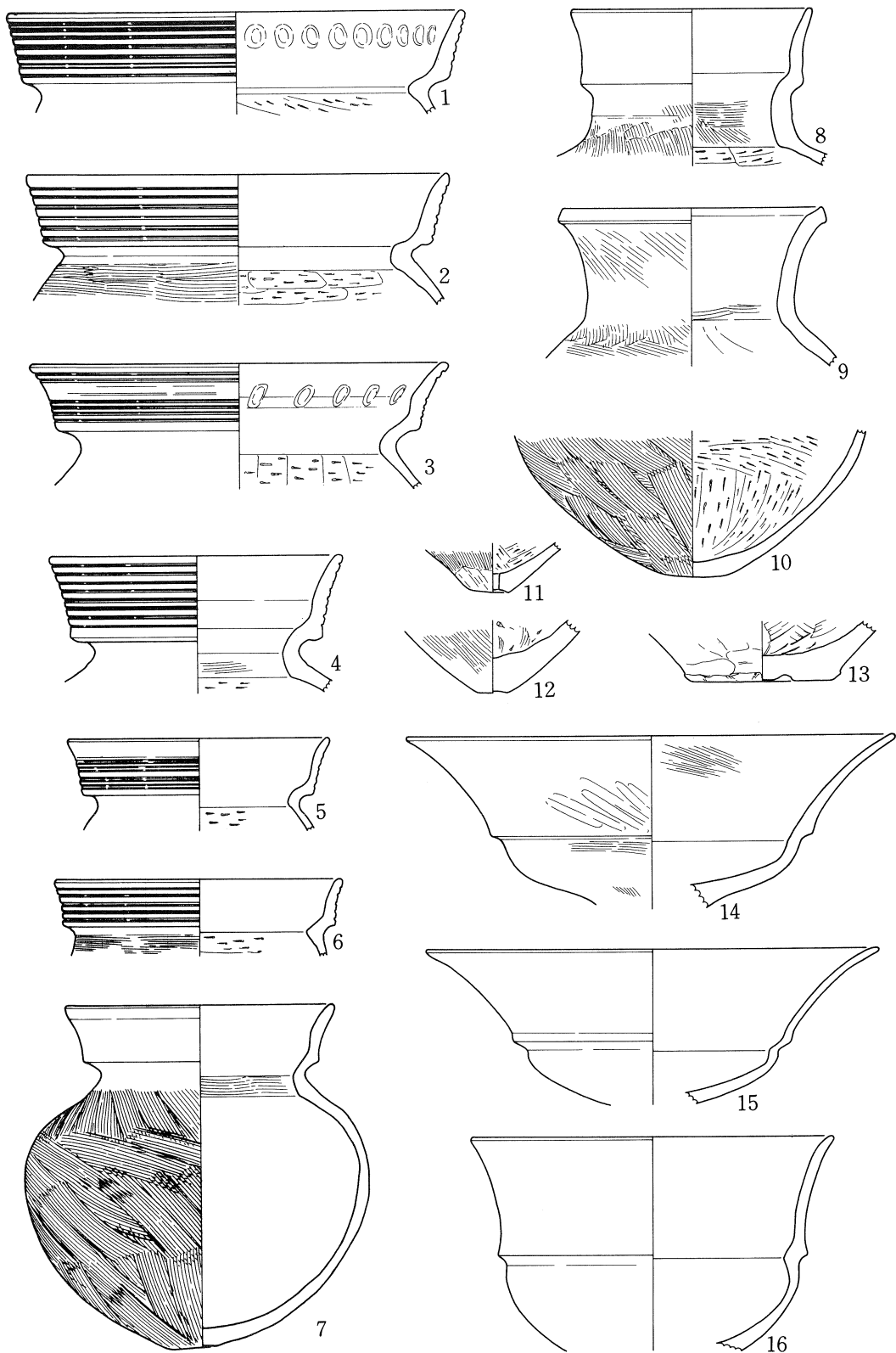
82-1号住土器観察表

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底 部 部)	胎 土	色 調	焼成
第26図 1	甕	口径 196 頸径 152 胴径 223 底径 20 器高 256	外 擬凹線 9 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ 下半はケズリ 上げ	微礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	橙乳白色	良
2	甕	口径 195 頸径 158 胴径 205 底径 18 器高(242)	外 擬凹線 9 ナデ 内 ナデ ハケ状具	外 ハケ 内 ていねいなケズリ上 げ	細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
3	甕	口径 180 頸径 168	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ハケ状工具		細礫 多	灰褐色	良
4	甕	口径 164 頸径 130	外 擬凹線 8か ナデ 内 ナデ ナデ		微礫 少 微粒砂 多	乳褐色	不良
5	甕	口径 133 頸径 116	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ハケ		微礫 少 微粒砂 少	褐色	良
6	甕	口径 180 頸径 146 胴径 190 底径 24 器高 213	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 煤付着 内 ケズリ 下半はケズリ 上げ	微礫 多 細粒砂 多	黄橙色	良
7	甕	口径 193 頸径 156	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ケズリ	外 ハケ 内 ケズリ	大礫 微 細礫 多	橙褐色	並
8	甕	口径 126 頸径 102	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ状具		細礫 多 微粒砂 多	橙褐色	良
9	甕	口径 120 頸径 88	外 ナデ ナデ 内 ナデ ケズリ		微礫 多 微粒砂 多	赤褐色	不良
第27図 10	底部	底径 100		外 ケズリ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	乳褐色	良

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部)	胎 土	色 調	焼成
第27図 11	底部	底径 40		外 ハケ ヘラ磨き 内 ハケ ナデ	微粒砂 多	茶褐色	並
12	底部	底径 24		外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ(指頭)	細礫 多 微粒砂 多	暗灰褐色	良
13	器台	口径 211	外 ヘラ磨きか 赤彩痕 内 ヘラ磨きか 赤彩痕		微礫 多 細粒砂 多	橙褐色	やや不良
14	高坏	裾径 125		外 ヘラ磨き 内 ケズリ ハケ後ナデ	細礫 少 微粒砂 少	橙褐色	良
15	器台	裾径 153		外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデ	細礫 少 細粒砂 少 微粒砂 少	明橙褐色	良
16	器台			外 ヘラ磨き 透穴 <sup>2</sup> 完通せず 内 ケズリ	微粒砂 多	淡橙褐色	良
17	高坏			外 ヘラ磨き 透穴4か 内 ナデ	細礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
18	器台				中礫 少 細礫 少 微粒砂 多	明橙褐色	良
19	高坏か	口径 93		外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き後ナデ	微礫 少 微粒砂 少	明褐色	良
20	蓋	つまみ径40 口径 96 器高 43	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		中礫 少 微粒砂 多	淡褐色	良

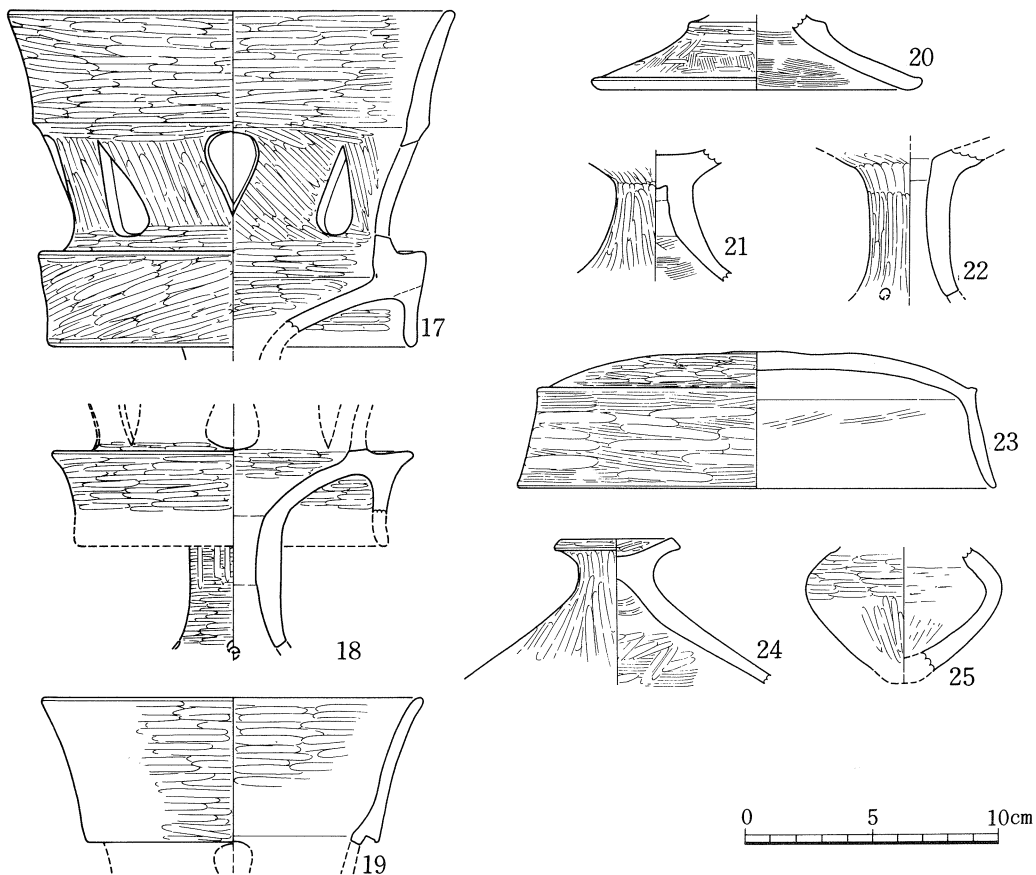
#### (10) 82-2号住居跡 (第25図)

調査区の北側に位置し、平面形は胴の張る隅丸方形を呈し、北壁-南壁間7.5m、東壁-西壁間8mを測る。床面積は49.6㎡である。一部耕作により削られているが、壁高は15cm~20cmを測る。巾約10cm、深さ5~8cmの壁溝が周る。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>が4個台形状に配置され、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間3.2m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間3.15m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間3.65m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>間3.45mを測る。方形に配置されたP<sub>7</sub>~P<sub>10</sub>は住居出入口を示そう。P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>は北壁外へそれぞれ1.4m、1.25m離れ、P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>は堅穴内に位置する。P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>間2.2m、P<sub>7</sub>-P<sub>9</sub>間2.1m、P<sub>8</sub>-P<sub>10</sub>間2.1m、P<sub>9</sub>-P<sub>10</sub>間2.1mを測る。南側主柱穴P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間内側に2段掘りの特殊ピットが位置する。長辺128cm、短辺86cm、深さ8cm~10cmの長方形プランを持つ1段目と長軸82cm、短軸50cm、深さ床面より33cmの楕円形プランの2段目を持つ。焼土は発見していないが、径30cm深さ7cmの浅いP<sub>9</sub>には炭化物と灰で埋まり付近の床面には炭化物が分布していた。また主柱に囲まれる区域は固く締っていた。この住居跡も80-3号住居跡同様床面に隅丸方形を呈する平面形が現われた。各壁より内側に約70cm入り、住居プランと同心である。この区画内に貼り床が施こされている。この貼り床(厚さ2~3cm)をはずすと、ごく薄い黒褐色粘質土が現われこの下に、固く締った床と思われる面を検出した。また区画端部を周る巾約20cm深さ5cm~10cmの壁溝と思われる溝を検出した。これらより、この住居跡はプラン拡張による建て替えと判断した。また新たに柱穴等は検出されず、建て替え時には住居必要施設である主柱穴は再利用され、P<sub>8</sub>-P<sub>10</sub>も旧プラン内



第28图 82-2号住居跡出土土器実測图(1) (S=1/3)

0 5 10cm



第29図 82-2号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)

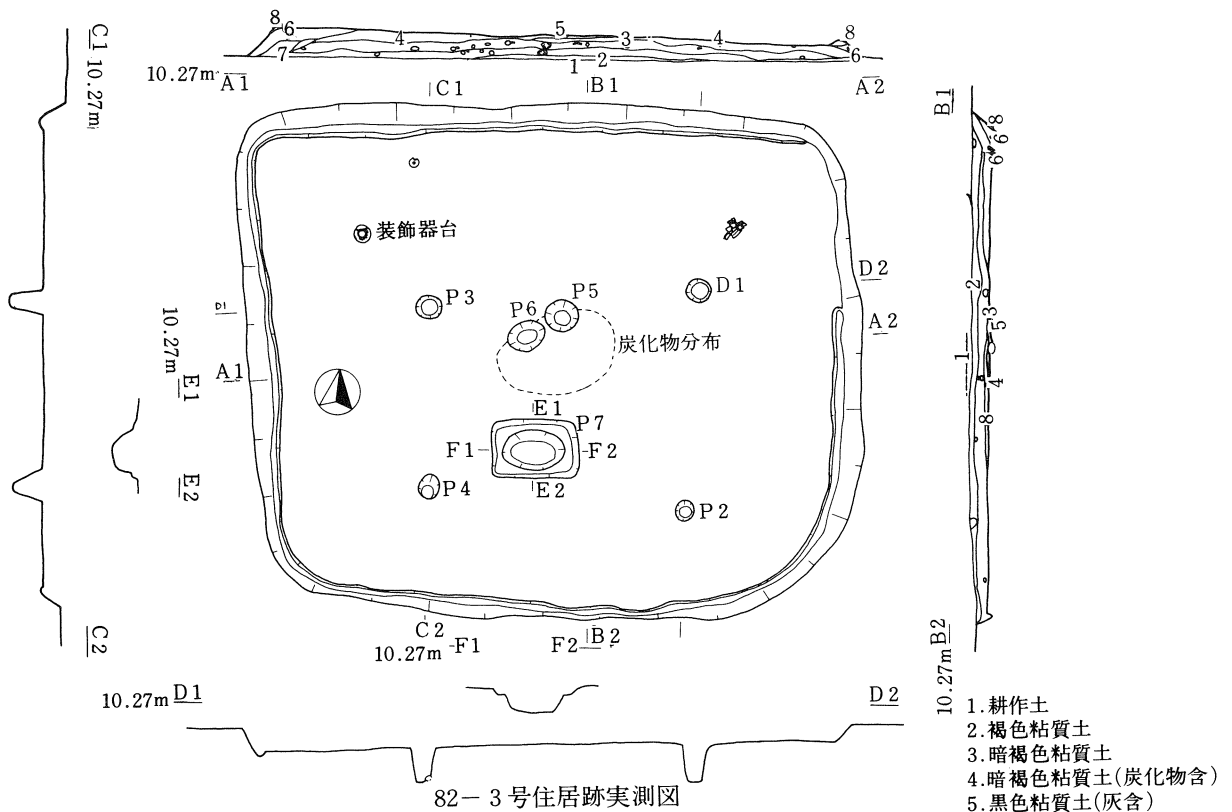
に位置することから同様と思われる。

土器は、床面より第28図4、5、7（完形）8、9、10、第29図17、18、20、21、24、25が出土し、8は床に食い込んでいた。二段掘りのP<sub>6</sub>より第28図1、この段部より14が出土した。

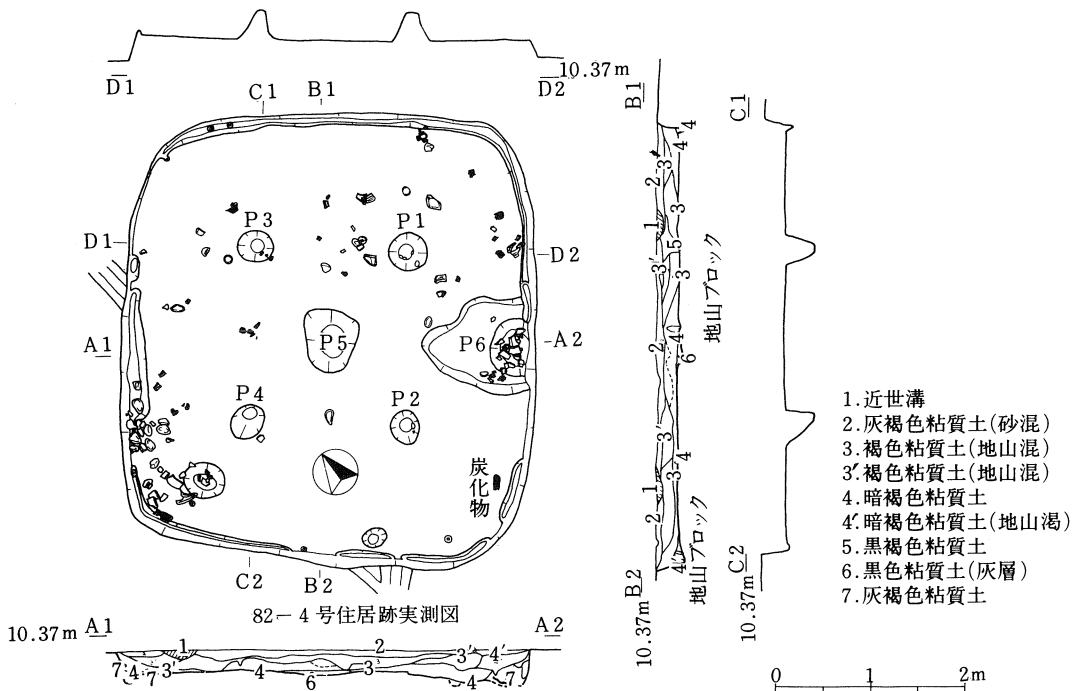
### 82-2号住居跡土器観察表

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 部 (底 部 部)	胎 土	色 調	焼成
第28図 1	甕	口径 210 頸径 178	外 擬凹線 7 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	褐 色	良
2	甕	口径 195 頸径 160	外 擬凹線 6 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	淡 灰 色	良
3	甕	口径 192 頸径 146	外 擬凹線 6 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙 褐 色	良
4	甕	口径 135 頸径 94	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ ハケ後ナデ	内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 少	乳 白 色	良

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第28図 5	甕	口径 120 頸径 91	外 擬凹線 5 ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 微粒砂 多	橙褐色	良
6	甕	口径 132 頸径 115	外 擬凹線 5 内 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
7	甕	口径 123 頸径 94 胴径 160 底径 22 器高 161	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 全体美しい 内 ケズリ後ナデ	微礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
8	壺	口径 110 頸径 92	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ後ナデ	内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	灰乳褐色	やや不良
9	壺	口径 120 頸径 96	外 面取り ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 荒いケズリ	細礫 多	淡茶褐色	良
10	底部	底径 30		外 ハケ 底面ナデ 内 ケズリ上げ	細礫 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良
11	底部	底径 18		外 ハケ ケズリ 内 ケズリ	細礫 少 微粒砂 多	黒褐色	良
12	底部	底径 13		外 ハケ 内 ケズリ	中礫 多	橙褐色	良
13	底部	底径 65		外 ケズリ後ナデか 底面 内 ケズリ ケズリ	細粒砂 多	暗灰色	良
14	高坏	口径 225 坏高(75)	外 ヘラ磨きか(一部ハケが見 内 ヘラ磨きか える)		微礫 少 細礫 少 微粒砂 多	赤乳白色	良
15	高坏	口径 210 坏高(72)	外 ヘラ磨きか 赤彩痕 内 ヘラ磨きか 赤彩痕		細礫 少 微粒砂 多	淡褐色	良
16	高坏か	口径 167	外 ヘラ磨き 赤彩痕 内 ヘラ磨き		細粒砂 多	赤乳褐色	良
第29図 17	装飾器台	口径 176 受部径 153 垂下部径 146	外 ヘラ磨き 涙滴形透穴8(4組) 内 ヘラ磨き		微礫 多 微粒砂 多	乳褐色	良
18	装飾器台	受部径 142	外 ヘラ磨き 涙滴形透穴8(4組) 内 ヘラ磨き 赤彩	外 ヘラ磨き 透穴 4 内 ナデ	細礫 少 微粒砂 多	紅色	良
19	装飾器台	口径 150	外 ヘラ磨き 赤彩 内 ヘラ磨き 赤彩		微礫 多 微粒砂 多	紅色	やや不良
20	器台	裾径 130		外 ハケ後ヘラ磨き 内 端部板状工具ナデ ハケ後ナデ	微礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
21	高坏			外 ヘラ磨き 内 ハケ後ナデ	細礫 多 微礫 多	乳褐色	良
22	器台			外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデ	細礫 少 微粒砂 多	淡褐色	良
23	蓋か	口径 188 器高 54	外 ハケ後 荒いヘラ磨き 内 ハケ後 ナデ		微粒砂 多	橙褐色	良
24	蓋	つまみ径48	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		微礫 多 微粒砂 少	橙乳白色	良
25	小型土器	胴径 78	外 ヘラ磨き 赤彩 内 ケズリナデ(指頭)		細礫 多	淡紅色	良



1. 耕作土
2. 褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土(炭化物含)
5. 黒色粘質土(灰含)
6. 灰褐色粘質土(地山混)
7. 黄灰色粘質土
8. 灰色粘質土



1. 近世溝
2. 灰褐色粘質土(砂混)
3. 褐色粘質土(地山混)
- 3'. 褐色粘質土(地山混)
4. 暗褐色粘質土
- 4'. 暗褐色粘質土(地山混)
5. 黒褐色粘質土
6. 黒色粘質土(灰層)
7. 灰褐色粘質土

第30図 82-3号・82-4号住居跡実測図 (S=1/80)

(11) 82-3号住居跡 (第30図)

調査区北東に位置し82-2号住居跡とは2.3m隔てる。不整な隅丸方形プランを呈し、東南隅は約160度を開き、北壁-南壁間5.3m、東壁-西壁間6.3m、を測り床面積29.8㎡である。住居東南部約1/2は礫層を掘り込んだもので、不整プランはこの影響かもしれない。壁高は北壁23cm南壁12cm~16cmを測る。壁溝は巾10cm、深さ5cm~7cmを測り、北東の一部を除き壁内側に周る。支柱穴、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>は南にかたより長方形に配置される。P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間2.35m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間2.85m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間2.7m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>間1.95mを測る。80-3・82-1・82-2号住居跡と同様に南側柱穴間の内側に2段掘りの特殊ピットを有する。長辺91cm、短辺62cm、深さ10cmの1段目を持ち、この中央に長軸64cm、短軸42cmの楕円形を呈す床面からの深さ30cmを測るピットが掘られている。焼土は確認していないが、炭化物の推積する径約30cm、深さ10cmのP<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>を検出した。床面は礫層の影響を受け、レベル差15cmで西に傾斜している。

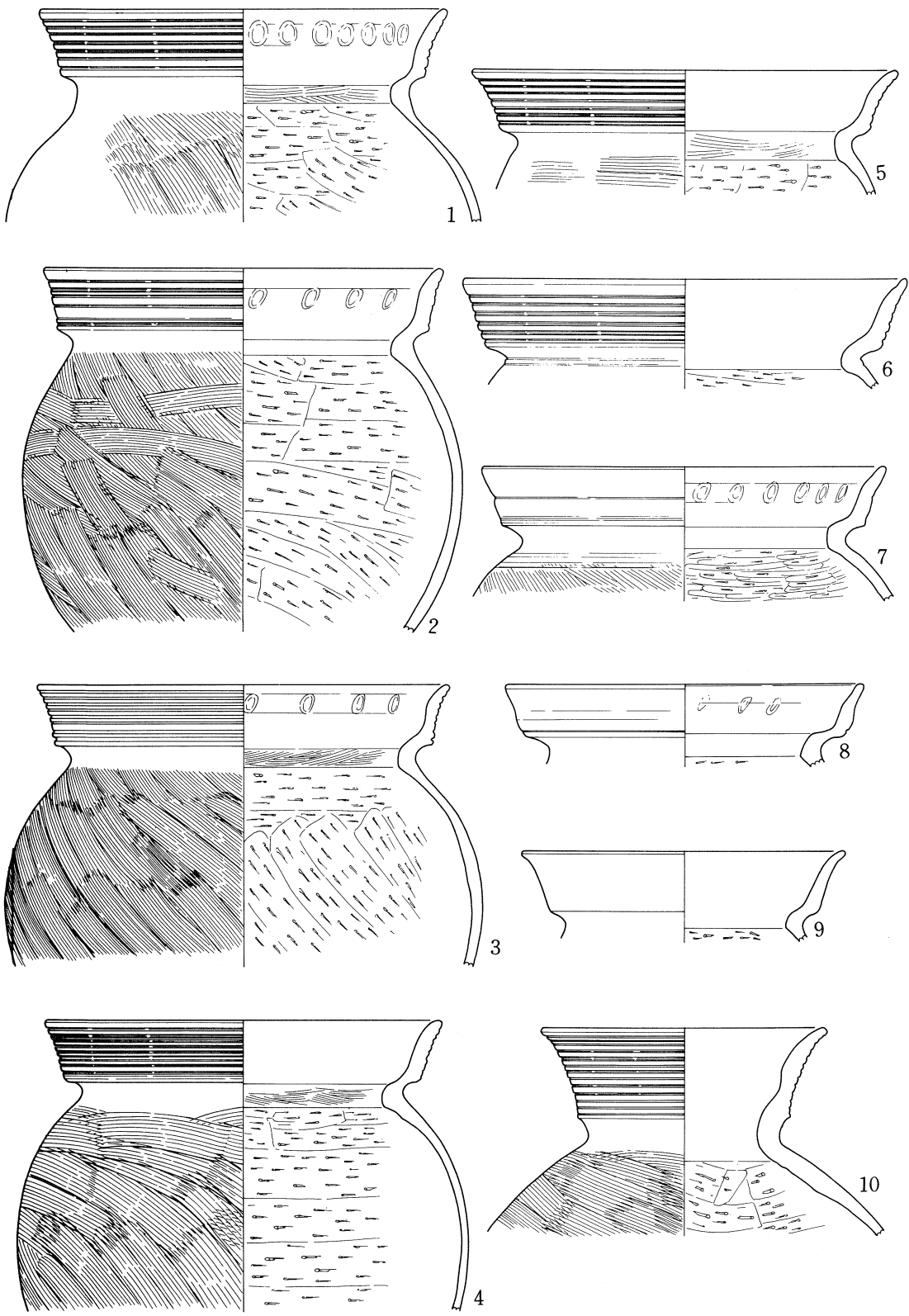
覆土は床面真上まで多くの礫と土器を含む茶褐色粘質土である。

土器は床面より1、16、19、34、39、40、43、44、45が、覆土下層からは、2、6、8、9、10、15、17、20、23、48が出土した。

82-3号住居跡出土土器観察表

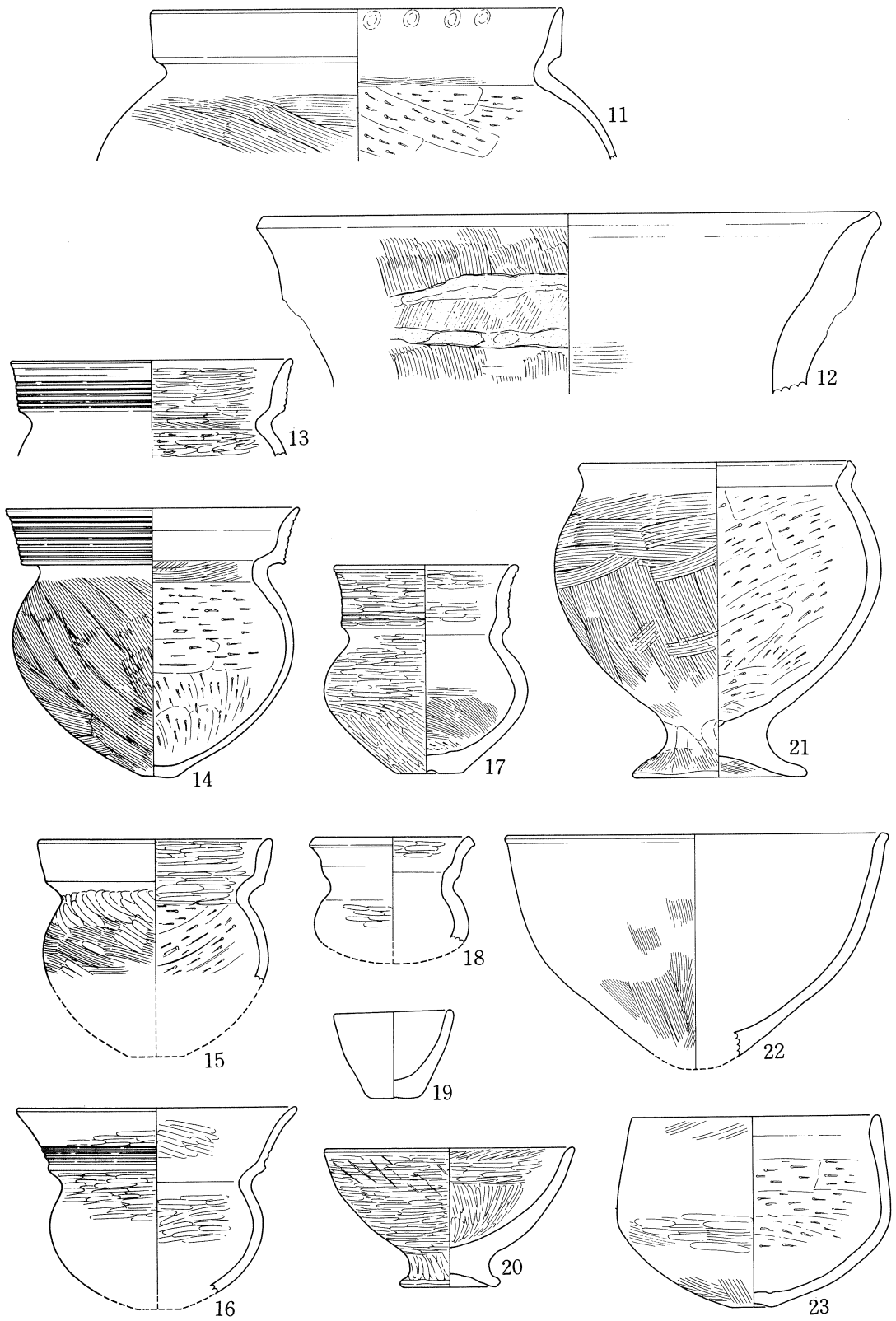
図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第31図	1	口径 193 頸径 157	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多	茶褐色	良
	2	口径 180 頸径 162	外 擬凹線 5 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	3	口径 195 頸径 163 胴径 228	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ 指頭圧頭 ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	橙褐色	良
	4	口径 188 頸径 152 胴径 216	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細礫砂 多	黒色	良
	5	口径 200 頸径 158	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	灰褐色	良
	6	口径 210 頸径 168	外 擬凹線 6 ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	中礫 少 微礫 多	灰褐色	良
	7	口径 190 頸径 154	外 ナデ ナデ 内 ナデ(上部 板状工具か)ナデ 指頭圧痕	外 ハケ後ナデ 内 ヘラ磨き	微礫 多 中礫 少	明灰褐色	良
	8	口径 168 頸径 128	外 ナデ ナデ 内 ナデ(上部 板状工具か)ナデ		細礫 少 微礫 少	橙褐色	良
	9	口径 152 頸微 90	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	微礫 多 微粒砂 多	淡紅色	やや不良
	10	口径 134 頸径 90	外 擬凹線 12 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多 微粒砂 多	淡橙色	良
第32図	11	口径 195 頸径 182	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	明褐色	良
	12	口径 290 頸径(225)	外 ナデ ハケ 内 ハケ後ナデ		中礫 少 細礫 多 細粒砂 少	赤茶褐色	良



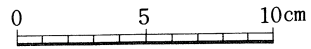


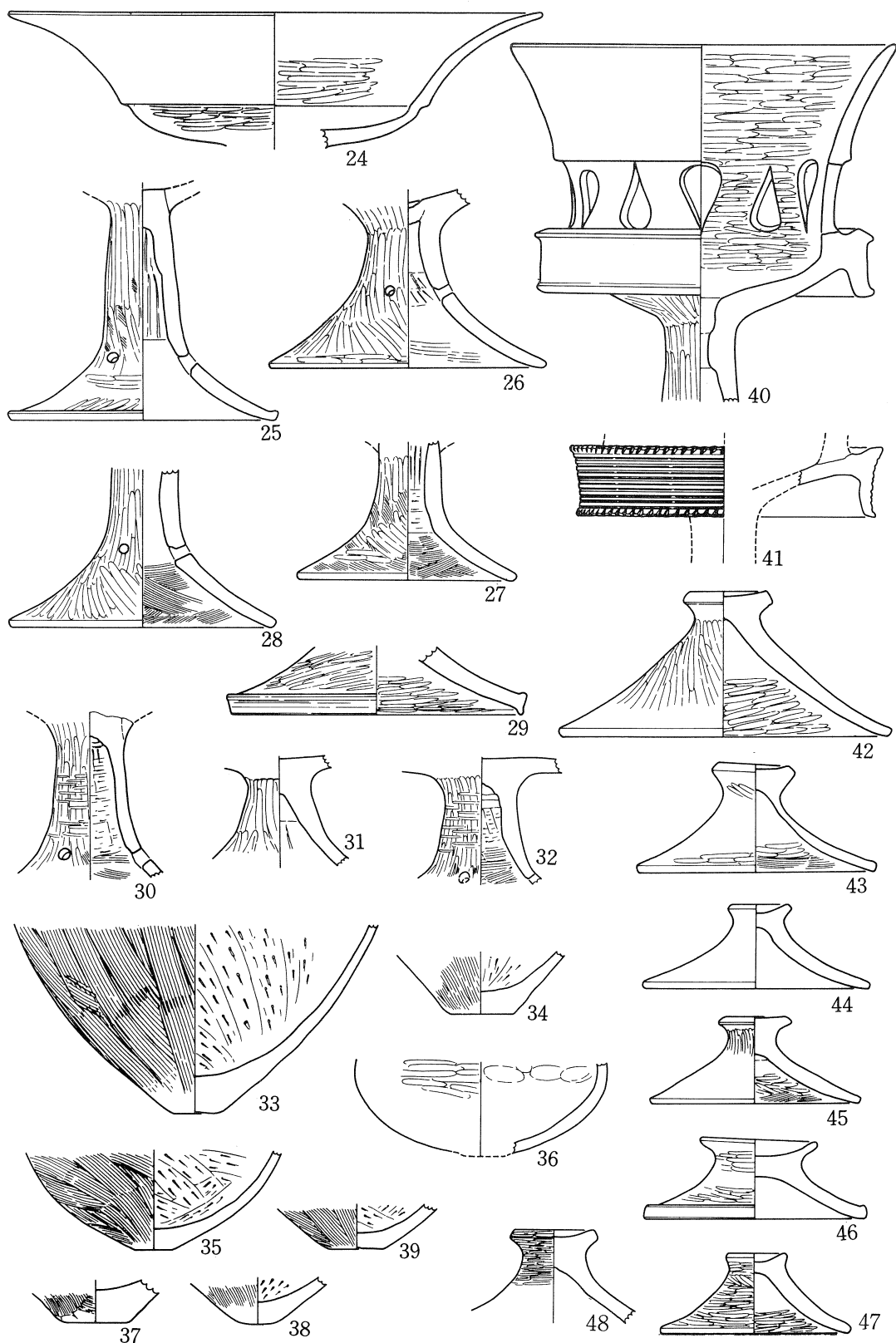
第31图 82-3号住居跡出土土器実測図(1) (S=1/3)

0 5 10cm



第32图 82-3号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)





第33图 82-3号住居跡出土土器实测图(3) (S=1/3)

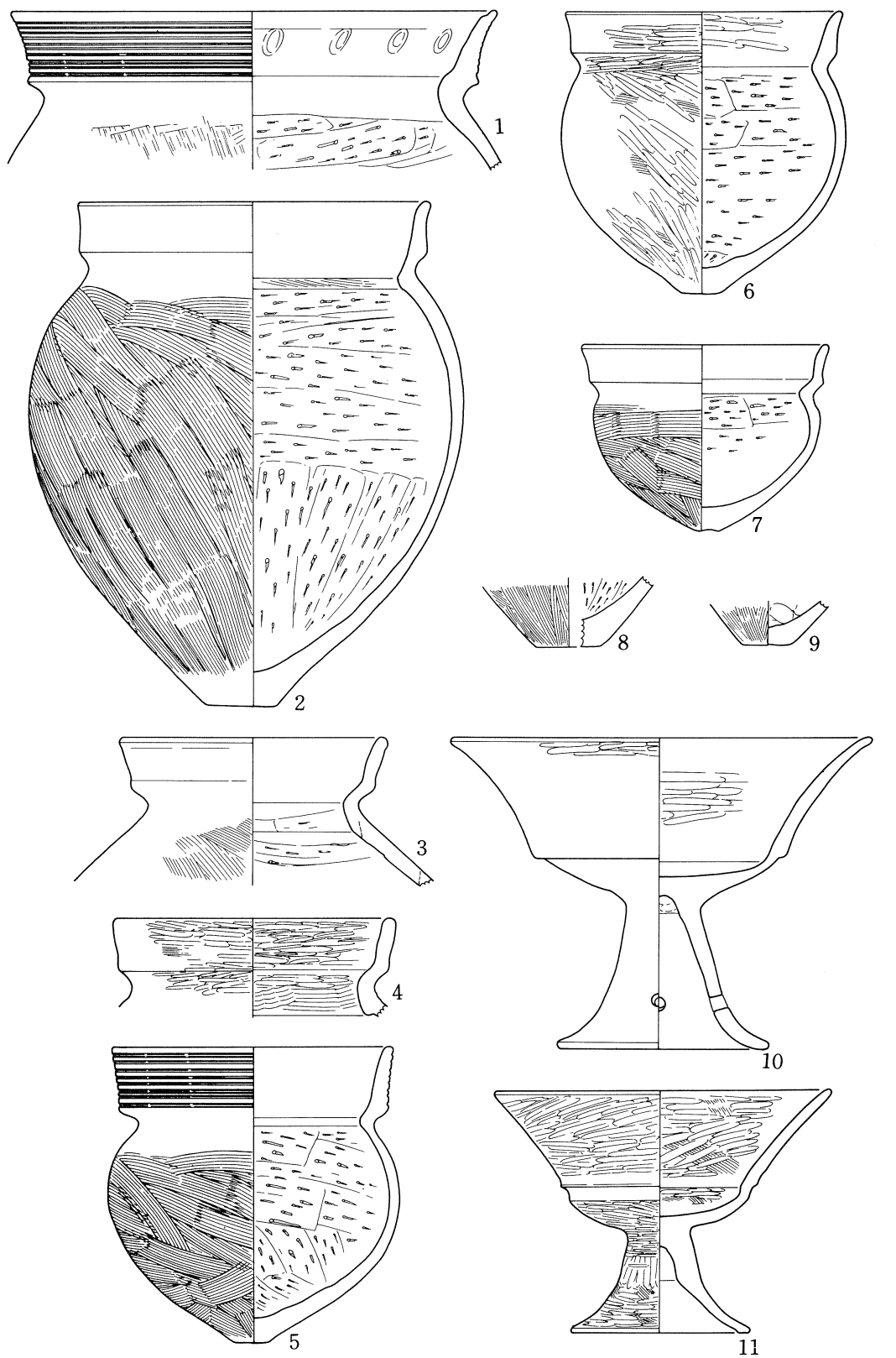
0 5 10cm

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 体 部 (底 部 部)	胎 土	色 調	焼成
13	第32図 甕 (小型)	口径 133 頸径 114	外 擬凹線 5 ナデ 内 ヘラ磨き ナデ ハケ	内 ヘラ磨き	細礫 多 微礫 多 微粒砂 多	茶 褐 色	良
14	甕 (小型)	口径 140 頸径 109 胴径 135 底径 17 器高 150	外 擬凹線 9 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ	微礫 多	黒 褐 色	良
15	甕 (小型)	口径 110 頸径 89 胴径 113	外 ナデ ナデ 内 ヘラ磨き ヘラ磨き	外 ハケ (肩部 ハケの上ヘラ磨き) 内 ケズリ	中礫 多 細粒砂 多	灰 褐 色	良
16	甕 (小型)	口径 133 頸径 91 胴径 102	外 擬凹線2 ヘラ磨き ヘラ磨き 内 ヘラ磨き ヘラ磨き	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	細礫 少 細粒砂 少	橙 褐 色	良
17	甕 (小型)	口径 87 頸径 73 胴径 98 器高 101	外 擬凹線をヘラ磨きて消す ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	外 ヘラ磨き 内 下半 ハケ 底 ケズリ	細礫 多 微礫 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良
18	甕 (小型)	口径 73 頸径 58 器高 (61)	外 ナデ ナデ 赤彩 内 ヘラ磨き(一部ナデ) ナデ	外 ヘラ磨き(胴) 赤彩 内 ナデ(指頭)	細礫 少 微礫 少	淡 紅 色	良
19	壺 (手づね)	口径 56 底径 25 器高 42	外 ナデ(指頭)か 内 ナデ(指頭)か		微礫 少 微粒砂 少	紅 褐 色	やや不良
20	壺	口径 119 底径 48 器高 67	外 ヘラ磨き(細い) 内 ヘラ磨き(細い)		中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	明 褐 色	良
21	台付甕	口径 127 頸径 127 胴径 155 台底径 83 器高 152	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 台基部 ケズリ後 ナデ 台部 ハケ 内 ケズリ 台部 ハケ	中礫 多 細礫 少 細粒砂 少	橙 褐 色	良
22	鉢	口径 180 器高(113)	外 ハケ(摩耗著しい) 内 ケズリか		細礫 多 細粒砂 多	褐 色	やや不良
23	壺	口径 118 底径 20 器高 92	外 ハケ後ヘラ磨きか 内 ナデか	外 ハケ後ヘラ磨きか 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多	橙 褐 色	良
第33図 24	高坏	口径 248	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少	橙 褐 色	良
25	高坏	裾径 128 脚高 100		外 ヘラ磨き 裾 ヘラ磨き 後ナデ 透穴3 内 ケズリ 裾 ナデ	中礫 少 微粒砂 多	明 褐 色	良
26	高坏	裾径 130 脚高 70		外 ヘラ磨き ヘラ磨き 透穴3 内 ケズリ ハケ後ナデ	細礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
27	高坏	裾径 104 脚高 60		外 全面 ハケ後ヘラ磨き 内 ケズリ 裾 ハケ	細礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
28	高坏	裾径 122		外 全面 ヘラ磨き 透穴3 内 ハケ 端部 ナデ	微粒砂 多	橙 褐 色	良
29	高坏	裾径 136		外 ヘラ磨き 端部板状 工具 ナデ 内 ヘラ磨き	微礫 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良
30	高坏			外 ヘラ磨き 透穴3 内 ケズリ 裾部 ハケ	微礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
31	高坏			外 ヘラ磨き 内 ケズリ後 ヘラ磨き	細礫 少 微粒砂 少	橙 褐 色	良
32	高坏			外 ヘラ磨き(ハケ跡) 内 ケズリ ハケ	細礫 少 微粒砂 少	淡 褐 色	良

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部)	胎 土	色 調	焼成
33	第33図 底部	底径 23		外 ハケ 内 ケズリ上げ	細礫 多 細粒砂 多	灰茶褐色	良
34	底部	底径 30		外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 微粒砂 多	茶褐色	良
35	底部	底径 18		外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 少	灰褐色	良
36	底部	底径(20)		外 ヘラ磨き, ナデ, 煤付着 内 ナデ(指頭)	細礫 多 微粒砂 多	橙褐色	良
37	底部	底径 30		外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ	微礫 多	灰褐色	良
38	底部	底径 15		外 ハケ 底面 ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
39	底部	底径 24		外 ハケ 底面 ハケ 内 ケズリ後ナデか	微礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
40	装飾 器台	口径 182 受部径 159 垂下部径 156	外 ヘラ磨き 涙滴形透穴12 内 ヘラ磨き (6組)	外 体底部 ヘラ磨き 後ナデ	細礫 少	橙褐色	良
41	装飾 器台	受部径 147		外 ヘラ磨き 垂下部擬凹 線9 上下きざみ目 内 ヘラ磨き 垂下部 ハケ後ナデ	細粒砂 多 微粒砂 多	橙赤褐色	良
42	蓋	つまみ径 41 口径 155 器高 52	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き(ハケ跡)		細礫 少 微粒砂 多	橙褐色	良
43	蓋	つまみ径 38 口径 112 器高 52	外 ヘラ磨き 内 上部 ケズリ後ナデ 下部 ハケ後ヘラ磨き		細粒砂 多 微粒砂 多	明褐色	良
44	蓋	つまみ径 14 口径 116 器高 40			中礫 多 微礫 多	橙褐色	やや不良
45	蓋	つまみ径 33 口径 97 器高 31	外 ハケ後ヘラ磨き 内 ハケ後ヘラ磨き		微礫 少 微粒砂 少	灰褐色	良
46	蓋	つまみ径(54) 口径 104 器高 39	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨きか		大礫 少 細礫 多 微粒砂 多	淡灰褐色	やや不良
47	蓋	つまみ径 28 口径 89 器高 38	外 ヘラ磨き(荒い) 内 ヘラ磨き(荒い)		大礫 少 中礫 少 微礫 多	灰乳褐色	良
48	蓋	つまみ径 42	外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデか		細礫 多 微粒砂 少	明橙褐色	良

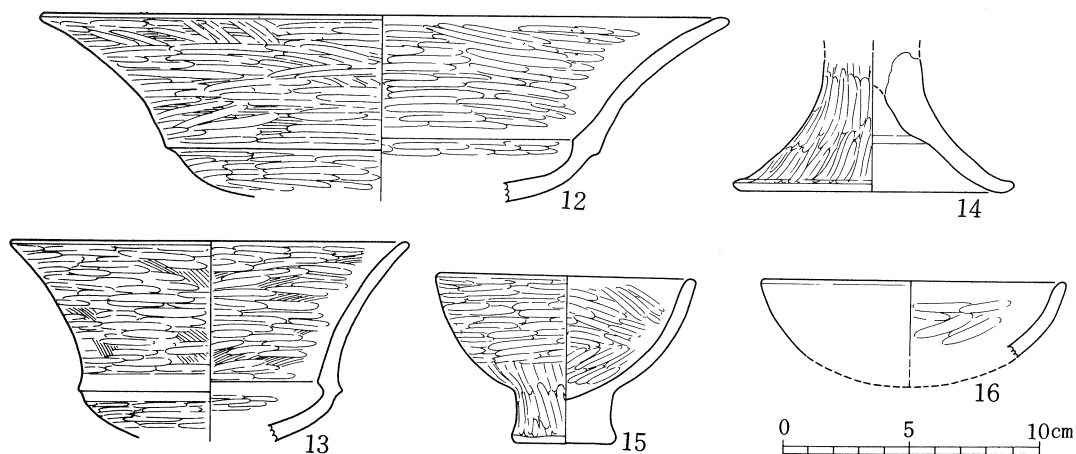
## (12) 82-4号住居跡(第30図)

調査区中央東側に位置し、東河道跡推定肩部より約6m離れる。平面形は隅丸方形を呈し、長辺4.6m、短辺4.2mを測る。壁高は27cm~30cmを測り、巾8cm~10cm深さ10cmの壁溝が西北の一部を残し、ところどころ途切れながらも壁内を周る。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>4個が、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間1.84m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間1.58m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間1.64m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>間1.8mの各辺をもつ方形に配置される。長軸66cm、短軸52cm、深さ13cmを測るP<sub>5</sub>は住居の中心に位置し、炭化物が堆積していた。東南壁際中央部に2段掘りの特殊ピットP<sub>6</sub>が位置する。1段目は不整形を呈し深さ5cm



第34图 82-4号住居跡出土土器(1) (S=1/3)

0 5 10cm



第35図 82-4号住居跡出土土器実測図(2) (S=1/3)

を測り、2段目は長軸60cm、短軸40cmの楕円形で深さ床面より15cmである。床面は平坦で、主柱方形内は固く締っていた。

覆土は基本として3層に分かれ、上層より灰褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質土で床面に至る。

土器は第34図3、8、9を除き床面上で検出し、同図1、2、7は二段掘りのP。より出土した。2、5、6、7、10、11、15は完形である。

### 82-4号住居跡出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第34図 1	甕	口径 225 頸径 196	外 擬凹線10 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
2	甕	口径 162 頸径 156 胴径 202 底径 33 器高 239	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ後ナデ	外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ	大礫 多 細礫 多 細粒砂 多	橙茶褐色	良
3	壺	口径 122 頸径 98	外 ナデ ナデ 内 ナデ ケズリ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 微粒砂 多	橙褐色	良
4	甕	口径 128 頸径 114	外 ハケ後へラ磨き へラ磨き 内 へラ磨き ハケ		細礫 多	橙褐色	良
5	甕	口径 130 頸径 108 胴径 136 底径 16 器高 139	外 擬凹線8 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ	大礫 多 細礫 多	茶褐色	良
6	甕 (小型)	口径 128 頸径 116 胴径 133 底径 18 器高 133	外 へラ磨き へラ磨き 内 へラ磨き(荒い) へラ磨き(荒い)	外 ハケ後へラ磨き(荒い) 内 ケズリ	中礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第34図 7	甕 (小型)	口径 113 頸径 98 胴径 106 底径 10 器高 88	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 少 中礫 多	灰褐色	良
8	底部	底径 28		外 ハケ 底面ケズリ 内 ケズリ	微礫 多 微粒砂 多	茶褐色	良
9	底部	底径 20		外 ハケ 底面ケズリ 内 ナデ(指頭)	細粒砂 多	淡茶褐色	良
10	高坏	口径 194 脚径 67 裾径 100 器高 148	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデ	中礫 少 細粒砂 多	橙褐色	良
11	高坏	口径 155 脚径 30 裾径 83 器高 115	外 ハケ後ヘラ磨き(ハケ跡) 内 ハケ後ヘラ磨き(ハケ跡)	外 ハケ後ヘラ磨き 内 ナデ	中礫 少 細粒砂 少	橙茶褐色	良
第35図 12	高坏	口径 268	外 ハケ後ヘラ磨き(ハケ跡) 内 ヘラ磨き(ていねい)		微礫 少 微粒砂 少	淡褐色	良
13	高坏	口径 155	外 ハケ後ヘラ磨き(荒い) 内 ハケ後ヘラ磨き(荒い)		細礫 少 微礫 多	橙茶褐色	良
14	高坏か	裾径 110		外 ヘラ磨き 内 ナデ	微礫 少	茶褐色	良
15	碗か	口径 100 台径 38 器高 67	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き	外 底面ケズリ	微礫 少	橙褐色	良
16	碗	口径 117	外 ナデ ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き		微礫 少	灰褐色	良

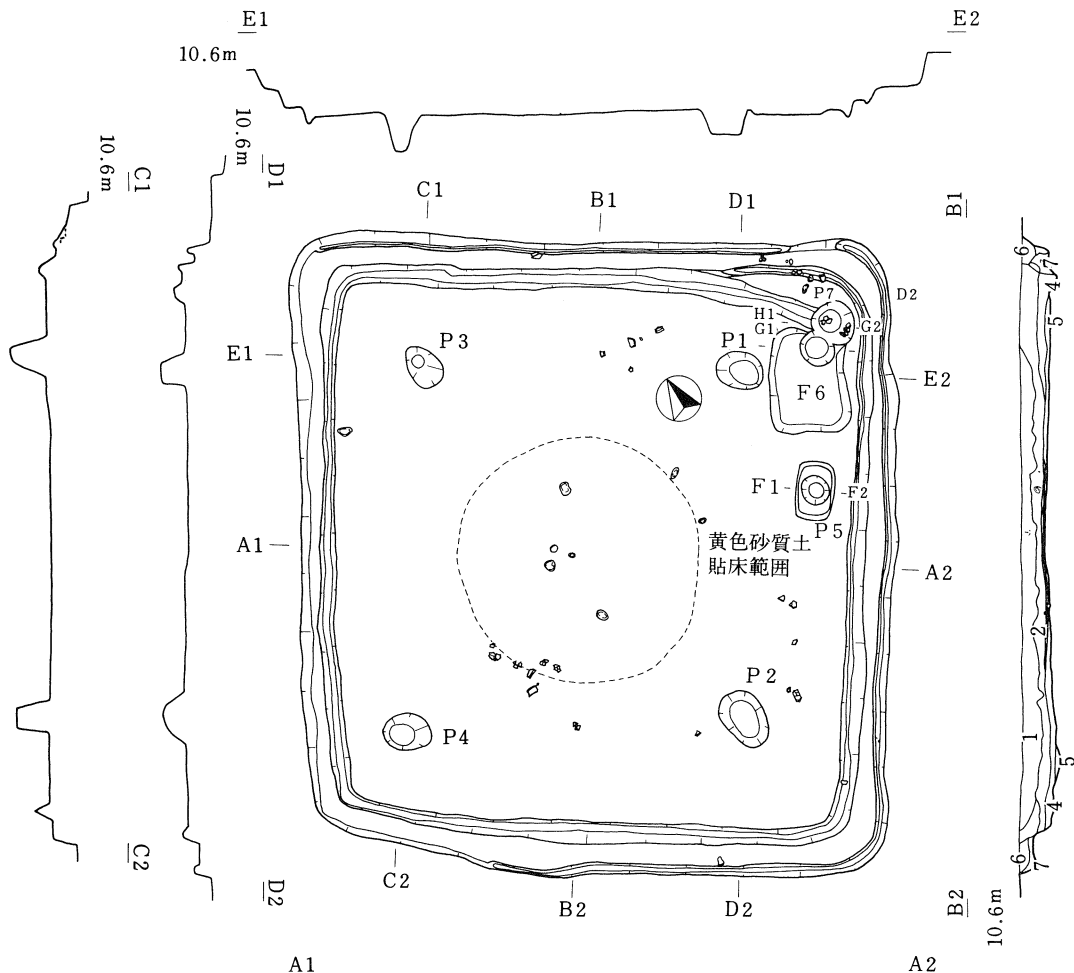
### (13) 83-1号住居跡(第36図)

調査区の西南部に位置し、81-1号住居跡とは2mを隔てる。長辺6.7m短辺6.2mを測り、床面積37.7㎡の平面方形を呈する住居を同心に縮小して建て替えており、縮小された住居は長辺6m、短辺5.7m、床面積31.9㎡を測る。このため床面の高さの違い(15cm)により巾15cm~30cmの段状部分を持つ検出状態となった。新住居では巾15cm~20cm、深さ6cm~10cmの壁溝が周る。支柱穴P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>がP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間3.8m、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>間3.4m、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>間3.6m、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>間3.95mを測り長方形に配置される。P<sub>5</sub>は2段掘りがされており1段目は62cm、長辺を壁と平行にもち、短辺40cm、深さ5cmの長形状を呈し、この内側に径30cm深さ床面より20cmのピットを有する。P<sub>6</sub>は深さ6cmの浅い掘り込みで、P<sub>7</sub>からは高坏が出土している。床面は平担で中央直径2.4mの円形状に貼り床が施こされ固くしまっている。

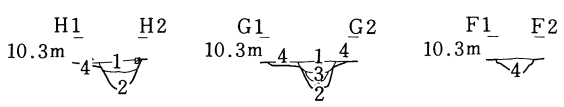
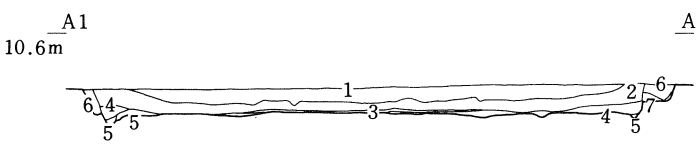
覆土は基本的に2層に分かれ、上層黒色粘質土、下層暗褐色粘質土である。

土器の出土量は少なく、1は床面8cm上で、3、4はP<sub>7</sub>より出土した。

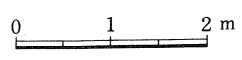




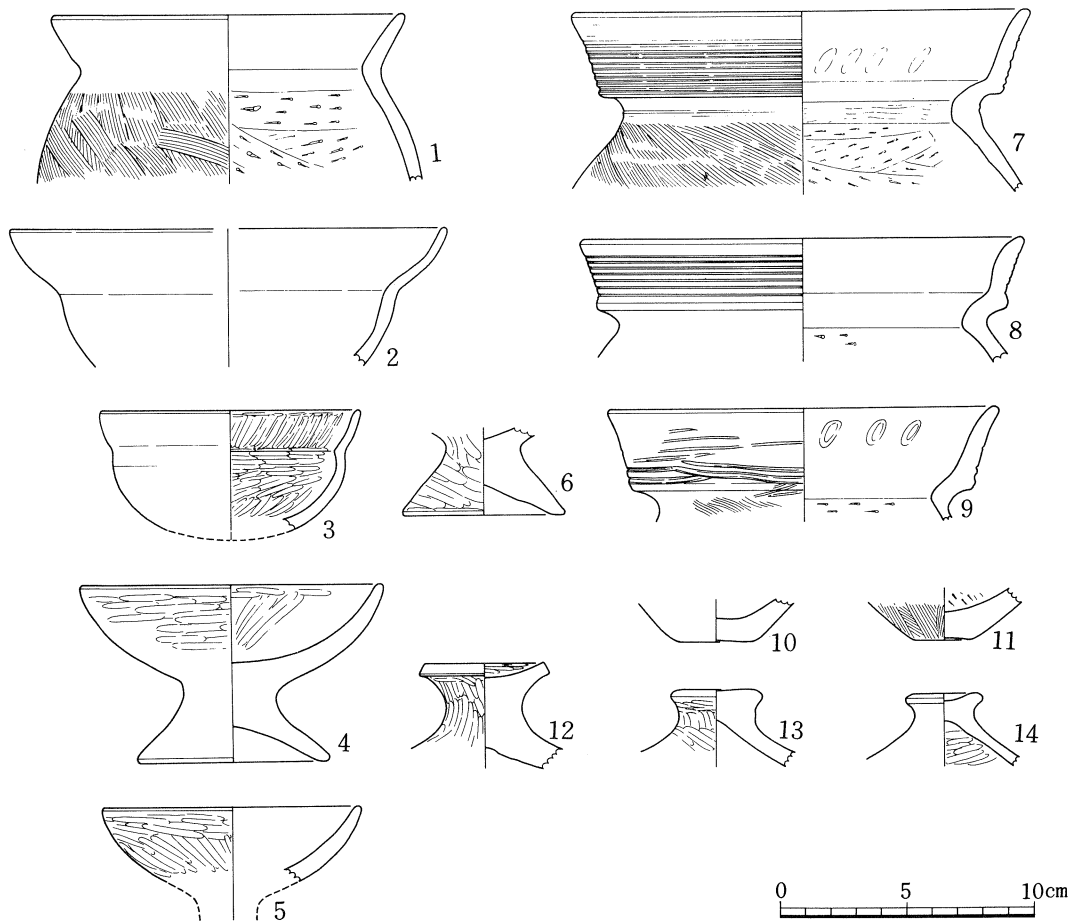
1. 黒色粘質土
2. 暗黒褐色粘質土
3. 貼り床・黄色砂質土
4. 灰褐色粘質土(砂混)
5. 暗灰褐色粘質土(砂混)
6. 茶褐色粘質土
7. 黄味茶褐色粘質土(砂混)



1. 暗褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土
3. 地山混黒褐色粘質土
4. 青暗褐色粘質土



第36図 83-1号住居跡実測図 (S=1/60)



第37図 83-1号住居跡出土土器実測図 (S=1/3)

83-1号住居跡出土土器観案表

図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第37図 1	甕	口径 138 頸径 106	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 色多 微礫 細粒砂	橙 色	良
2	鉢	口径(170) 頸径(126)			微粒砂 多	橙 褐色	不良
3	鉢 (小型)	口径 100 頸径 90 器高 (52)	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き	細粒砂 少	橙 褐色	良
4	高坏	口径 118 裾径 75 器高 71	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨きか	外 ヘラ磨きか 内 ナデ	細礫 多 細粒砂 多	橙乳白色	良
5	高坏	口径 100	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		中礫 少 細礫 少	淡 褐色	良
6	高坏	裾径 64		外 ヘラ磨き 内 ナデ	細礫 多 細粒砂 少	橙 褐色	良

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
第37図 7	甕	口径 173 頸径 146	外 擬凹線6 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	橙 褐 色	良
8	甕	口径 171 頸径 164	外 擬凹線7 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	淡橙褐色	やや 不良
9	甕	口径 152 頸径 114	外 擬凹線か ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙 褐 色	良
10	底部	底径 30		外 底面ハケ	細礫 多	淡橙褐色	良
11	底部	底径 23		外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	灰 褐 色	良
12	蓋	つまみ径 50	外 ヘラ磨き 内 ナデ		微粒砂 多	淡茶褐色	良
13	蓋	つまみ径 36	外 ヘラ磨き 内 ケズリ後ナデ		細礫 少 微粒砂 多	淡茶褐色	良
14	蓋	つまみ径 31	外 ナデ 内 ケズリ後ヘラ磨き		細礫 少 微粒砂 多	淡 褐 色	良

## 2、掘立柱建物跡

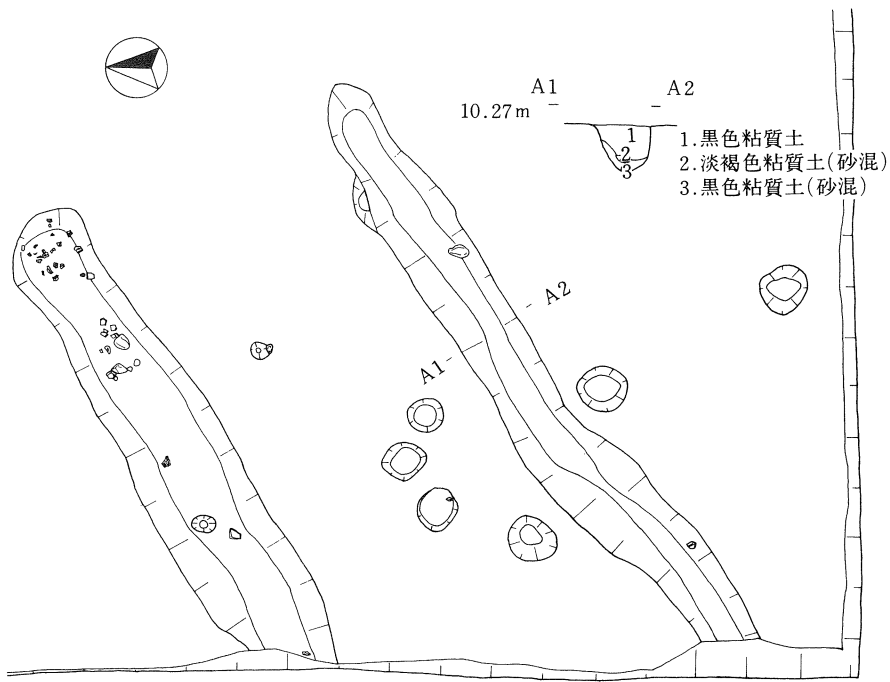
### (1) 82-1号掘立柱建物跡 (第38図)

調査区南部80-3号・80-7号・82-1号住居跡に囲まれるように位置する。上面巾約50~60cmの溝状遺構が2.6m隔て平行に掘られる。長さは不明である。金沢市塚崎遺跡、小松市高堂遺跡において報告されているが、本検出では溝内より掘られる柱穴は不明である。南側溝検出長は5.4mを測り、上記類例より1間×3間の柱間をもつであろう。

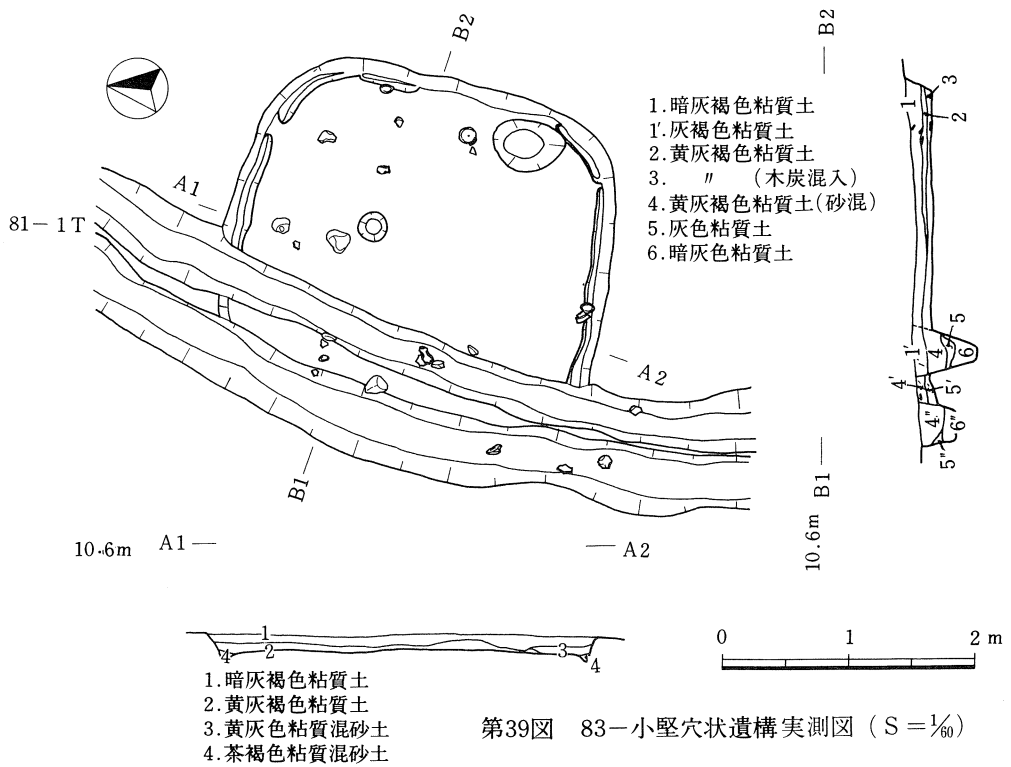
## 3、小堅穴状遺構

### (1) 83-1 小堅穴状遺構 (第39図)

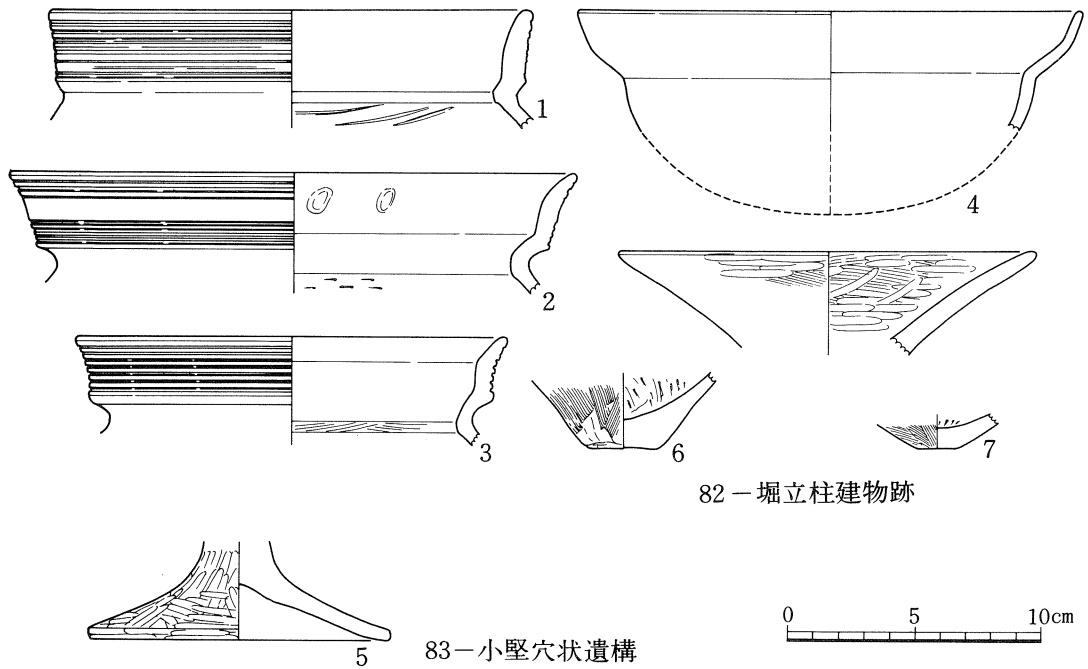
83-1号住居跡の西へ1m離れ位置し、81-1Tにより切られている。隅丸方形を呈すると推定され1辺3mを測るであろう。壁の高さは最も高い東壁で20cmを測る。巾5cm~10cm深さ7cm前後の溝を壁際にもつ。床面は平坦である。覆土は上層より暗灰褐色粘質土、下層は炭化物を含む黄灰褐色土である。



第38图 82-掘立柱建物跡 実測図 (S=1/60)



第39图 83-小墜穴状遺構 実測図 (S=1/60)



第40図 82-堀立柱建物跡 83-小堅穴状遺構出土土器実測図 (S=1/3)

82-堀立柱建物跡・83-小堅穴状遺構出土土器観察表

図番号	器種	大きさ mm (推定)	口 頸 部	体 部 (底部)	胎 土	色 調	焼成
第40図 1	甕	口径 183 頸径 178	外 擬凹線5 ナデ 内 ナデ ケズリ	内 ケズリ	大礫 少 中礫 多 細礫 多 微粒砂 多	褐色	良
2	甕	口径 220 頸径 185	外 擬凹線7 ナデ 内 ナデ ケズリ	内 ケズリ	細粒砂 多 細礫 多	明褐色	良
3	甕	口径 167 頸径 141	外 擬凹線7 ナデ 内 ナデ ハケ	内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	橙褐色	並
4	鉢	口径 197 頸径 161	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨きか		微粒砂 多	橙褐色	良
5	器台か	口径 163	外 ハケ後ヘラ磨き 内 ハケ後ヘラ磨き		細礫 少 微粒砂 多	明褐色	良
6	底部	底径 27		外 ハケ底面 ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	淡茶褐色	良
7	底部	底径 16		外 ハケ底面 ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多	暗茶褐色	良
8	高坏	裾径 116		外 ヘラ磨き 内 ナデ	微礫 少 微粒砂 多	淡茶褐色	良

## 4、溝状遺構

### (1) 「8の字」形溝状遺構(第41図)

80-6号住居跡と複合しこれを切る。北西を向き、上面巾50cm深さ20cmを測る。小円は長径3.9m、短径3.3m、大円は長径5.6m短径推定5m、全長で4.35mを測る。溝内より第43図1、2は溝底近く、3の須恵器蓋は上層より出土した。

### (2) 80-1 T溝(第41図)

調査区南端部において検出した。上面巾45cm、底面巾約20cm、長さ7.8mを測る。黒褐色粘質土が堆積していた。

### (3) 83-トレンチ調査区溝状遺構(第42図)

巾約50cm、深さ20cmの溝2条が併行し東南-西北方向に走り交わる。これを切り巾30cm深さ10cmの溝が北方向に走る。併行する2条の溝より土器が出土し、北側溝は第41図11、15残りは南側溝からである。

### (4) 81-「方形」溝状遺構(第41図)

81-1・2号住居跡を切る。巾約40cm前後、深さ10cmを測る。西側がゆるくカーブし一部は調査区外へ伸びる。

### (5) 81-3 T溝(第41図)

81-「方形」溝状遺構の西側において検出した。巾50cm、最深20cmを測る。4mの検出長であるが、83年調査区(トレンチ調査区、西南部)の溝と繋がろう。

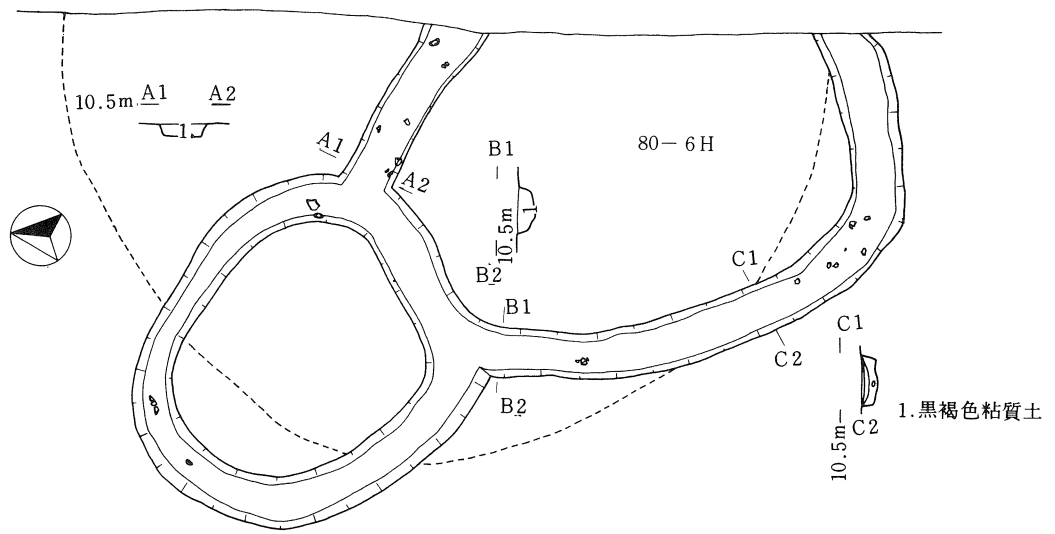
### (6) 81-1 T溝(第45図)

調査区の中央、83-1号住居跡、82-1号住居の、北、西、南の三面をとり囲むように検出した。81-1号住居跡西南壁西側より住居内に入り、北東壁と併行に出ていると考えている。80年調査区においてこの溝は検出しておらず(遺構発見時の平面写真等にも存在しない)未調査区域に両端部が位置するであろう。北側端部付近では溝底より深さ15cm~20cmのピットが3個掘られている。西側では一条が新たに分流し、本流と約10m併行し途切れる。土面巾40cm~45cmを測り、溝底の高さは83-小堅穴状遺構付近(57X、-20Y付近)が最も低く南側端部との差は53cmを測る。2条に併行する部分では支流より本流が10cm深い。このような住居を囲む溝は、津幡町谷内石山遺跡、七尾市奥原遺跡、七尾市万行赤岩山遺跡など丘陵上の遺跡で見られる。

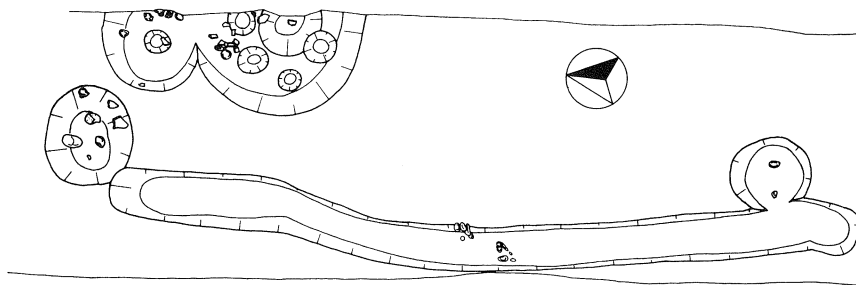
溝内より土器が出土しているが、南地区(65X、-1Y付近)と、北地区(50X、-14.5Y付近)の2ヶ所にまとまっていた。第46図11は北側端部(81-1T')より出土している。

### (7) 81-2 T溝(第45図)

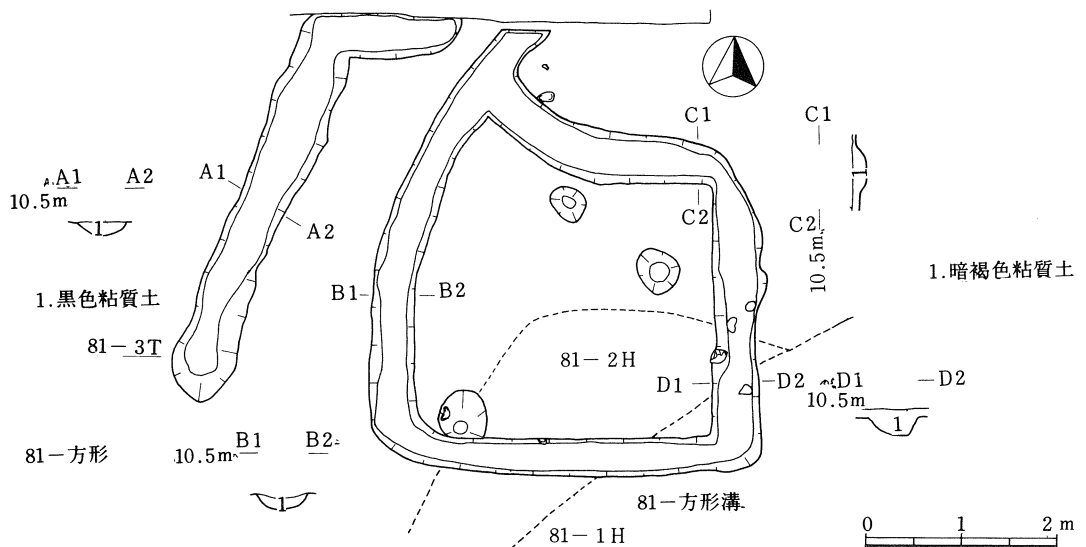
81年調査区中央部に弧を描くように検出した。南側端部では、81-1 T溝及び近世溝(用水溝)により切られている。巾は70cm~90cmを測るが遺存度が悪く深さは6cmである。途中で浅くなり途切れるが、81-2 T'に続くであろうか。また81-1 T溝のように80-7号住居跡を囲む溝であろうか。



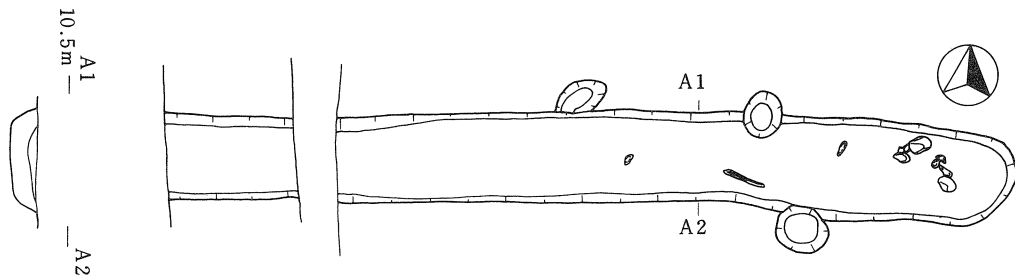
80-「8」形溝状遺構



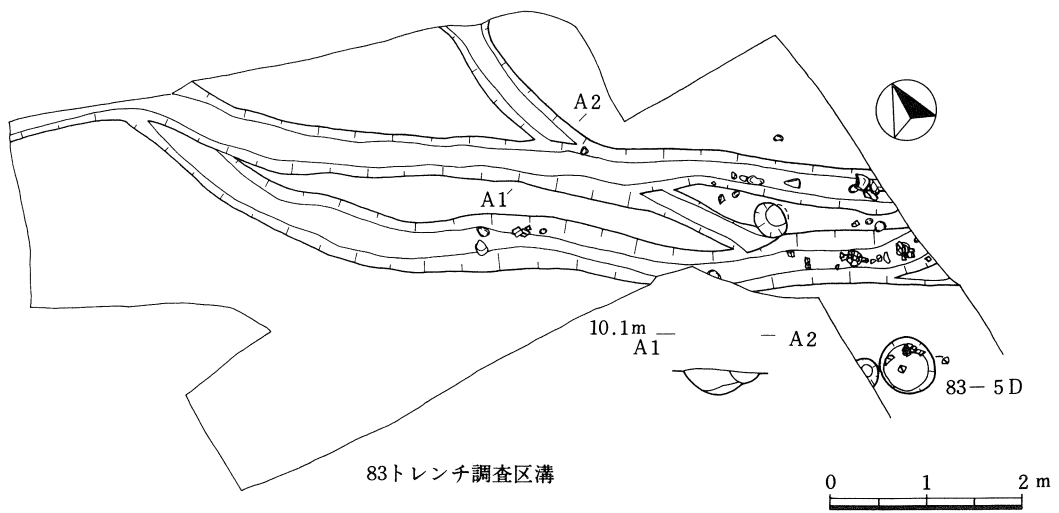
81-1T 溝状遺構



第41図 溝状遺構実測図(1) (S=1/80)



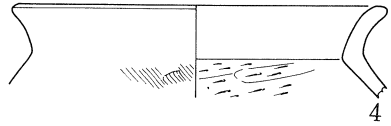
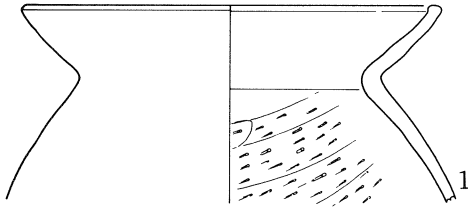
81-4T 溝状遺構



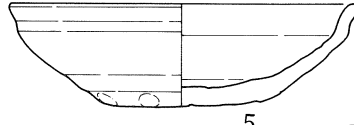
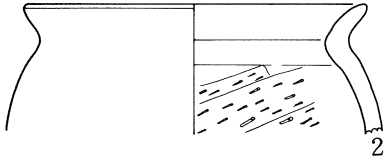
83トレンチ調査区溝

第42図 溝状遺構実測図(3) (1/80)

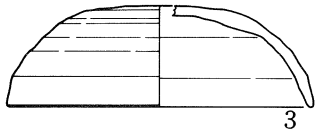
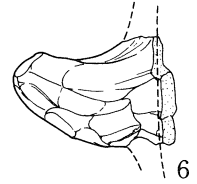




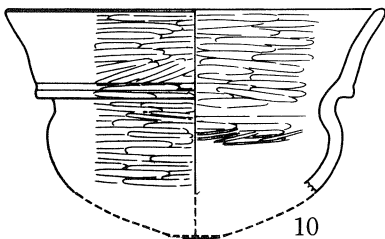
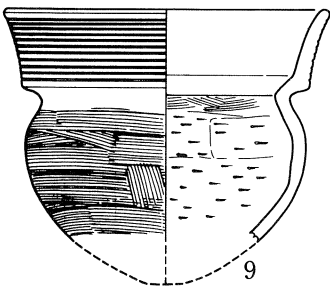
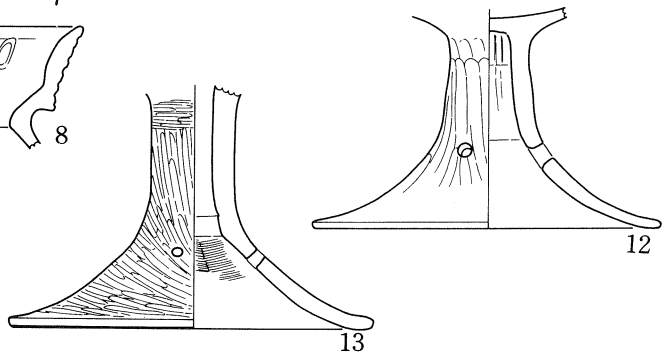
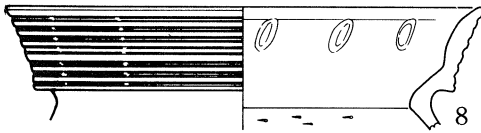
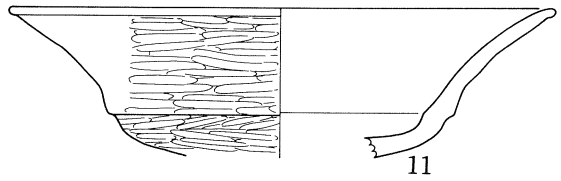
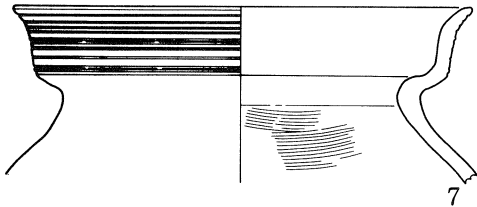
81-方形溝



81-4T

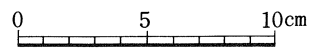


80-8の字



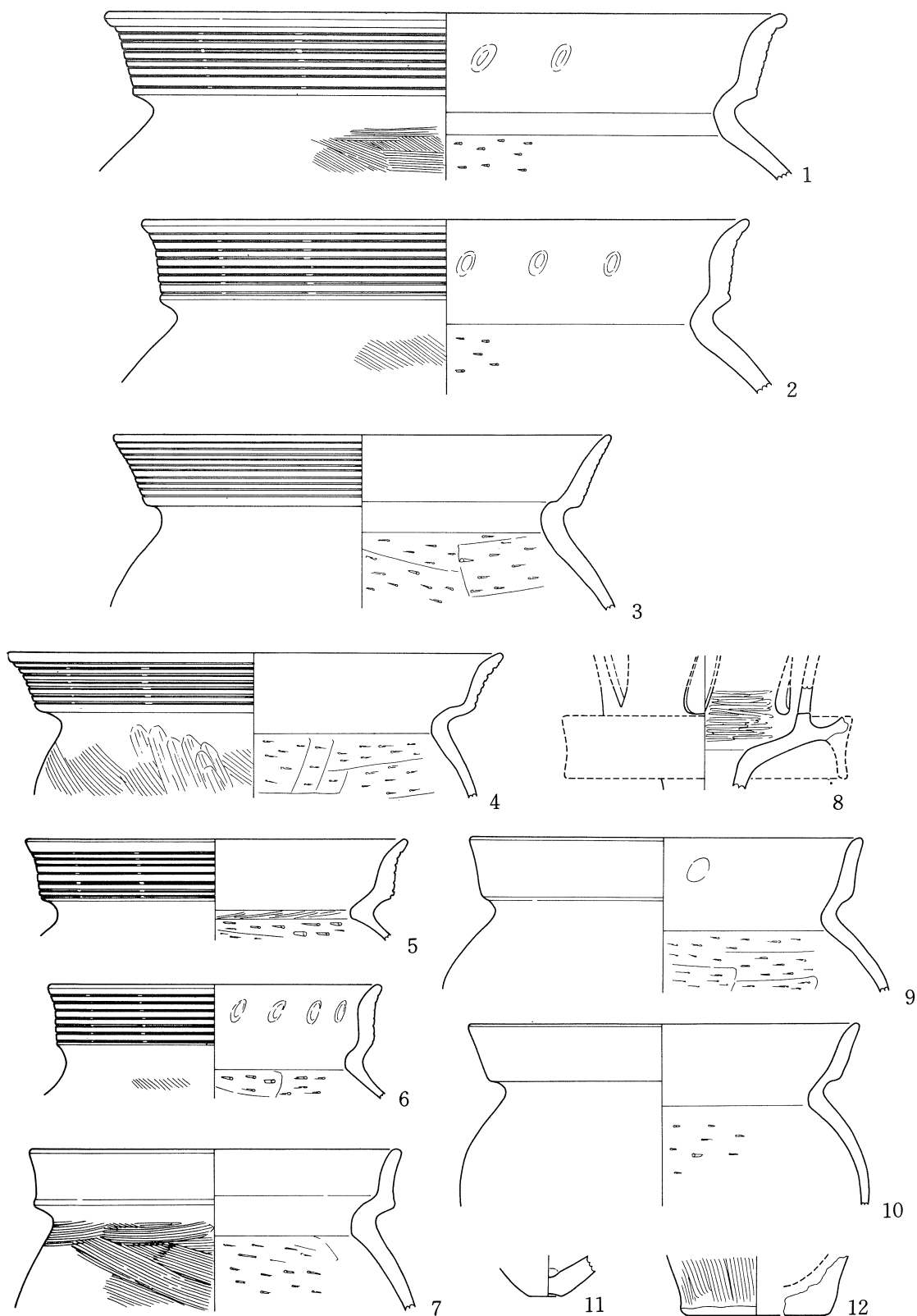
83-トレンチ調査区溝

第43図 溝出土土器実測図(1) (S=1/3)



溝内出土土器観案表

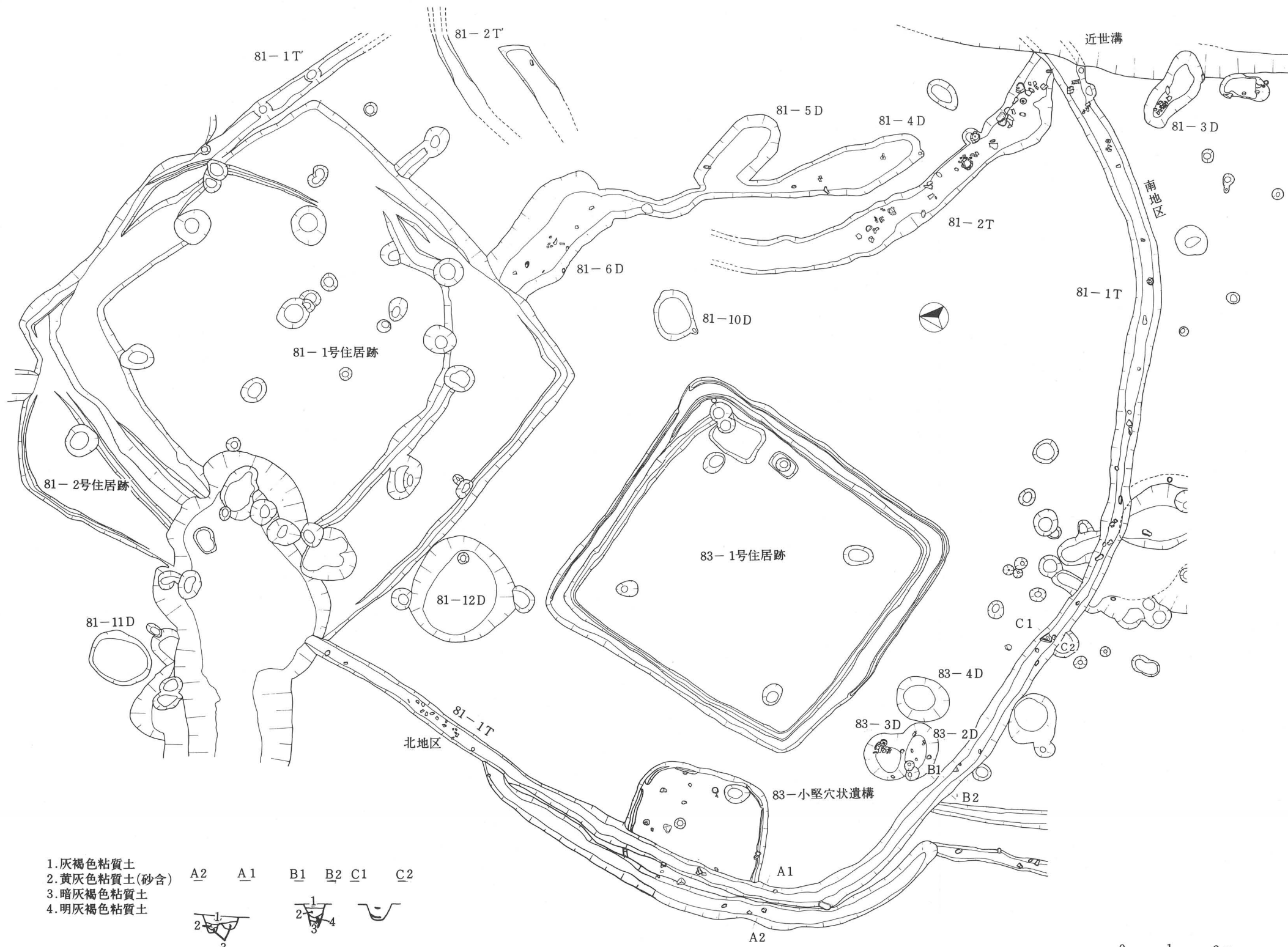
溝名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
80   8の字	第43図 1	甕	口径 162 頸径 118	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	細粒砂 多 微粒砂 多	褐 色	良
	2	甕	口径 133 頸径 120	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ケズリ後ナデ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	茶 褐 色	良
	3	蓋	口径 120 器高 40	外 回転ケズリ 回転ナデ 内 回転ナデ		中礫 少 微粒砂 多	青 灰 色	良
81   方形溝	4	甕	口径 148 頸径 129	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 多	明 褐 色	良
81   4T	5	蓋か	口径 135 器高 41	土師質 外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 底面 ヘラおこし 指頭圧痕 ナデハケ	細礫 少 微粒砂 多	淡茶褐色	良
	6	把手		外 押え ナデ(指頭) 内 ケズリ		細粒砂 多 微粒砂 多	褐 色	良
83   トレンチ 調査区 溝	7	甕	口径 179 頸径 140	外 擬凹線9 ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ後ハケ	細礫 多 微礫 多 微粒砂 多	褐 色	良
	8	甕	口径 185 頸径 147	外 擬凹線7 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	明 褐 色	良
	9	甕 (小型)	口径 127 頸径 98 胴径 111 器高(108)	外 擬凹線11 ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	茶 褐 色	良
	10	鉢	口径 149 頸径 110 胴径 116 器高(90)	外 ヘラ磨き 擬凹線1 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き ヘラ磨き	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き後ナデ	中礫 少 細礫 多 微粒砂 多	橙 褐 色	良
	11	高坏	口径 213	外 ヘラ磨き		中礫 少 細礫 多 微粒砂 多	淡 褐 色	良
	12	高坏	裾径 136		外 ヘラ磨き 透穴3 内 ケズリ ナデ	細礫 少 微粒砂 多	橙 褐 色	良
	13	高坏	裾径 143		外 ヘラ磨き 透穴(4) 内 ケズリ ハケ後ナデ	細礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	褐 色	良
	14	蓋	つまみ径 40	外 ヘラ磨き 内 ハケ後ヘラ磨き		細礫 少 微礫 少 微粒砂 多	橙 色	良
15	器台	口径 174 括径 34 器高(137)	外 ケズリ後ヘラ磨き(荒い)	外 ケズリ後ヘラ磨き 内 ケズリ ナデ(荒い)	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	橙 色	良	



81-1T (北地区)

第44图 溝出土土器実測図(2) (S=1/3)

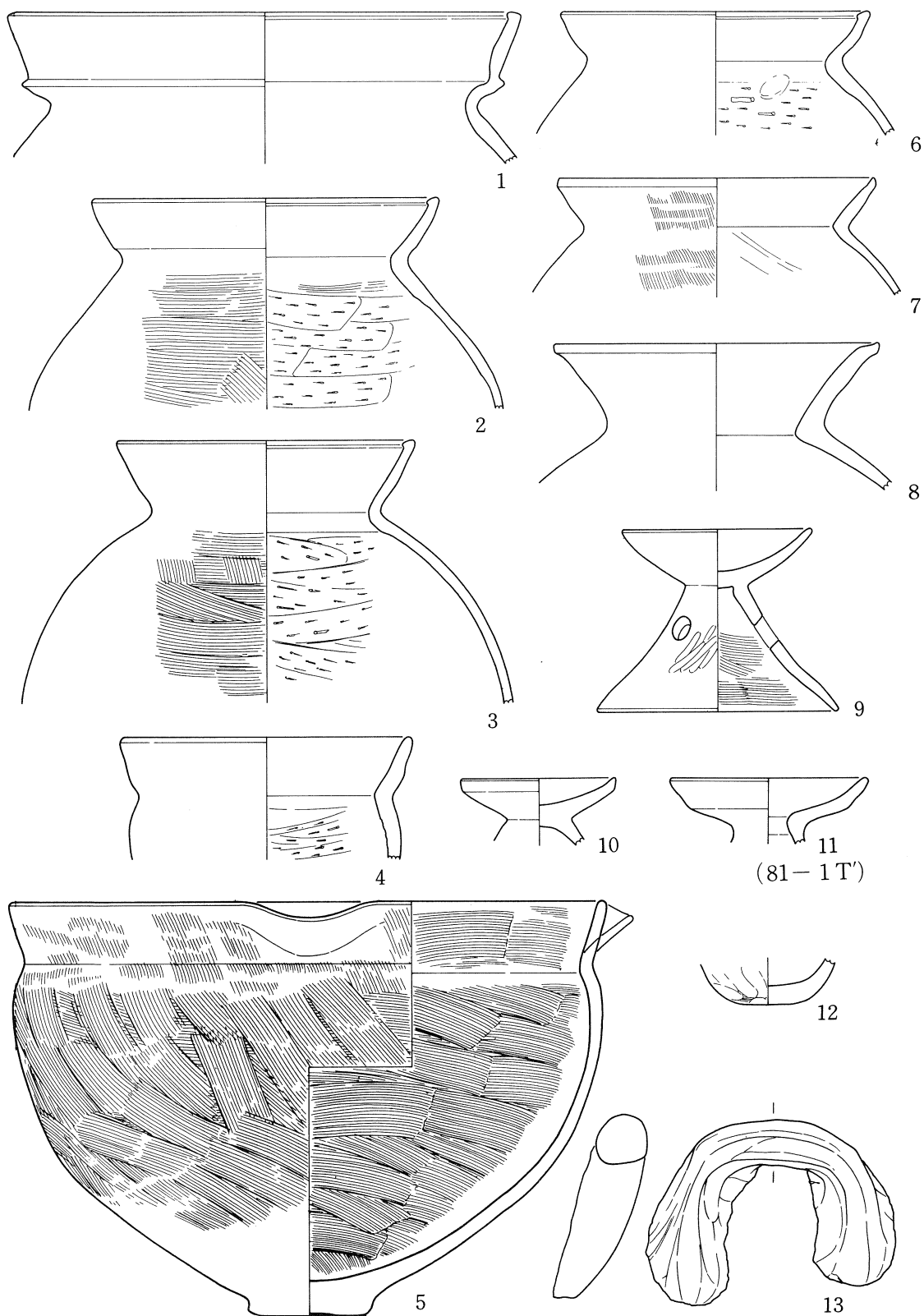
0 5 10cm



第45图 81-1T.2T 溝状遺構実測图(2) (S=1/100)



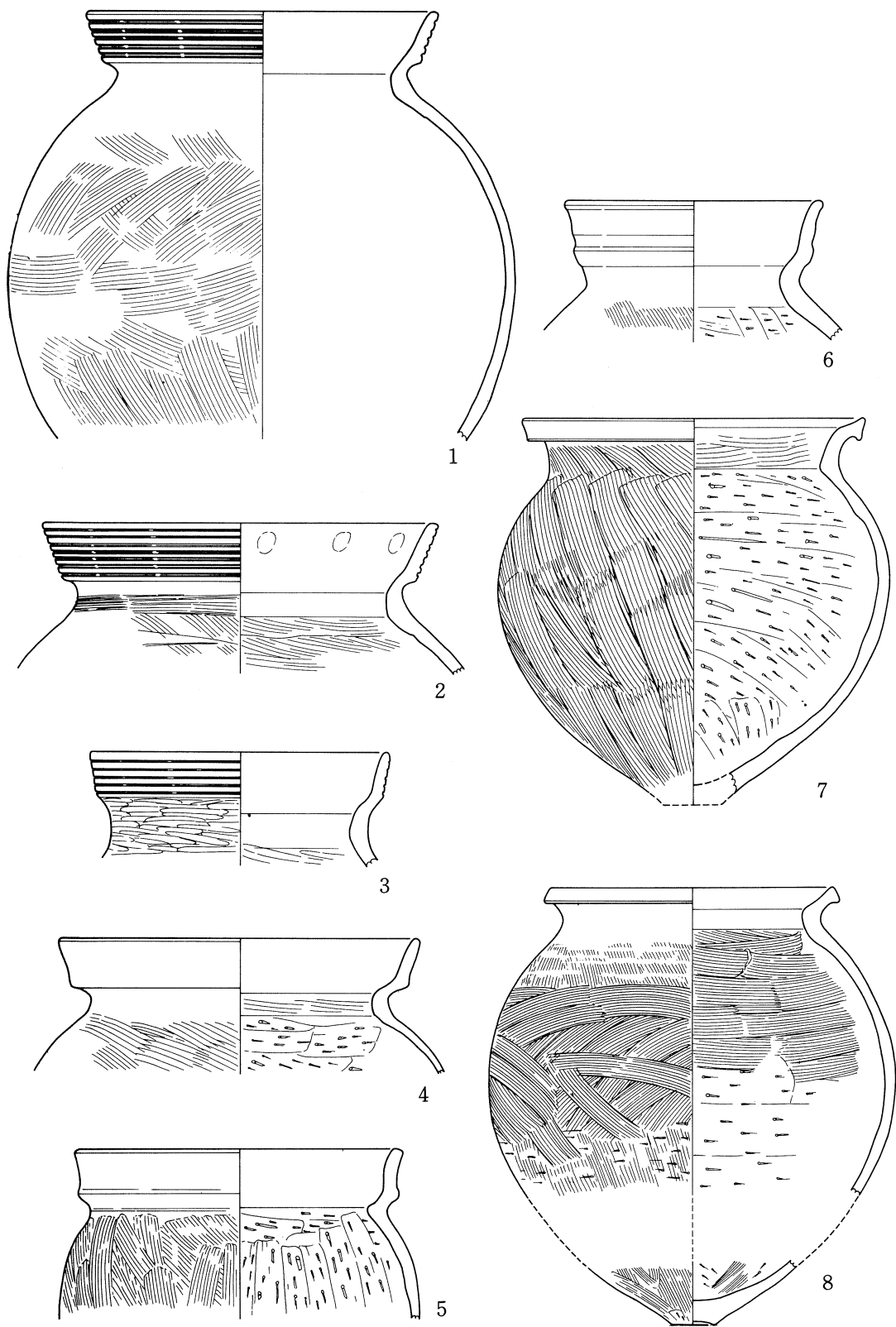




81-1T (南地区)

第46图 沟出土土器实测图(3) (S=1/3)

0 5 10cm

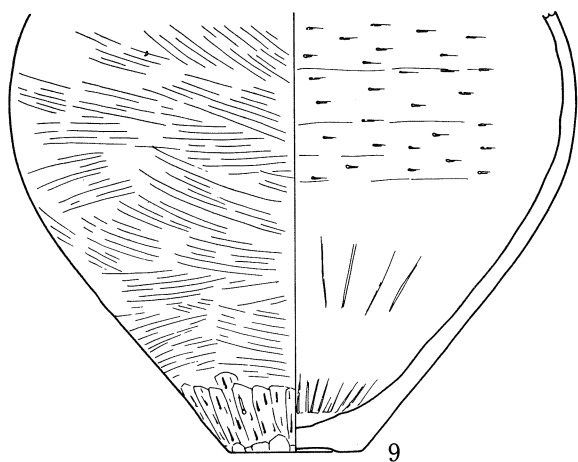


81-2T(1) >

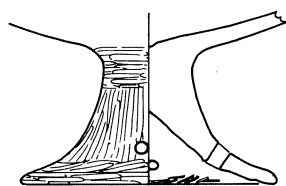
第47图 溝出土土器実測図(4) (S=1/3)

0 5 10cm

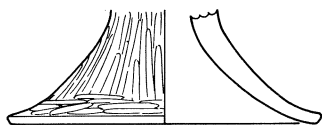




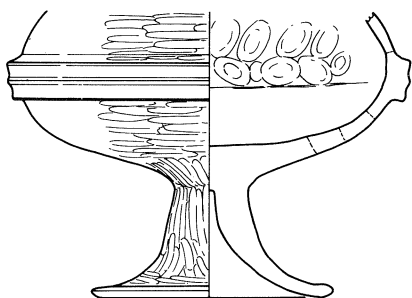
9



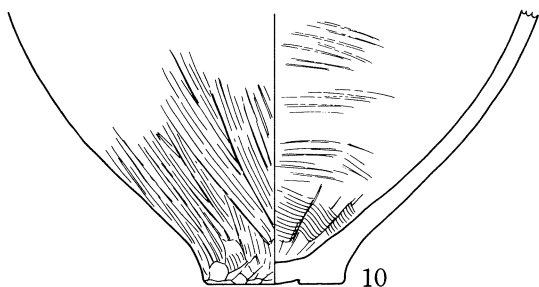
13



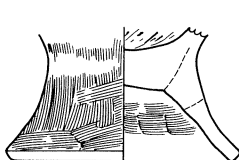
14



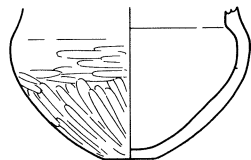
15



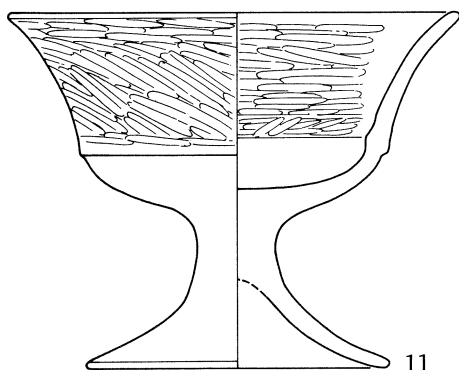
10



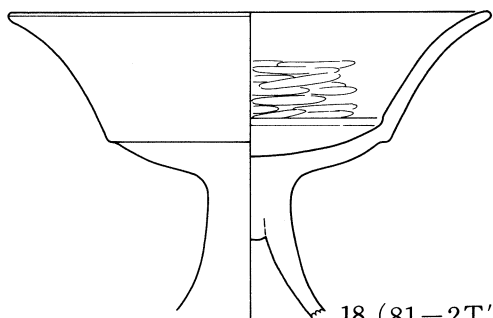
16



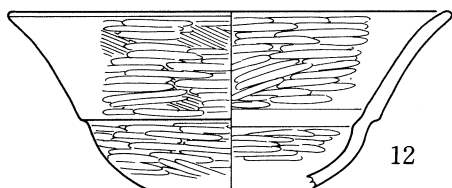
17



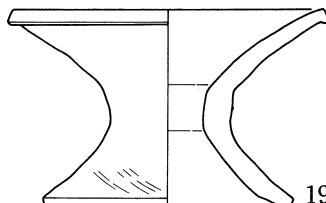
11



18 (81-2T')



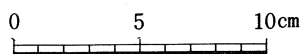
12



19 (81-2T')

81-2T(2)、81-2T

第48图 溝出土土器実測图(5) (S=1/3)



溝内出土土器観察表

溝名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底部部)	胎 土	色 調	焼成
81   1 T	第44図 1	甕	口径(323) 頸径(277)	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	褐 色	良
	2	甕	口径 287 頸径 256	外 擬凹線 8 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	橙 褐 色	良
	3	甕	口径 236 頸径 192	外 擬凹線10 ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	細礫 少 微礫 多 細粒砂 多	橙赤褐色	良
	4	甕	口径 258 頸径 184	外 擬凹線 7 ナデ 煤附着 内 ナデ ナデ	外 ハケ後ナデ(板状具) 内 ケズリ	細粒砂 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良
	5	甕	口径 180 頸径 151	外 擬凹線 7 ナデ 煤附着 内 ナデ ハケ	内 ケズリ	細礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	乳 褐 色	良
	6	甕	口径 156 頸径 142	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	橙乳褐色	並
	7	甕	口径 175 頸径 154	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 少 微礫 少 細粒砂 多	茶 褐 色	良
	8	装飾 器台	受部径 (138)	涙滴形透穴 6 (3組)	外 ナデ 底面 ハケ後 内 ヘラ磨き(細かい)	微粒砂 多	淡茶褐色	良
	9	甕	口径 182 頸径 162	外 ナデか 内 ナデか	内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	橙茶褐色	並
	10	甕	口径 183 頸径 150	外 ナデか 内 ナデか	内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	淡茶褐色	並
	11	底部	底径 15		内 ナデ	中礫 少 細礫 少 細粒砂 多	黒 褐 色	良
	12	底部	底径 68		外 ハケ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	乳 白 色	良
第46図	1	甕	口径 240 頸径 204	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ		中礫 少 細粒砂 多	赤 褐 色	良
	2	甕	口径 165 頸径 136	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ後ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	褐 色	良
	3	甕	口径 141 頸径 119	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細粒砂 多	橙茶褐色	良
	4	甕	口径 134 頸径 122	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 板状工具調整か 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	紅 褐 色	良
	5	片口鉢	口径 285 頸径 271 底径 60 器高 200	外 ハケ後ナデ ハケ後ナデ 内 ハケ ハケ	外 ハケ 内 ハケ	細礫 多 細粒砂 少	明 橙 色	良
	6	甕	口径 147 頸径 122	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	細粒砂 多 細礫 少	褐 色	良
	7	甕	口径 151 頸径 127	外 ナデ ハケ後ナデ 内 ハケ後ナデ ハケ後ナデ	外 ハケ後ナデ 内 ケズリ後ナデか	微礫 少 微粒砂 少	淡 橙 色	良
	8	壺	口径 154 頸径 104			細礫 多 細粒砂 少	橙 褐 色	良
	9	高坏	口径 90 脚径 60 榎径 116 器高 88	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨きか	外 ヘラ磨きか 内 ハケ	中礫 少 細礫 少 微粒砂 多	赤 橙 色	良

溝内出土土器観察表

溝名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 部 (底部)	胎 土	色 調	焼成
81   1 T	10	高坏	口径 74			微礫 少 微粒砂 多	橙 色	良
	11	器台	口径 96	外 ヘラ磨きか 内 ヘラ磨き		細礫 少 微粒砂 少	赤 褐色	
	12	底部	底径 30		外 ハケ ナデ(指頭) 内 ナデ(指頭)	細礫 少 細粒砂 少	橙 褐色	良
	13	把手		ヘラ状工具と指頭による調整		細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	橙 褐色	良
81   2 T	第47図 1	甕	口径 164 頸径 137 胴径 240	外 擬凹線 5 ナデ 内 ナデ 指頭圧痕 ナデ	外 ハケ 内 ケズリ後ナデか	細礫 多 細粒砂 多	橙 褐色	良
	2	甕	口径 187 頸径 154	外 擬凹線 7 ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ハケ	細礫 少 細粒砂 多	橙 褐色	良
	3	壺	口径 140 頸径 122	外 擬凹線 5 ヘラ磨き 内 ナデ ナデ	内 ケズリ	微礫 少 細礫 少	橙 褐色	やや 不良
	4	甕	口径 169 頸径 141	外 ナデ ナデ 内 ナデ ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多	橙乳褐色	良
	5	甕	口径 156 頸径 141	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	中礫 多 細粒砂 多	橙 褐色	良
	6	壺	口径 122 頸径 101	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 微粒砂 多	橙 褐色	良
	7	甕	口径 162 頸径 137 胴径 186 器高 185	外 ナデ ハケ 内 ナデ ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	大礫 少 細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	橙 褐色	良
	8	甕	口径 134 頸径 122 胴径 192 底径 20 器高(209)	外 ナデ ナデ 内 ナデ ナデ	外 ハケ後ナデ ハケ ケズリ 内 ハケ ケズリ	微礫 多 微粒砂 多	黒 褐色	良
	第48図 9	体部	胴径 223 底径 52		外 板状工具 ケズリ 内 ケズリ、ケズリ後ナデか	細礫 少 細粒砂 多	茶 褐色	やや 不良
		底部	底径 55		外 板状工具、底面ケズリか 内 ケズリ(板状工具)	微礫 少 細粒砂 多 微粒砂 多	橙 褐色	良
	11	高坏	口径 172 脚径 31 裾径 120 器高 141	外 ヘラ磨き 煤付着 内 ヘラ磨き	内 ナデ	細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	淡 褐色	良
	12	高坏	口径 174	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細礫 少 細粒砂 少	橙 茶 色	良
	13	高坏	脚径 34 裾径 101		外 ヘラ磨き 赤彩 内 ケズリ後ナデ	細礫 少 微粒砂 多	赤 褐色	良
	14	高坏	裾径 124		外 ヘラ磨き 内 ナデ	細礫 多 微粒砂 多	橙 色	良
	15	台付 裝飾壺	体部径158 裾径 95		外 ヘラ磨き 内 凸帯に凹線2 ナデ、指頭圧痕 裾、ケズリ後ナデ	微礫 少 微粒砂 多	茶 褐色	良
	16	台付甕	底径 91		外 ハケ 内 ケズリ 台部ハケ、ナデ	中礫 少 細礫 多	灰 褐色	良

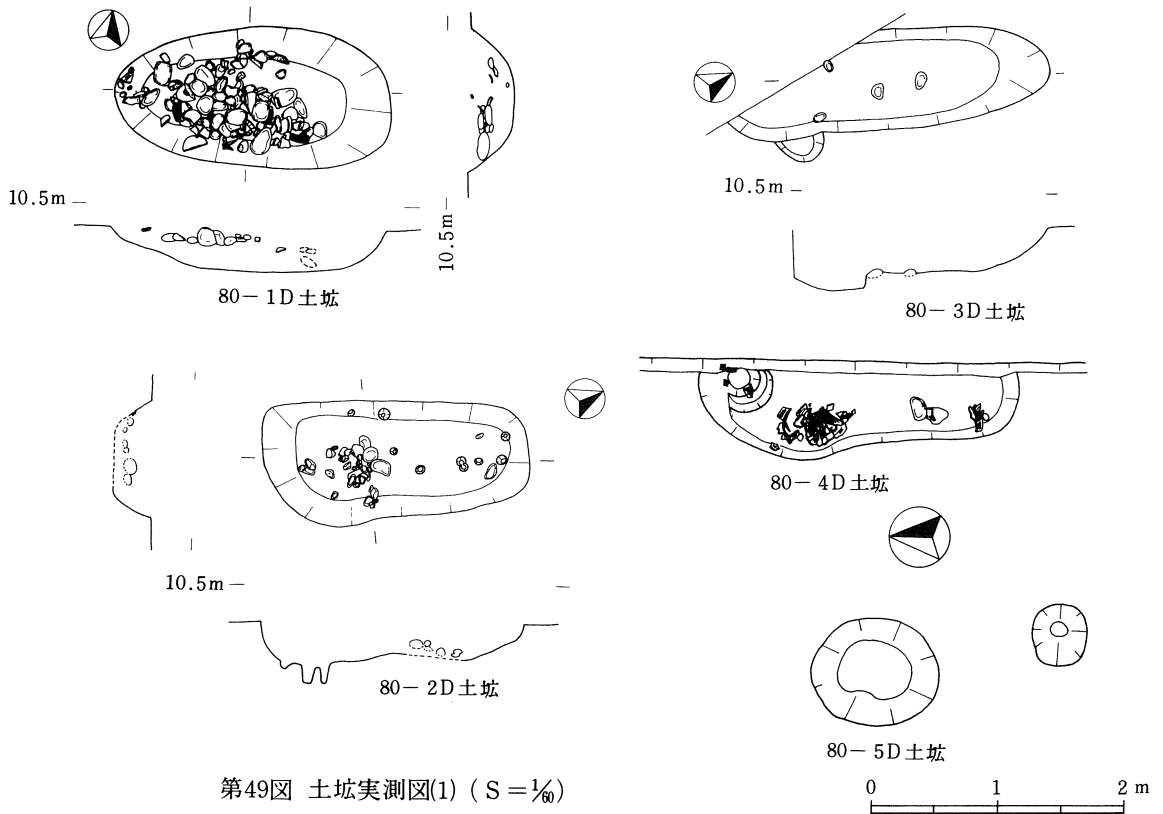
溝名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口頸部	体 (底部)	胎土	色調	焼成
	第48図 17	甕	胴径 94 底径 20		外 ヘラ磨き 底面ヘラ磨き 内 ナデ ケズリ後ナデ	中粒砂 微粒砂	淡褐色	良
81   2T	18	高坏	口径 188 脚径 32	内 ヘラ磨き	内 ケズリ後ナデか	微礫 少 微粒砂 多	紅褐色	良
	19	器台	口径 123 括径 99 裾径 48 器高 78	外 ナデ 内 ナデ	外 ナデ(指頭) ハケ後ナデ 内 ナデ ハケ後ナデ	中礫 少 細粒砂 少	褐色	良

## 5、土 拵 (第49～52図)

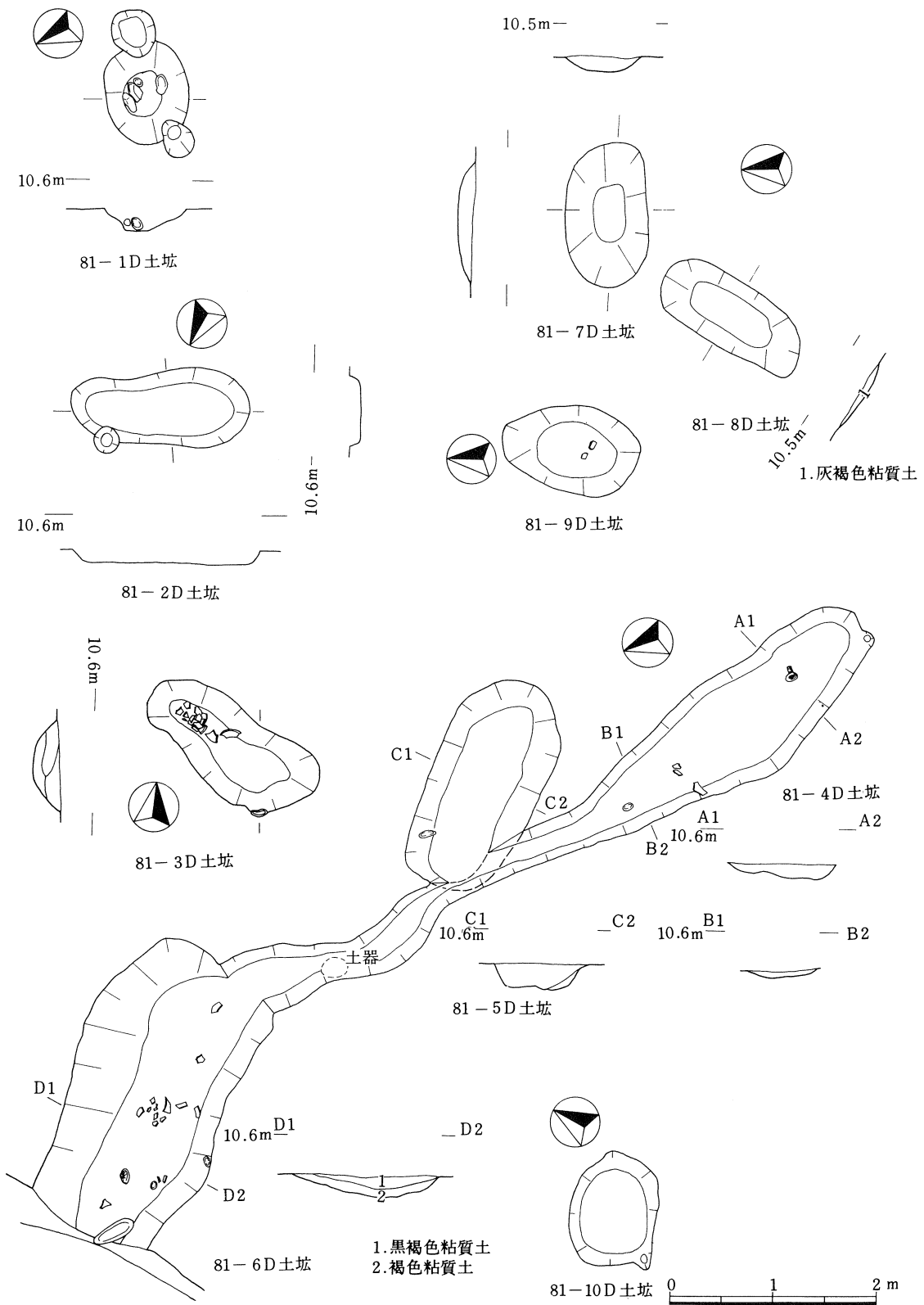
調査区全域より検出している。縄文時代を除き最も古い時期のものは81-11D土拵で、これより出土した口縁端部を波状につくる甕形土器(第56図1)は、金沢市寺中遺跡<sup>(注9)</sup>、羽咋市吉崎次場<sup>(注10)</sup>遺跡に類例が見られ、弥生時代中期後半に比定される。81-12D土拵は、底部一個の出土であるが上記土器底部と同相を示すことから同時期であろう。

80-1D土拵からは多量の甕形土器D縁部と礫が出土している。

平面形は楕円形と円形の二種に大別できるが、楕円形を呈すものについては、長軸がほぼ東を向くもの(80-1D、81-2D等)と、北を向くもの(80-2D、80-3D等)に分けられる。

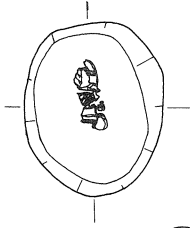


第49図 土拵実測図(1) (S = 1/100)



第50図 土坑実測図(2) (S = 1/60)

10.5m

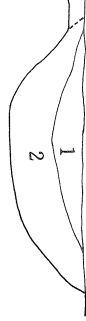


81-11D 土坑

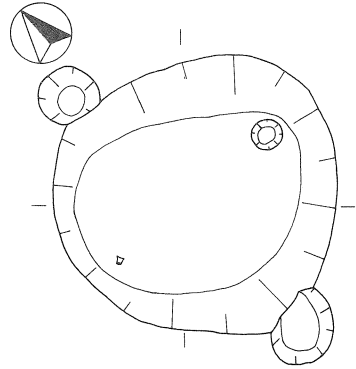


1. 灰褐色粘質土

10.5m



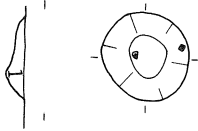
10.5m



81-12D 土坑

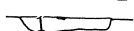
1. 暗褐色粘質土  
2. 灰褐色粘質土

10.37m



1. 黒褐色粘質土

10.37m



82-1D 土坑

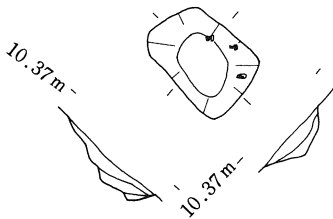


82-4D 土坑

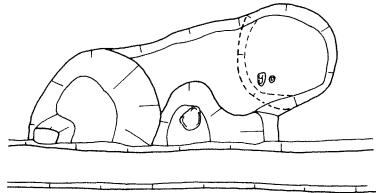
10.37m



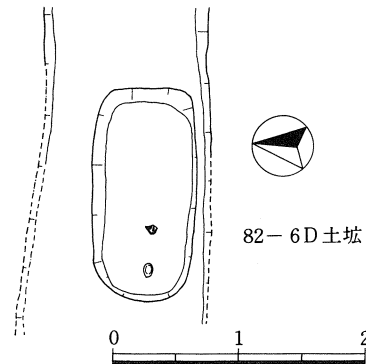
82-2D 土坑



82-3D 土坑



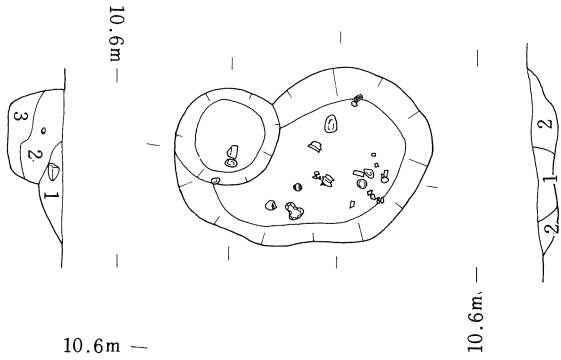
82-5D 土坑



82-6D 土坑



第51図 土坑実測図(3) (S = 1/60)

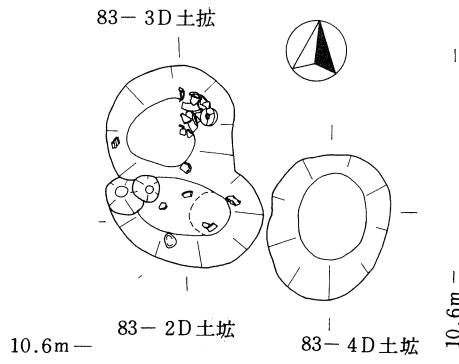


83-1D土坑

- 1. 黒褐色粘質土
- 2. 褐色粘質土
- 3. 明褐色粘質土

凡例

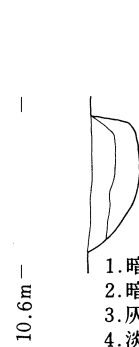
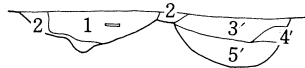
83-5Dは第42図溝状遺構  
実測図(3)を参照



83-3D土坑

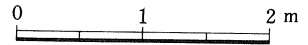
83-2D土坑

83-4D土坑



- 1. 暗黒灰色粘質土
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 灰褐色粘質土
- 4. 淡灰色黄砂混入粘質土
- 5. 明灰色黄砂混入粘質土

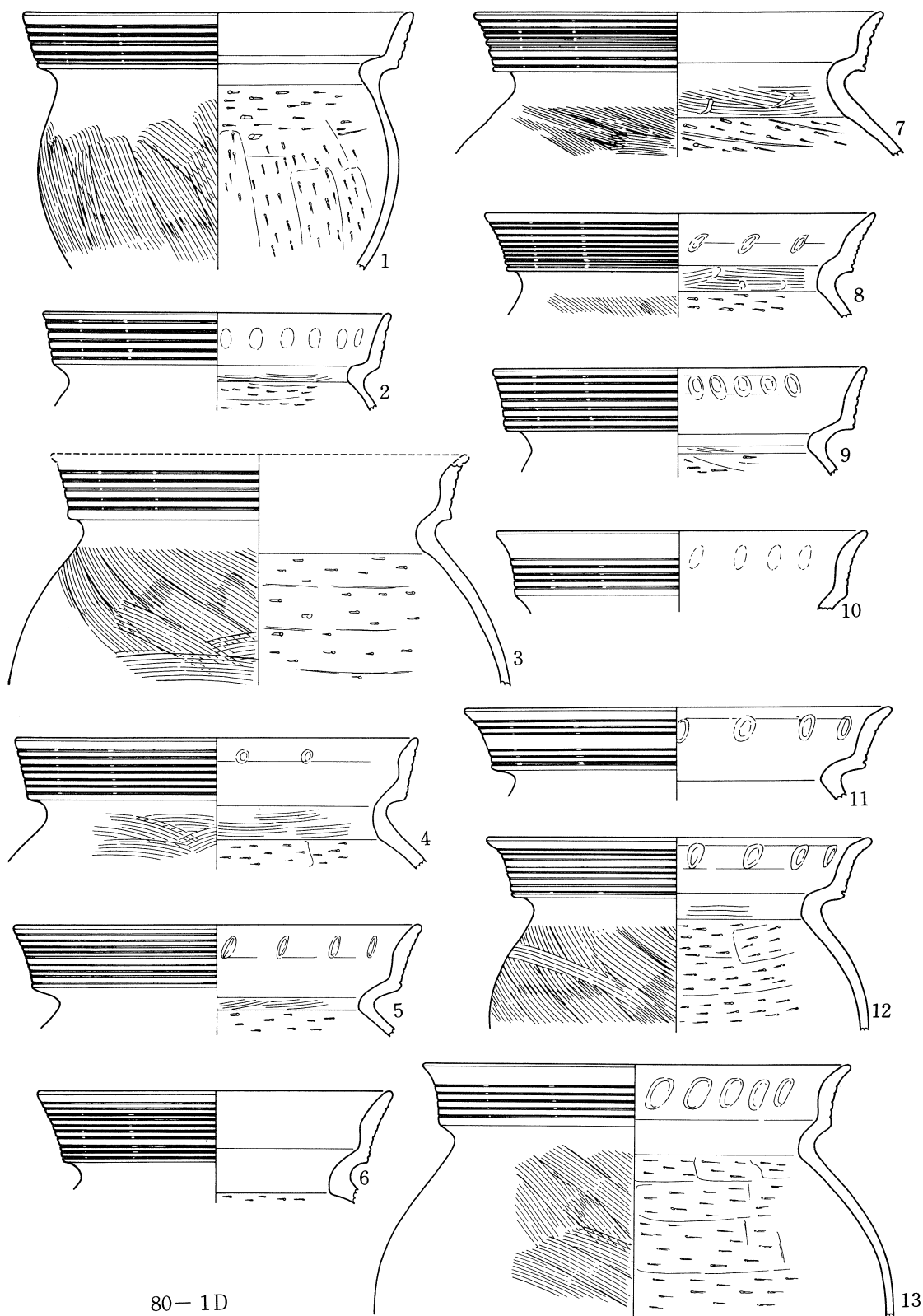
第52図 土坑実測図(4) (S = 1/60)



## 土 塚 一 覧 表

名 称	平面形	規 模	深 さ	備 考	名 称	平面形	規 模	深 さ	備 考
80-1D	楕円形	217×111 160×67	33	土器、礫 多量に出土 月影期	82-1D	円	70×70 30×32	15	
80-2D	楕円か	不定×78 不定×61	35	月影期?	82-2D	楕円	76×42 50×22	9	
80-3D	楕円	208×100 169×60	32	月影期	82-3D	長方形	84×56 46×34	17	
80-4D	楕円か	126×不定 110×不定	16	月影期	82-4D	円か	80×不定 52×不定	18	月影期
80-5D	(楕)円	52×43 29×23	17	月影期	82-5D	円か	80×80か 66×66か	6	月影期
					82-6D	長方形	170×82 153×68	20	月影期
81-1D	楕円	100×80 44×36	23	月影期					
81-2D	楕円	172×70 142×50	12	月影期					
81-3D	楕円	180×80 134×40	28	月影期	83-1D	楕円	200×136 154×90	20	月影期
81-4D	楕円か	(320)×112 (300)×84	14	古府クルビ期	83-2D	楕円か	120×64(推定) 76×42	34	83-3Dを 切る 月影期
81-5D	楕円	214×108 180×62	40	月影期	83-3D	円か	100×90(推定) 52×53	32	月影期
81-6D	楕円か	不定×150 不定×70	20	古府クルビ期	83-4D	楕円	116×93 70×54	38	
81-7D	楕円	140×78 54×30	14		83-5D	円形	62×56 47×44	5	月影期
81-8D	楕円	144×64 90×34	6						
81-9D	楕円	130×85 76×54	?						
81-10D	楕円	110×84 80×60	11	月影期					
81-11D	(楕)円	136×110 120×86	34	弥生中期					
81-12D	円	222×216 176×138	66	弥生中期か					

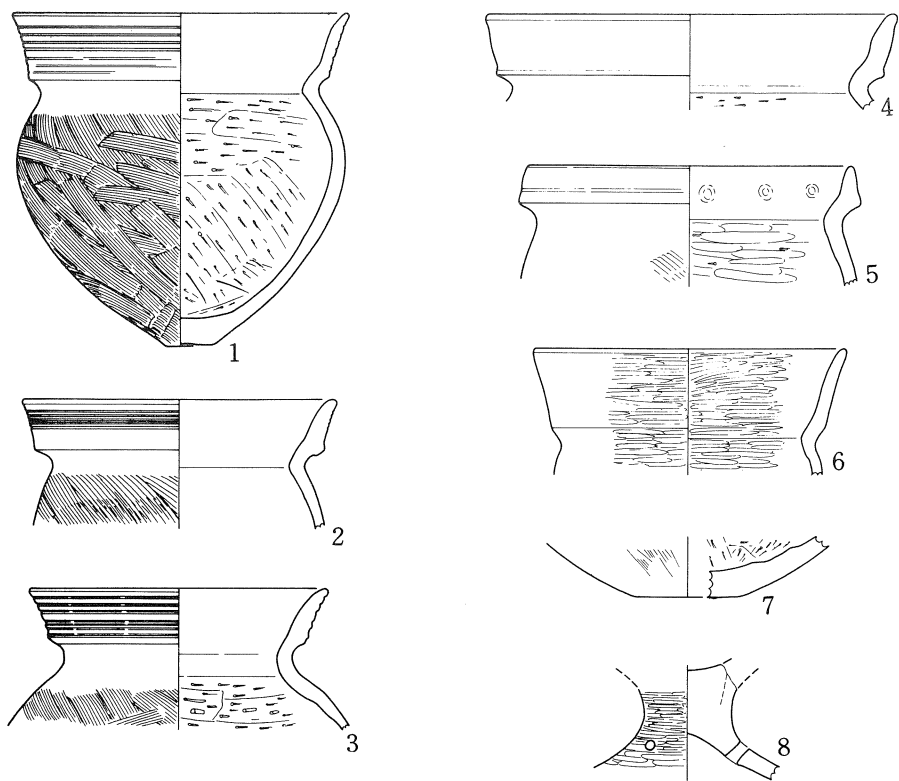




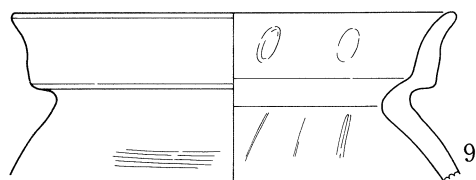
80-1D

第53图 土抃出土土器实测图(1) ( $S = \frac{1}{3}$ )

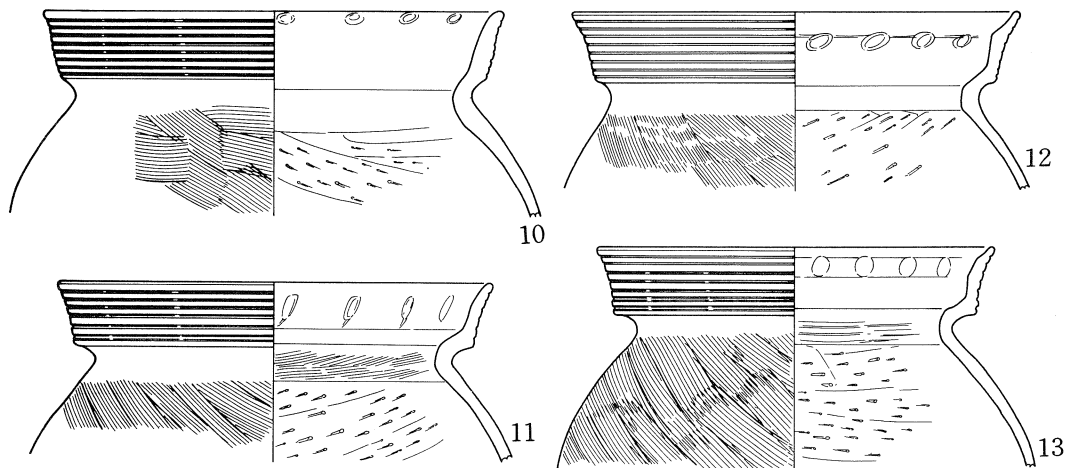
0 5 10cm



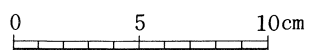
80-1D



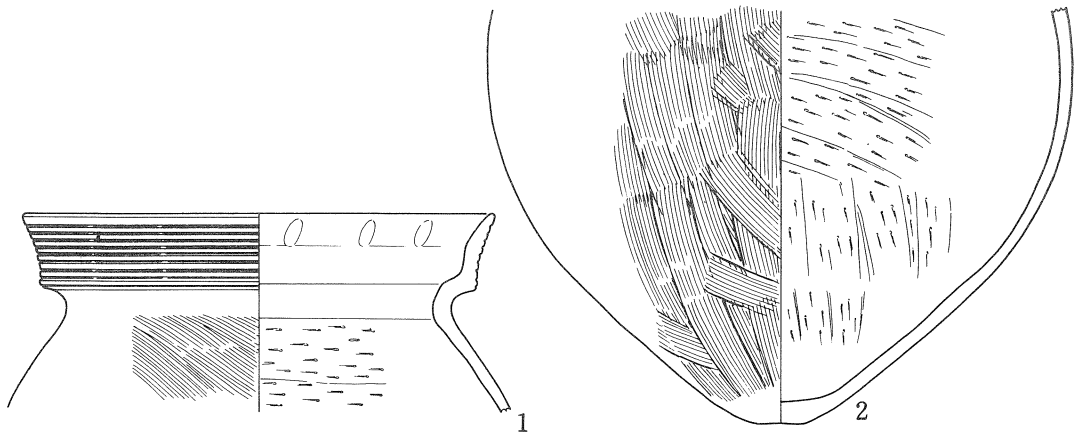
80-4D



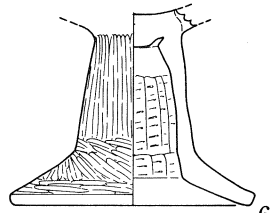
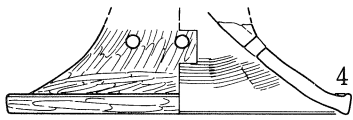
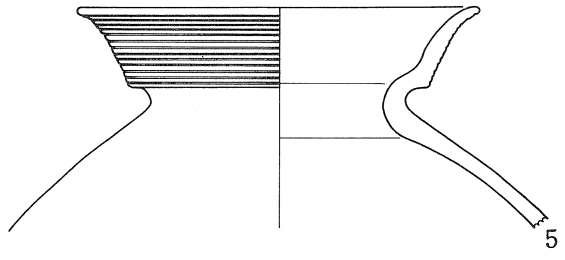
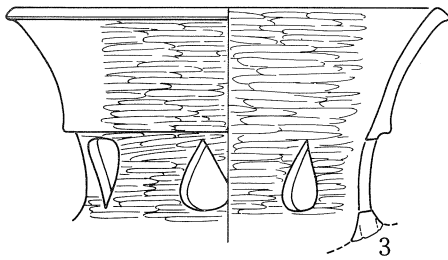
80-5D



第54图 土坑出土土器实测图(2) (S=1/3)

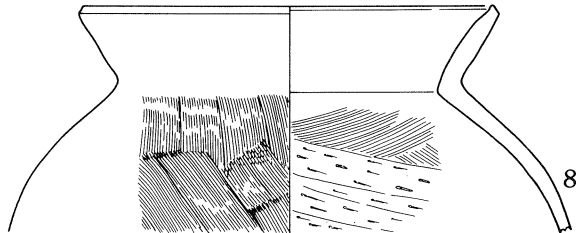
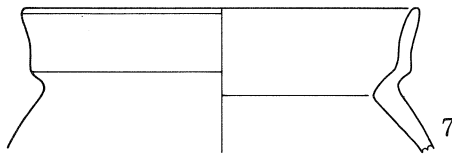


81-2 D



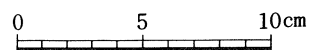
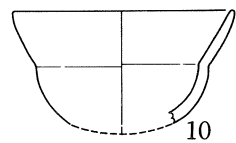
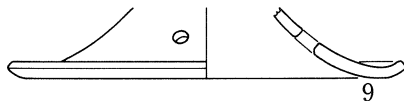
81-3 D

81-4 D

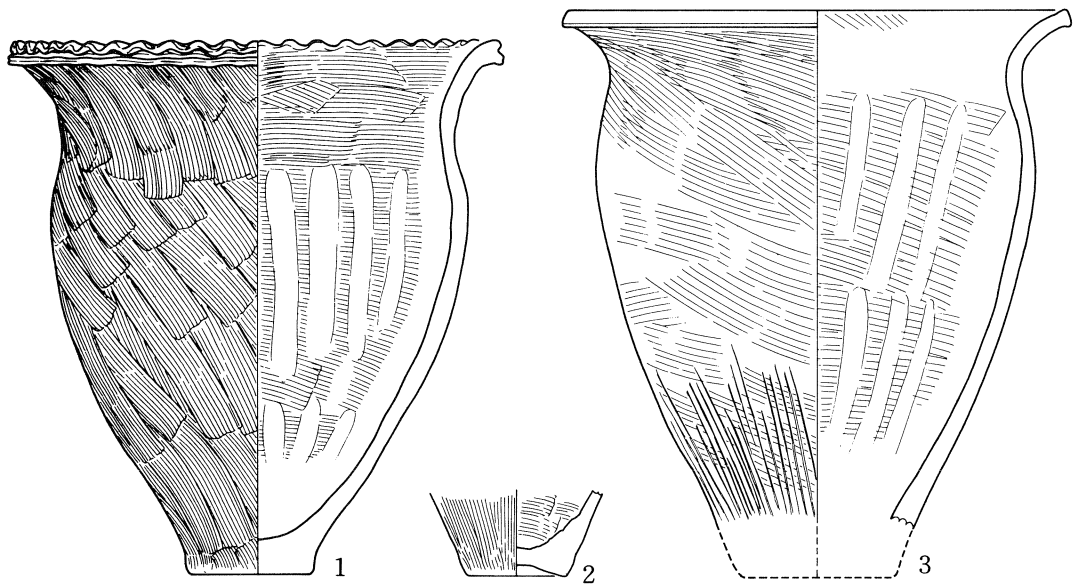


81-5 D

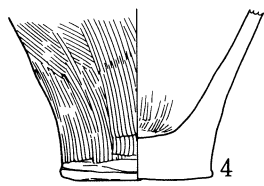
81-6 D



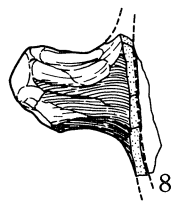
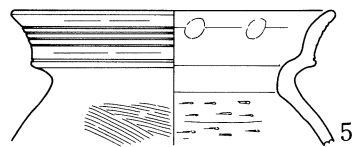
第55图 土坑出土土器实测图(3) (S = 1/3)



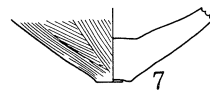
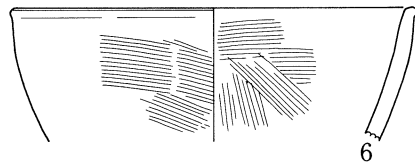
81-12D



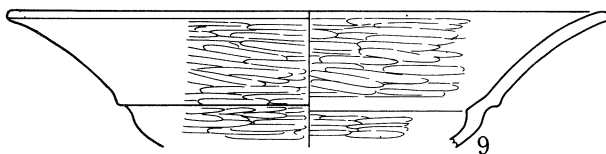
81-3D



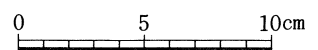
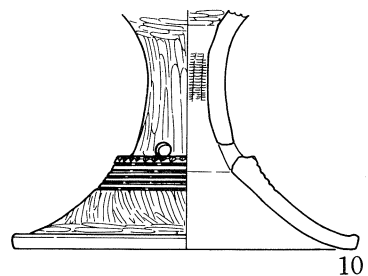
82-3D



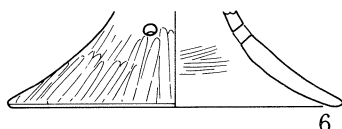
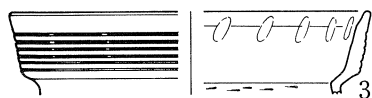
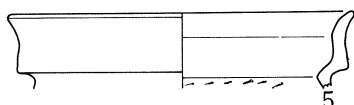
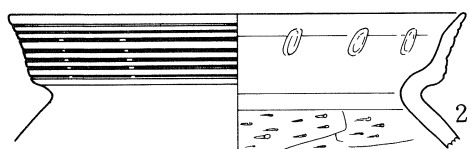
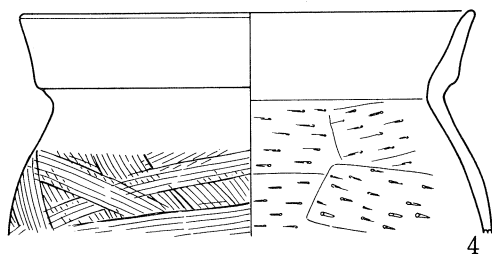
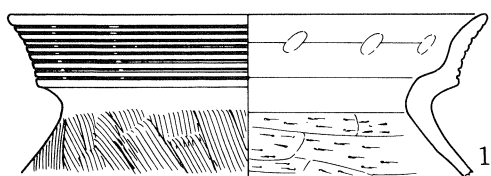
82-2D



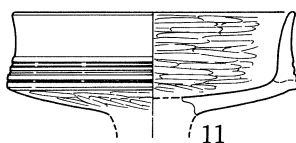
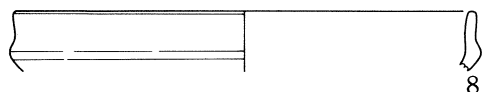
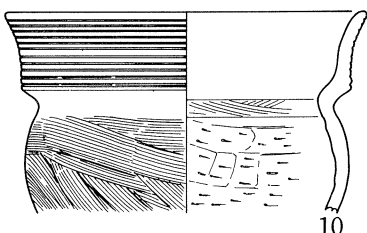
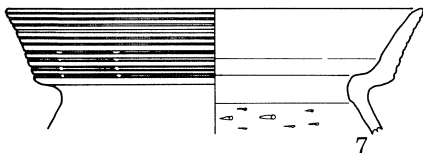
82-4D



第56图 土坑出土土器实测图(4) (S=1/3)

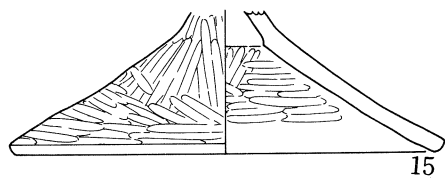
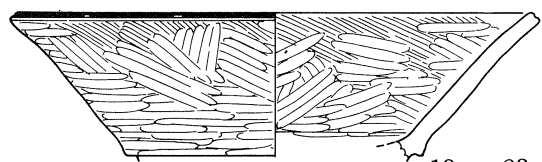
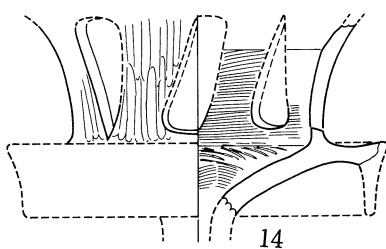
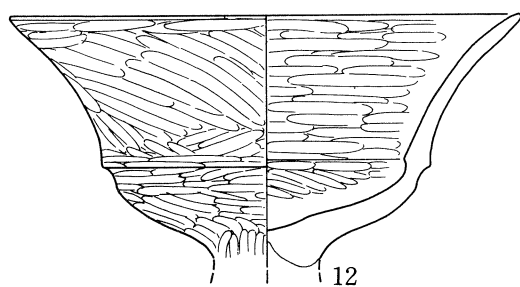


83-1D

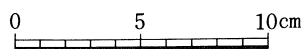


83-2D

83-5D



83-3D



第57图 土抃出土土器实测图(5) (S=1/3)

土坑出土土器観察表

土坑名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底脚 部部)	胎 土	色 調	焼成
80   1 D	第53図 1	甕	口径 184 頸径 153 胴径 173	外 擬凹線 5、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	大礫 少 微礫 多	暗茶褐色	良
	2	甕	口径 164 頸径 141	外 擬凹線 5、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ハケ	内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
	3	甕	口径(198) 頸径 168	外 擬凹線 6、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	4	甕	口径 190 頸径 162	外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ(板状工具か)、ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	黄褐色	良
	5	甕	口径 193 頸径 150	外 擬凹線 9、ナデ 内 ナデ、ハケ	内 ケズリ	中礫 少 細粒砂 多	橙茶褐色	良
	6	甕	口径 168 頸径 128	外 擬凹線10、ナデ 内 ヘラ磨き・ナデ、ヘラ磨きとナデ	内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 少	橙褐色	良
	7	甕	口径 192 頸径 156	外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ、ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多	茶褐色	やや不良
	8	甕	口径 185 頸径 149	外 擬凹線 9、ナデ 内 ナデ・擬頭圧痕、ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
	9	甕	口径 177 頸径 140	外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ、ナデ	内 ケズリ	微礫 少 微粒砂 多	黒褐色	良
	10	甕	口径 174	外 擬凹線 5		細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	やや不良
	11	甕	口径 200 頸径 154	外 擬凹線 6 内 ナデ、ナデ	内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	12	甕	口径 181 頸径 131	外 擬凹線 8、ナデ 内 ナデ、ハケ後ナデ	内 ハケ 外 ケズリ	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	淡茶褐色	良
	13	甕	口径 200 頸径 172 胴径 247	外 擬凹線 5、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	並
80   4 D	第54図 1	甕		外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ、底面ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	暗茶褐色	良
	2	甕	口径 122 頸径 99	外 擬凹線 5、ナデ	外 ハケ	細礫 少 微礫 少	黒褐色	良
	3	甕	口径 115 頸径 89	外 擬凹線 5、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ(細い) 内 ケズリ	中礫 多 細礫 多	橙褐色	良
	4	甕	口径 158 頸径 140	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、ナデ	内 ケズリ	微礫 多	褐色	良
	5	甕	口径 127 頸径 120	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、ケズリ後ヘラ磨き(荒い)	外 ハケ後ナデか 内 ケズリ後ヘラ磨き(荒い)	中礫 少 細粒砂 少	橙茶褐色	良
	6	甕	口径 122 頸径 100	外 ヘラ磨き、ヘラ磨き 内 ヘラ磨き、ヘラ磨き		微礫 少 微粒砂 少	茶褐色	良
	7	底部	底径 40		外 ハケ後ナデか 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	褐色	良
	8	高坏	脚径 33		外 ヘラ磨き(細い) 内 赤彩ケズリ後ナデか	微礫 少 細粒砂 少	赤褐色	良
80   4 D	9	甕	口径 173 頸径 138	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、指頭圧痕、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	大礫 少 細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良

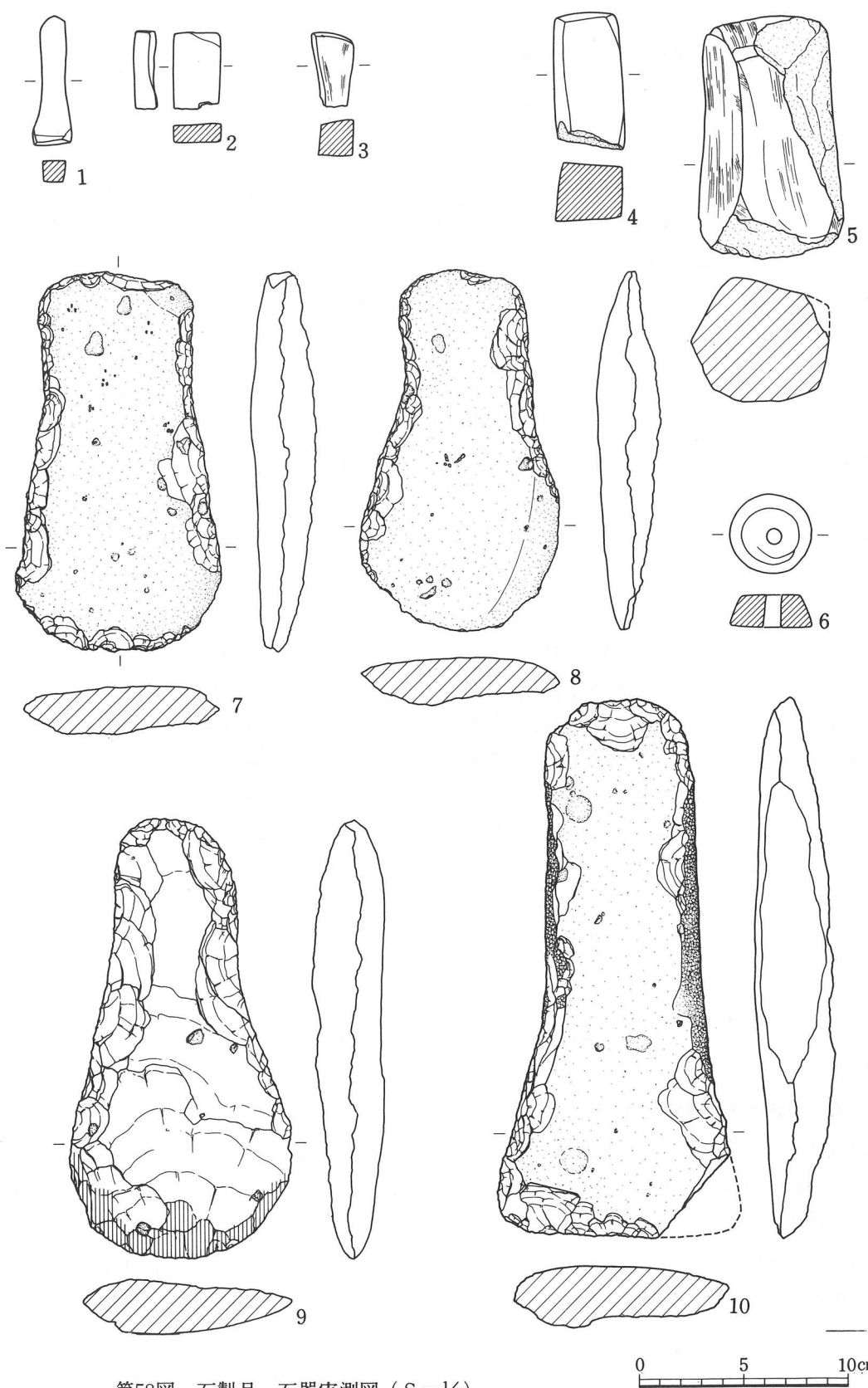
土坑出土土器観察表

土坑名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部		体 (底脚 部)	胎 部	色 調	焼成
80   5 D	第54図 10	甕	口径 180 頸径 156	外 擬凹線 8、ナデか 内 ナデか、指頭圧痕、ナデか	外 内	ハケ ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	褐色	やや不良
	11	甕	口径 171 頸径 140	外 擬凹線 6、ナデ 内 ナデ、指頭圧痕、ハケ	外 内	ハケ ケズリ	細礫 多 微礫 多 細粒砂 多	橙褐色	やや不良
	12	甕	口径 174 頸径 143	外 擬凹線 8、ナデ 内 ナデ、指頭圧痕強い稜 ハケ後ナデか	外 内	ハケ ケズリ	細礫 多 微礫 多	橙暗褐色	良
	13	甕	口径 154 頸径 123	外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ、指頭圧痕・強い 稜 2、ハケ	外 内	ハケ ケズリ	微礫 多 中礫 少	茶褐色	良
81   2 D	第55図 1	甕	口径 184 頸径 151	外 擬凹線 9、ナデ 内 ナデ、指頭圧痕、ナデ	外 内	ハケ ケズリ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	2	甕	胴径 229 底径 18		外 内	ハケ、底面、ケ ズリ、ケズリ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	茶褐色	良
81   3 D	3	装飾器台	口径 166	外 へラ磨き、涙滴形透穴7 内 へラ磨き			細砂 多 微粒砂 多	橙褐色	良
	4	装飾器台	裾径 136		外 内	へラ磨き、円形 透穴6(3組) ハケ、ナデ	細礫 少 微粒砂 多	褐色	良
81   4 D	5	甕	口径 157 頸径 100	外 擬凹線13			細礫 少 微粒砂 多	淡灰褐色	良
	6	高不	裾径 97		外 内	へラ磨き ケズリ、裾ナデ	微礫 少 細粒砂 多	淡茶褐色	良
81   5 D	7	甕	口径 155 頸径 139				細礫 多 細粒砂 多	灰褐色	不良
81   6 D	8	甕	口径 162 頸径 136	外 ナデ、ハケ後ナデ 内 ナデ	外 内	ハケ ハケ、ケズリ	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	9	高坏	裾径 156		外	透穴 3	微礫 少 微粒砂 少	橙褐色	良
	10	鉢	口径 86 頸径 68	外 へラ磨きか 内 へラ磨きか			微粒砂 多	橙褐色	不良
81   12 D	第56図 1	甕	口径 190 頸径 153 胴径 164 器高 212	外 波状凸帯(12mm間隔)・ 内 ハケ、ハケ ハケ、ハケ	外 内	ハケ、底面ナデ ハケ、ナデ上げ (指頭)	中礫 多 細礫 多	茶褐色	良
	2	底部	底径 38		外 内	ハケ、底面ケズリ ハケ、ケズリ	大礫 少 中礫 多 細礫 多 微粒砂 多	暗茶褐色	良
	3	甕	口径 196 頸径 161 胴径 171 器高 224	外 ナデ、ハケ 内 きざみ目、ナデ、ナデ	外 内	ハケ ハケ後ナデ上げ (指頭)	大礫 少 中礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
81   13 D	4	底部	底径 60		外 内	ハケ、底面ケズリ ナデ上げ(指頭) ケズリ	中礫 少 微粒砂 多	褐色	良
82   2 D	5	甕	口径 125 頸径 95	外 擬凹線 5、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 内	ハケ ケズリ	大礫 少 細礫 多	橙褐色	良
	6	鉢	口径 160	外 ナデ 内 ハケ	外 内	ハケ ハケ	細礫 少 微粒砂 少	乳褐色	良
	7	底部	底径 13		外 内	ハケ、底面ケズリ ケズリ後ナデ	中礫 多 線礫 多	淡茶褐色	良
82   3 D	8	把手		外 ハケ(指頭による手づ 内 くの)ケズリ			中・細・微礫 多 細粒砂 多	褐色	良
82   4 D	9	高坏	口径 235	外 へラ磨き 内 へラ磨き			中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	良
	10	器台	裾径 135		外 内	へラ磨き、刻み 目擬凹線5 ハケズリ・ナデ ハケ状具)、ナデ	細礫 多 微粒砂 多	橙乳白色	良

土坑出土土器観察表

土坑名	図番号	器種	大きさ mm(推定)	口 頸 部	体 (底 部 部)	胎 土	色 調	焼成
83   1 D	第57図 1	甕	口径 186 頸径 145	外 擬凹線 8、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 少 微礫 多 細粒砂 多	褐色	良
	2	甕	口径(178) 頸径 145	外 擬凹線 7、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ナデ	外 煤付着 内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	橙乳褐色	良
	3	甕	口径 142 頸径 118	外 擬凹線 6、ナデ 内 ナデ・指頭圧痕、ケズリ		微礫 多 細粒砂 多	茶褐色	並
	4	甕	口径 176 頸径 154	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、ナデ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 微礫 多 微粒砂 多	橙褐色	良
	5	甕	口径 136 頸径 116	外 ナデ、ナデ 内 ナデ、ケズリ		細礫 多 細粒砂 多	橙褐色	並
	6	高坏	裾径 126		外 ヘラ磨き・透穴 内 ナデ	細粒砂 多 微粒砂 多	乳褐色	良
83   2 D	7	甕	口径 166 頸径 122	外 擬凹線10、ナデ 内 ナデ・ナデ	内 ケズリ	微礫 多 微粒砂 多	乳褐色	良
	8	甕か	口径(207)	外 ナデ 内 ナデ		微粒砂 多	橙褐色	良
	9	底部	底径 26		内 ケズリ	中礫 多 細礫 多 細粒砂 多	淡褐色	並
83   5 D	10	甕	口径 140 頸径 116 胴径 128	外 擬凹線11、ナデ 内 ナデ、ハケ	外 ハケ 内 ケズリ	細礫 多 細粒砂 多	灰褐色	良
	11	高坏	口径 111	外 ナデ・擬凹線 3、ヘラ 内 磨き ヘラ磨き		細粒砂 多 微粒砂 多	茶褐色	良
83   3 D	12	高坏	口径 200	外 ヘラ磨き 内 ヘラ磨き		細粒砂 多 微粒砂 多	淡茶褐色	良
	13	高坏	口径 208	外 地線 1、ハケ後ヘラ 内 磨き ハケ後ヘラ磨き		微礫 少 微粒砂 多	淡褐色	良
	14	装飾 器台		外 ヘラ磨き、底ナデ、赤彩 内 ハケ、ハケ・ケズリ、赤彩		細礫 少 微粒砂 多	赤色	良
	15	高坏	裾径 164		外 ヘラ磨き、端部 内 ナデ ナデ、ヘラ磨き	細礫 少 微粒砂 多	淡茶褐色	良





第58図 石製品・石器実測図 (S = 1/3)

## 6、石 器 (第58図)

石器は前述の遺構内から出土した一部についてのみ報告する。砥石は欠損面を除きすべてが使用されている。

打製石斧については実測図に載るものの他に各住居跡覆土内より出土しており、縄文土器片も混在している。縄文時代遺跡との複合という問題もあるが、82-1号住居跡、82-2号住居跡出土のものは、概期に打製石斧が使用されたことを物語るものであろうか。<sup>(註11)</sup>

(註) 石質は野々市中学校教諭 村上維喜氏に鑑定いただいた。

実測図石器一覧表

名 称	図番号	出土遺構	長 さ	巾	厚さ	重さ	石 質	備 考
砥 石	1	80-3号住居跡	62	19	13	20	泥 岩	全面使用
砥 石	2	80-7号住居跡	37	23	9	17	泥 岩	欠損
砥 石	3	81-1号住居跡	36	20	18	20	泥 岩	欠損
砥 石	4	81-1号住居跡	66	33	31	112	泥 岩	他の砥石より若干粒が大きい、欠損
砥 石	5	82-1号住居跡	115	69	56	632	泥 岩	全面使用
紡 錘 車	6	81-1号住居跡	上面径28 底面径38	穴径 7~9	16	32	泥 岩	
打製石斧	7	82-1号住居跡	182	刃部 98	31	635	火山礫凝灰岩	P6(特殊ビット)より出土
打製石斧	8	82-1号住居跡	173	刃部 95	30	419	火山礫凝灰岩	P6上面より出土
打製石斧	9	81-1 T溝	210	刃部 116	33	705	火山礫凝灰岩	
打製石斧	10	82-2号住居跡	257	刃部推定 115	38	1100	火山礫凝灰岩	P3(柱穴)より出土

## 小 結

### 堅穴住居跡とその遺物について

調査区では14棟の住居跡を確認している。時期の降る80-5号住居跡(以下住居跡をHと略す)を除く13棟の住居跡は、弥生時代末期~古墳時代初頭に比定されよう。この13棟は平面形が隅丸か隅角かで2種類に区別出来る。隅丸は80-1・2・3・4・6・7、81-2、82-1・2・3・4の各住居跡計11棟で、隅角は81-1、83-1の住居2棟である。また主柱穴数を考慮し、石野博信氏の分類<sup>(註12)</sup>及び橋本正氏の分類<sup>(註13)</sup>、また塚崎遺跡報文を参考にすると隅丸方2Y型、隅丸方4X型、隅角方4X型の三種類に分けられよう。

隅丸方2 Y型：80-1 H、80-4 H

隅丸方4 X型：80-2 H、80-3 H、80-6 H、80-7 H、81-2 H、82-1 H、82-2 H、  
82-3 H、82-4 H、

隅角方4 X型：81-1 H、83-1 H、

床面積は4 X型にばらつきが見られるが、20~40㎡<sup>(註14)</sup> 7棟、40~70㎡ 2棟、80㎡代2棟であり20~40㎡クラスが最も多い。金沢市塚崎遺跡と同傾向を示し北陸の概期における一般的住居の床面積(註15)と言えよう。隅丸方2 Y型はいずれも10㎡代である。

隅丸方4 X型の住居9棟においては二段掘りの特殊ピットを有するかで二種に分けられ、有するもの5棟のうち82-4 Hの南壁際を除き、80-3 H、82-1、2、3 Hの4棟はいずれも東側又は南側主柱穴間を結ぶ線上に設置されている。特殊ピットは住居跡の南半部に位置すると言えよう。(註16)

また、1例のみであるが82-2 Hの出入口と考えられる4個の方形配置の柱穴はこの住居の北側に位置し南側主柱穴間の特殊ピットの位置と密接な相対関係をもつものであろうか。(註17)

ここで出土土器の様相により各住居の時期を検討しなければならないのであるが、筆者は不学のため他遺跡から出土した土器の類例の提示にとどめ、ある程度の時期を各住居に帰属させたい。

分類した住居平面形が隅丸か隅角に分けられることは前に述べたが、まず隅丸のもの11棟についての出土土器を概観してみたい。これらすべてはより従来から言われている「月影式土器」が出土している。金沢市月影遺跡(註19)、金沢市下安原海岸遺跡(註20)、金沢市南新保D遺跡(註21)の各遺跡より類例が見られ、谷内尾普司氏の「月影II式土器」に比定されよう。(註22)

隅角の住居の2棟及び81-1 T溝からの出土土器は若干の時間的差を持つが、新しい様相を持つ土器は、高松町二ツ屋遺跡(註23)、金沢市古府クルビ遺跡(註24)、金沢市二口六丁遺跡(註25)、金沢市押野西遺跡(註26)出土土器に類例が見られる。「古府クルビ式土器」に比定されよう。(註27)

これらのことから隅丸の住居は弥生時代終末、隅角の住居は古墳時代初頭の時期に位置しよう。このことは2種に分類した住居平面形に表われたものであろうか。(註28)

80-5 Hは段状構造を持ち主柱の配置は外周主柱式をとっている。内周、外周の違いはあるが、七尾市細口源田山遺跡第4号住居跡(註29)と同類である。出土土器は、甑1、鍋(把手付甕)1、甕1、中型甕2、中型碗2、碗4、高杯1、須恵器杯身3、同蓋1の計16個でほぼ完形である。金沢市古府クルビ第1号住居跡(註30)、加賀市千崎・大島遺跡(註31)、と同相を示す。吉岡氏の編年の土師器第7様式(註32)にあたり、6世紀末~7世紀中葉の年代を与えられている。また須恵器杯身は田辺氏の編年でのTK-209型式に近い様相を示す。これには7世紀初頭の年代が与えられていることから、80-5 Hは6世紀末~7世紀初頭の古墳時代後期に位置する。(註33)

最後に簡単にまとめると、本集落は本調査区の南側一帯にも住居跡が存在し(註3参照)、弥生時代終末~古墳時代初頭を中心とし、これ以降断続的に人々が生活を営んだことが窺われる。集落構造については北側の一部分の調査であるが、旧河道に挟まれた狭い微高上に帯状をなして(流跡と併行するように)住居が築造されていたと思われる。

今後の課題を多く残す報文であり先学諸氏の御批判、御教授を願うものであります。

## 住居跡一覽表

※ ( ) は推定値

項目 住居名	形 状	規 模 m	床面 m	主柱穴 本	特殊ピット等	壁溝	時 期
80-1号	隅丸長方形	4.25×3.3	12.6	2	無	有	月影期
80-2号	胴張隅丸長方形	6.6×6.0	32.4	4	連結ピット	有	〃
80-3号	胴張隅丸長方形	10.3×9.1	81.7	4	特殊ピット(東側主柱穴間)	有	〃
80-4号	隅丸長方形	5.0×4.0	17.2	2	無	有	〃
80-5号	隅丸長方形	5.7×4.8	25.3	8	貯蔵穴	一部	7世紀初頭
80-6号	胴張方形?	(6×6)	(30)	(4)	連結ピット	一部	月影期
80-7号	胴張隅丸方形	6.4×(6.1)	31.8	4	無	一部	〃
81-1号	方 形	9.1×9	(81.9)	4	無	有	古府クルビ期
81-2号	隅丸方形	8.3×(8)	(66.4)	4	不明	有	月影期
82-1号	胴張隅丸長方形	6.0×5.3	28.0	4	特殊ピット(南側主柱穴間)	有	〃
82-2号	胴張隅丸方形	7.9×7.2	49.6	4	特殊ピット(南側主柱穴間)	有	〃
82-3号	隅丸長方形(不整)	6.3×5.2	29.8	4	特殊ピット(南側主柱穴間)	有	〃
82-4号	隅丸方形	4.6×4.2	17.9	4	特殊ピット(南壁際)	有	〃
83-1号	方 形	6.7×6.2 6.0×5.7	37.7 31.9	4		有	古府クルビ期

- (註1) A 都辺比呂志 1975 「家とムラ」 『日本生活文化史』 河出書房新社  
 B 石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」 『日本古代文化の探究家』 社会思想社

(註2) 注1のBと同じ

宮本、楠 1982では類カマドとしたが証正したい。

(註3) 筆者は現場では認識しておらず現場において戸潤幹夫氏より教示を得た

(註4) 吉岡康暢、小嶋芳孝ほか1976「塚崎遺跡」 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』 石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

(註5) 戸潤幹夫 1982 『高堂遺跡、第三次調査概報』 石川県立埋蔵文化財センター

(註6) 西野秀和、滋井真 1980 『谷内石山遺跡』

(註7) 西野秀和 1982 『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

(註8) 土肥富士夫ほか 1980 『万行赤岩山遺跡』 七尾市教育委員会

(註9) 宮本哲郎 1977 『金沢市寺中遺跡』 金沢市教育委員会

(註10) 橋本澄夫 1973 「次場遺跡」 『羽咋市史』 原始・古代編

浜岡賢太郎、谷内尾普司、三浦純夫 1976 『羽咋市吉崎・次場遺跡・第3次発掘調査概報』 羽咋市教育委員会

- (註11) 注5と同じ。
- (註12) 注1Bと同じ。
- (註13) 橋本正 1976 「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第3号(別巻91号)  
考古学研究会
- (註14) 注4と同じ。
- (註15) 宮本哲郎、楠正勝ほか 1983 「北陸の弥生・古墳時代の堅穴住居跡」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号 (近刊予定)
- (註16) 金沢市塚崎遺跡、津幡町谷内石山遺跡、宇ノ気町上山田貝塚、金沢市西念・南新保遺跡、加賀市二子塚遺跡、小杉町中山南遺跡の住居跡に類例が見られる。  
(註4)と同じ。  
(註6)と同じ。  
小嶋芳孝1979「縄文時代以後の遺構と遺物」『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会、石川考古学研究会  
宮本哲郎ほか1983 『西念・南新保遺跡』金沢市、金沢市教育委員会  
田嶋明人、湯尻修平 1974 『加賀市二子塚遺跡群調査概報』石川県教育委員会  
小嶋俊彰ほか 1971 『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会
- (註17) 大阪市東山遺跡で出入口の推定方法に5つがあげられているが、このなかの②において「炉穴が土間の周縁寄りにある場合、炉穴より遠い部分に戸口を設けている」の炉穴を特殊ピットと読みかえて、本遺跡の住居跡の出入口が推定出来るのではなかろうか。(註15)で楠氏がこれを引用し検討している。  
堀江門ほか 1980 『東山遺跡』大阪文化財センター
- (註18) A 浜岡賢太郎、吉岡康暢 1962 「加賀・能登の古式土師器」古代学研究32  
B 橋本澄夫 1975 「V総括」『金沢市高島遺跡』金沢市教育委員会
- (註19) 注18Aと同じ。
- (註20) 橋本澄夫 「金沢市下安原海岸遺跡の第I次調査」『石川考古学研究会会誌第18号』
- (註21) 平田天秋 1976 「金沢市南新保D遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団  
宮本哲郎ほか 1981 『金沢市南新保D遺跡』金沢市教育委員会
- (註22) 谷内尾普司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」  
『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号 (近刊予定)
- (註23) 注18Aと同じ。
- (註24) 橋本澄夫、高橋裕 1976 「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

- (註25) 南久和ほか 1983 『金沢市二口六丁遺跡』金沢市教育委員会
- (註26) 南勉 1983 「金沢市押野西遺跡第Ⅱ次発掘調査のL-4土抔の概要」  
『金沢市二口町遺跡』金沢市教育委員会
- (註27) (註18)B、(註22)、(註24)と同じ。
- (註28) 近年、弥生時代と古墳時代とを区分する土器について「月影式土器」を弥生時代終末期とする見解があり本書ではこれに従う。(註22)、(註25)の附章3の両文献
- (註29) (註13)と同じ。
- (註30) 浜岡賢太郎、桜井憲弘、土肥富士夫ほか 1982 『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会
- (註31) (註24)と同じ。
- (註32) 四柳嘉章 1976 「加賀市千崎・大畠遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅲ』石川県教育委員会、石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
- (註33) 吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル6
- (註34) 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店刊

## 9、附 記

筆者が最初に現場を担当したのがこの御経塚ツカダ遺跡であり、想い出深い遺跡であるが、未熟なため55年度は破壊に近い調査を行なってしまった。深く反省したい。

現場作業については、高堀勝喜氏、橋本澄夫氏、南久和氏をはじめ湯尻修平氏、小嶋芳孝氏ら多くの方々に御指導頂き感謝いたします。

また、地元御経塚町有志及び加藤雄巳、北村昭、安嶋均、山岸秀昭、前田晴彦、口村栄二、吉川均の各学生諸氏には、厳冬時の調査にもかかわらずカッパ姿で作業を進め、無理をして頂いた。

58年度の屋内整理時においては宮本洋子さん、石浦めぐみさん、菊野庸三氏に夜遅くまで残って頂き頑張ってもらいました。ごくろうさまでしたと感謝いたします。

金沢市文化課南久和氏より、文献の貸し出しなど暖かい援助を受け町教委の中田八千代嬢の手をわずらわしたにもかかわらず、筆者はこれをまるっきり生かせずおわびするものであります。不備な報告書であるがひとえに吉田が責を負うものであります。



遺跡地遠景（北より）  
中央は県営あすなろ団地  
国道の右側は国指定史跡  
御経塚遺跡

（昭和56年当時）



遺跡地近景（南より）

（昭和55年当時）



80. 調査風景（北より）



81. 調査風景(北より)



82. 調査風景(南より)



83. 調査風景(南より)





80. 調査区近景  
(北より)



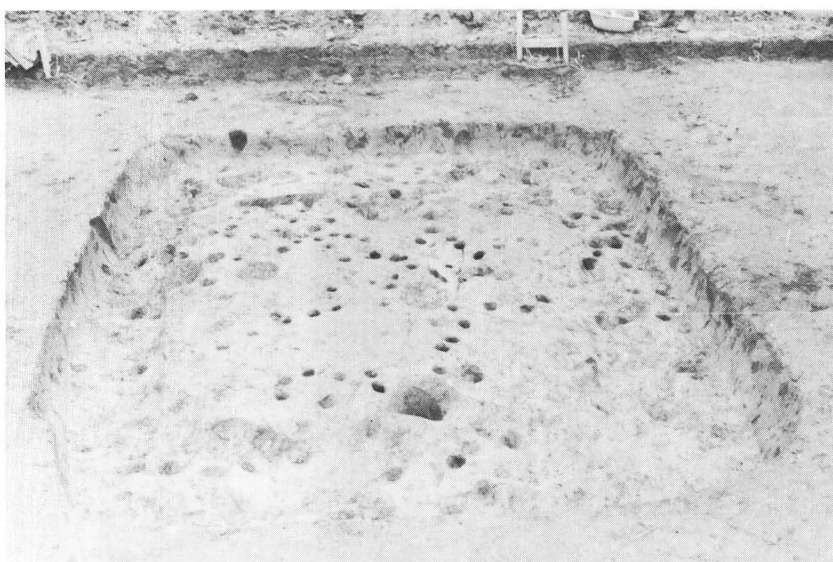
81. 調査区近景  
(北より)



82. 調査区近景  
(北より)



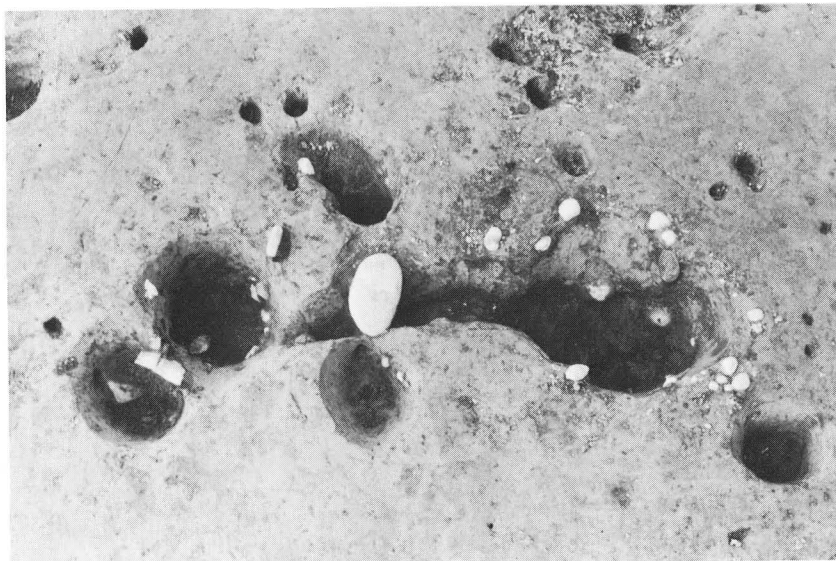
83. 調査区近景  
(南より)



80-1H (南より)



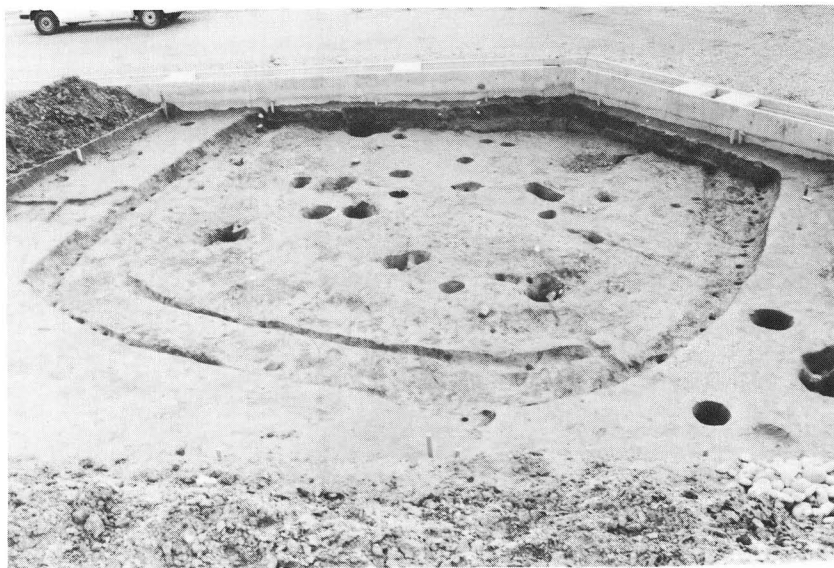
80-2H (北より)  
手前は80-3H



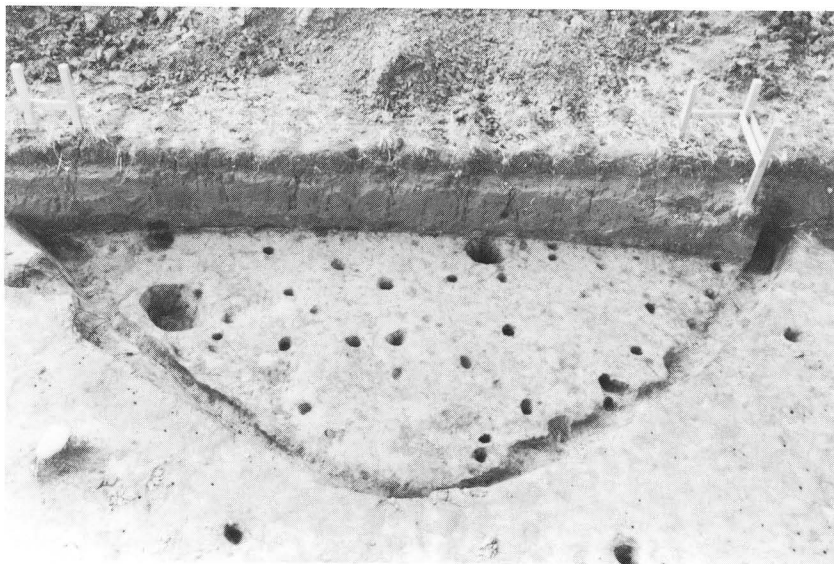
80-2H  
連結するピット



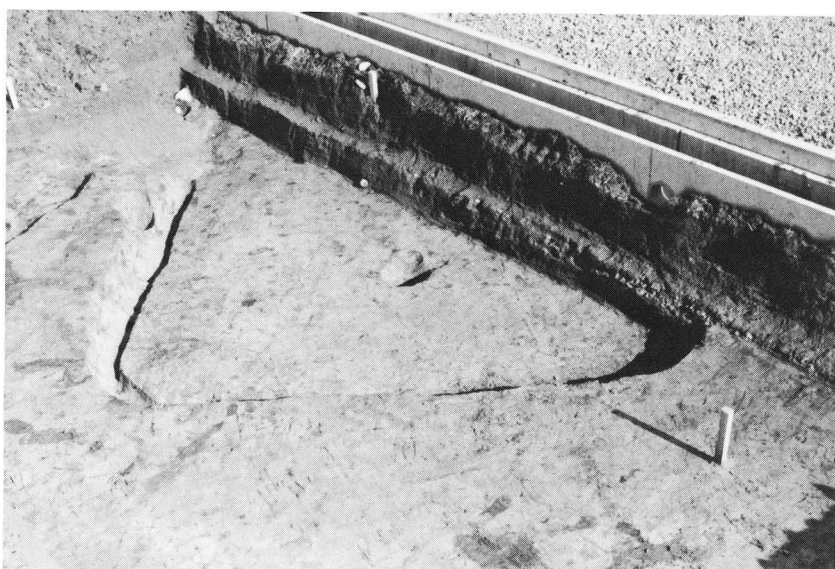
80-3H (北より)



80-3H 完掘  
(北より)



80-4H (東より)  
(80調査)



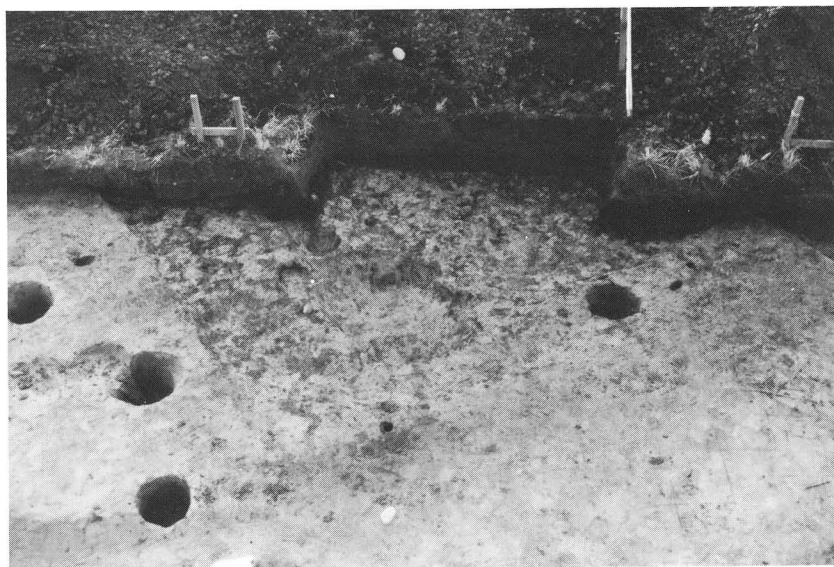
80-4H (南西より)  
(81調査)



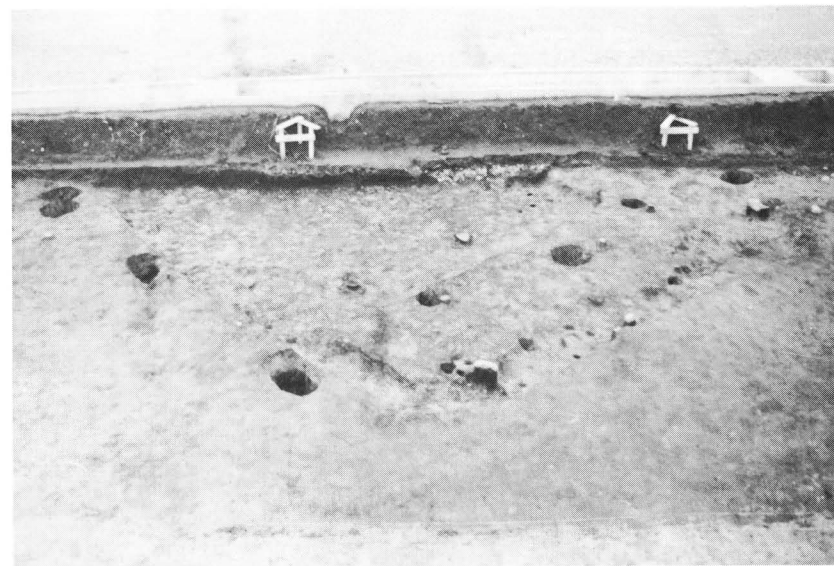
80-5H  
土器出土状況  
(北より)



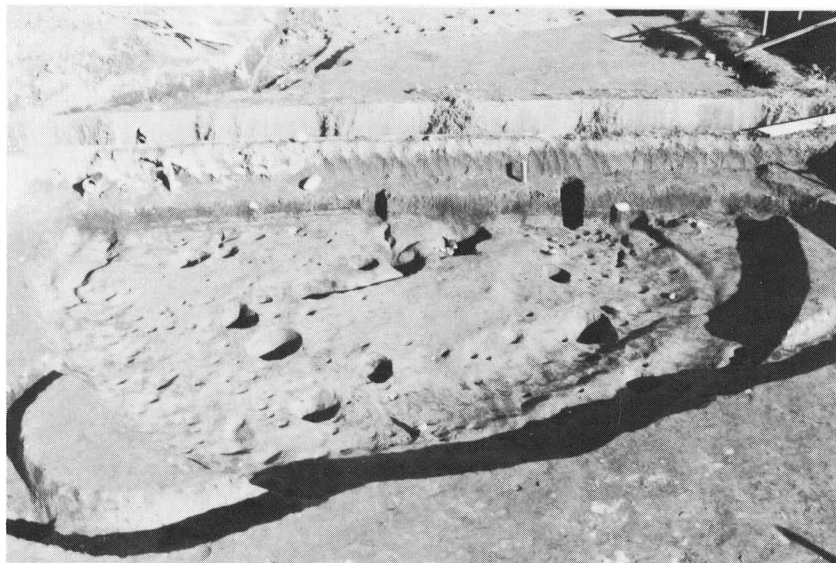
80-5H  
土器出土状況



80-5H  
(以上80調査区完掘)  
(東より)



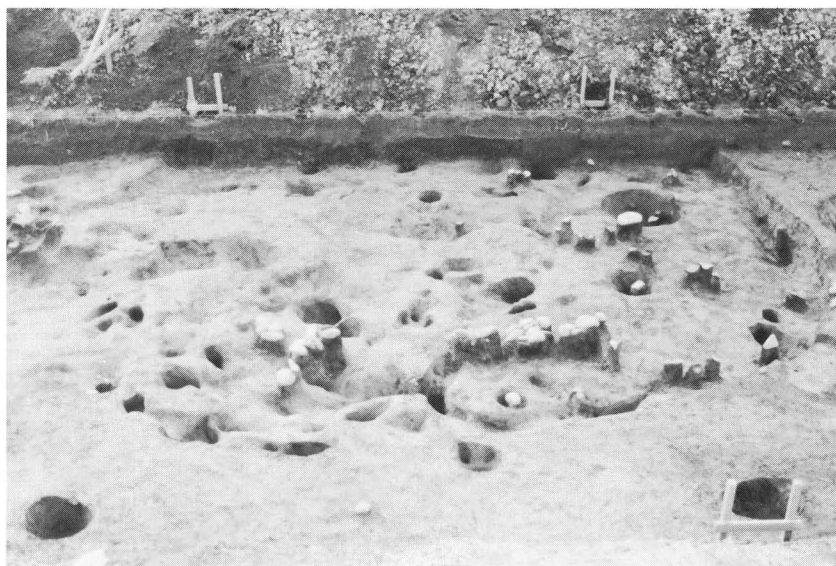
80-5H  
(81調査 西より)



80-6H (西より)



80-6H  
連結するピット

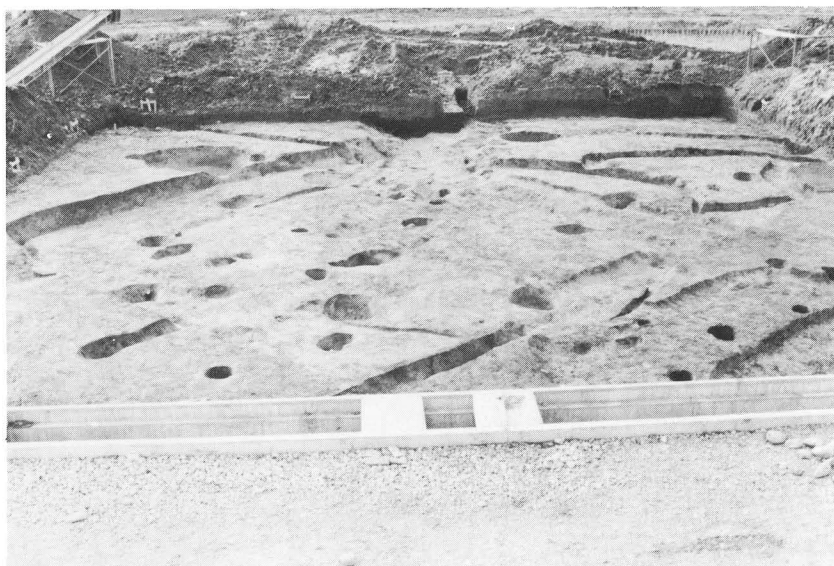


80-7H (東より)

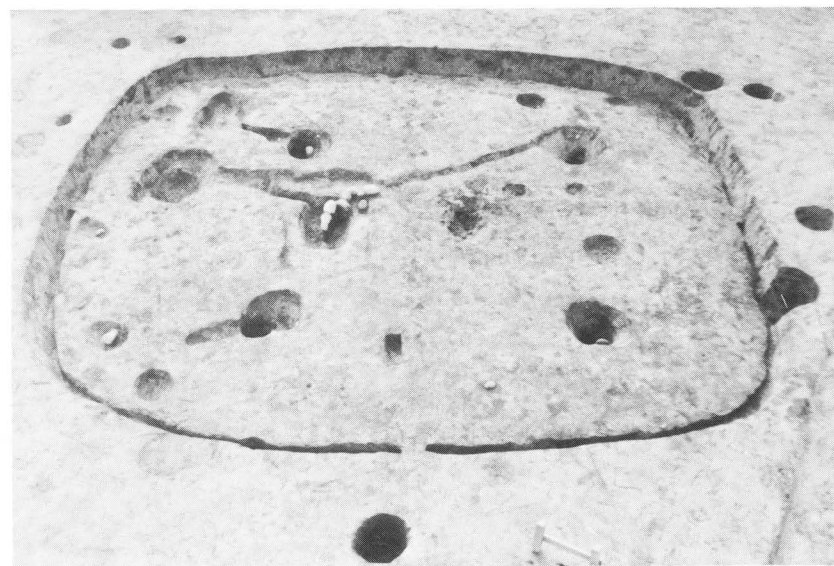


81-1・2H (北東より)

右側隅丸は81-2H  
手前は80-5Hである。



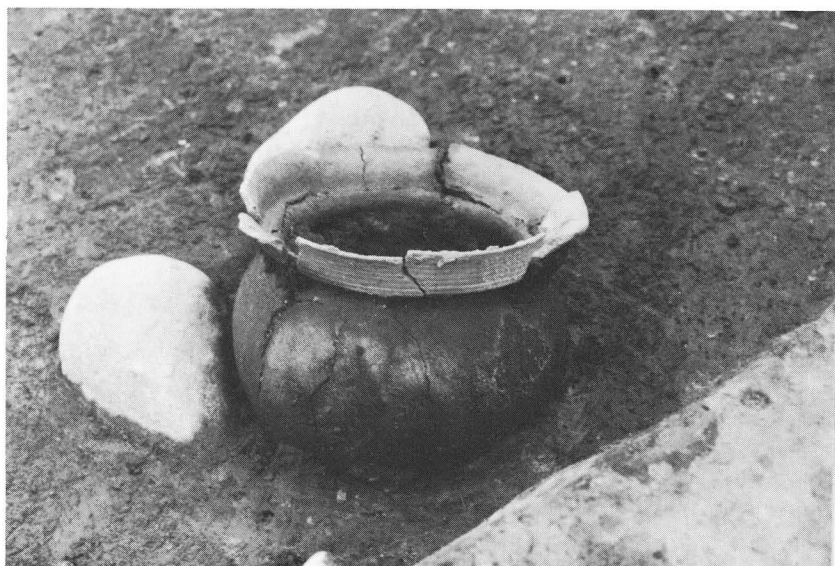
81-1・2H (東より)



82-1H (東より)



82-1H  
特殊ピット



82-1H  
甕出土状況  
石に立て掛けたような状態  
で出土する。

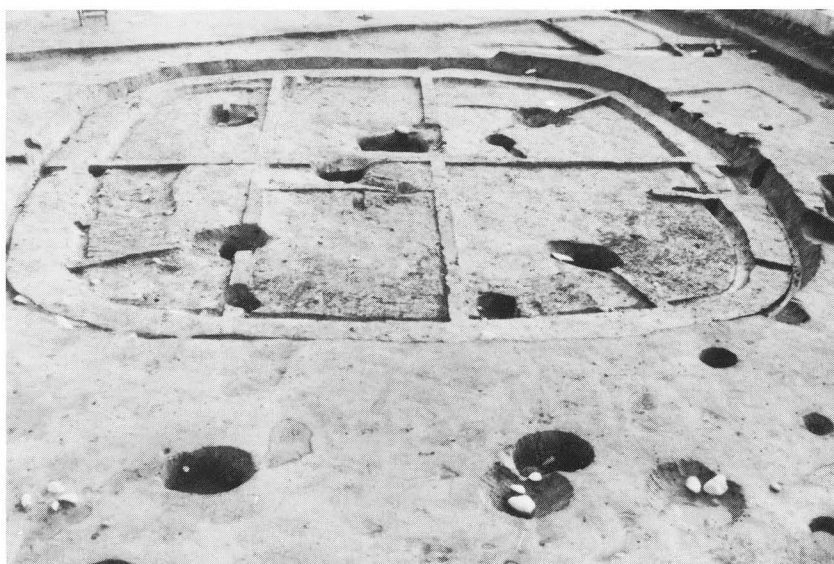


82-2H (北より)





82-2H  
特殊ピット



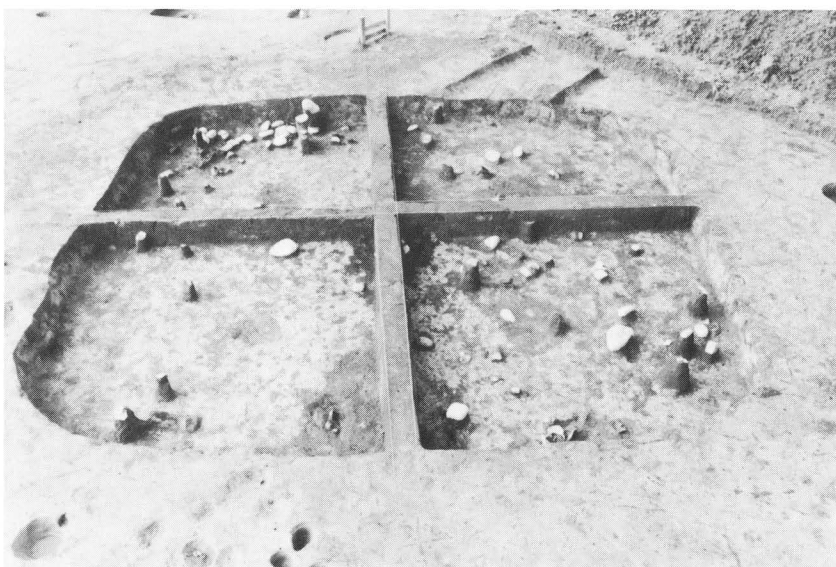
82-2H (北より)  
床面下調査状況



82-3H (西より)  
遺物・礫出土状況



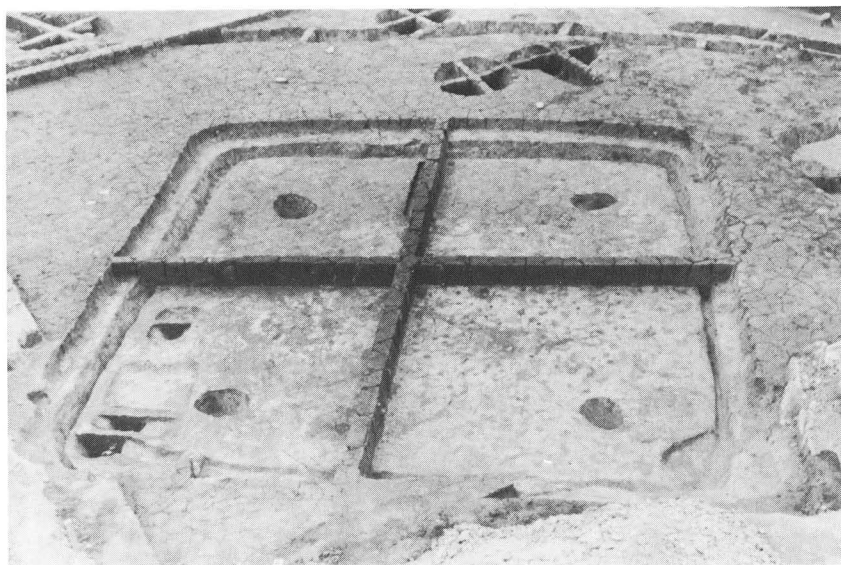
82- 3H (東より)



82- 4H (南東より)  
遺物出土状況



82- 4H (東より)



83-1H (北東より)



83-1H  
土器出土状況



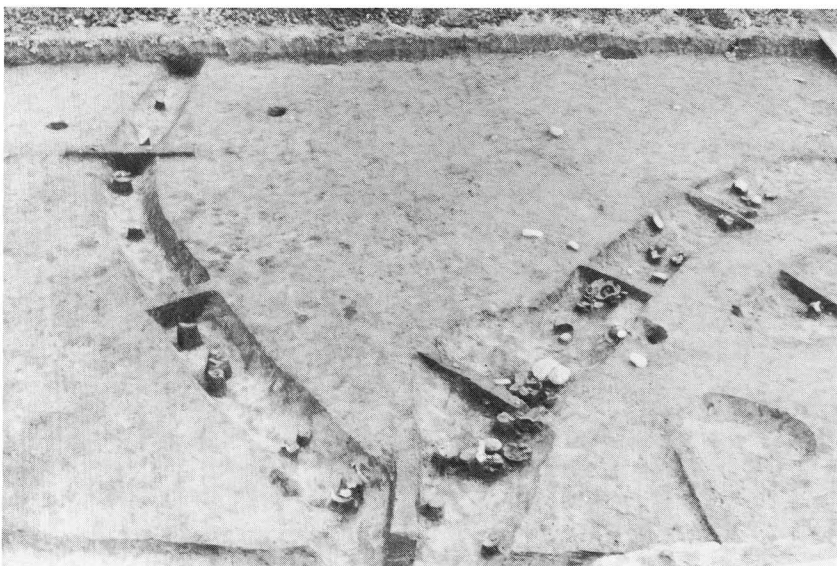
82. 掘立柱建物跡  
(北東より)



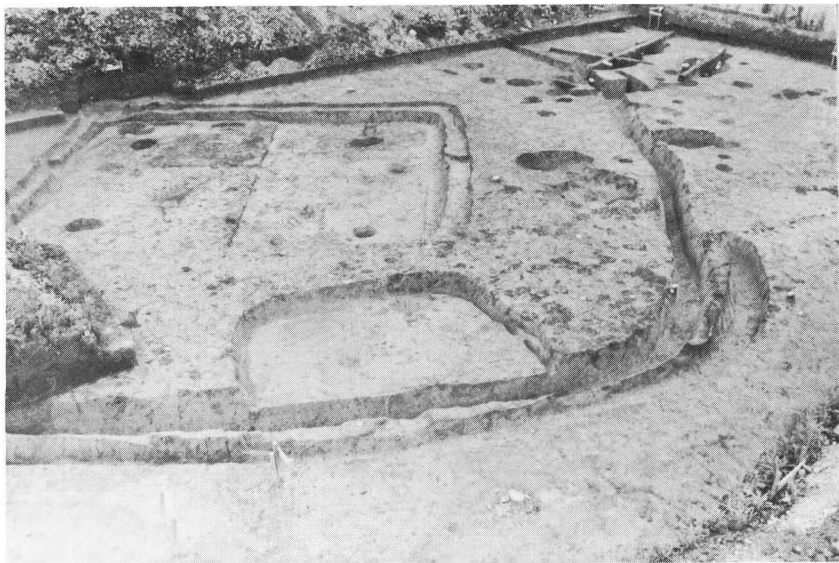
83. 小堅穴状遺構  
(北より)



80. 「8の字」形溝  
(北西より)



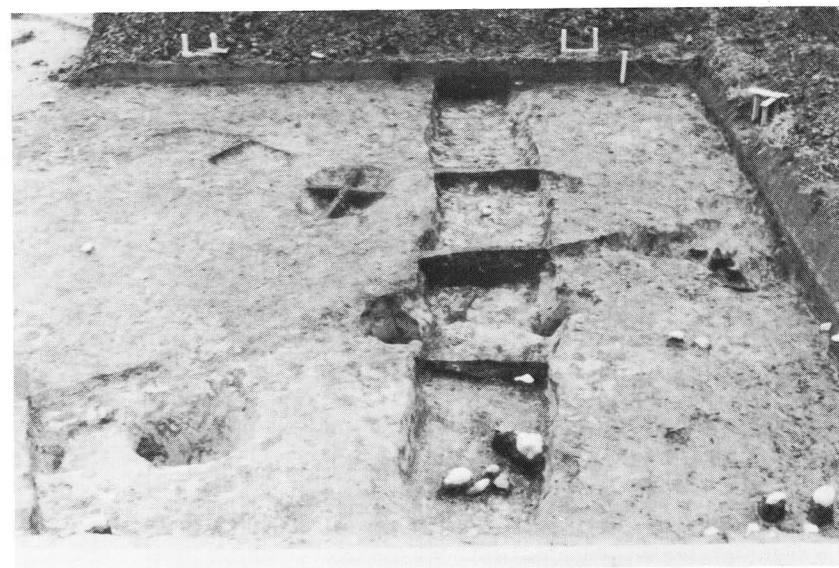
左 81-1T  
右 81-2T (東より)  
(81調査区)



81-1T  
83-1Hと83小堅穴状  
遺構  
(83調査区西より)



同 上 (北より)



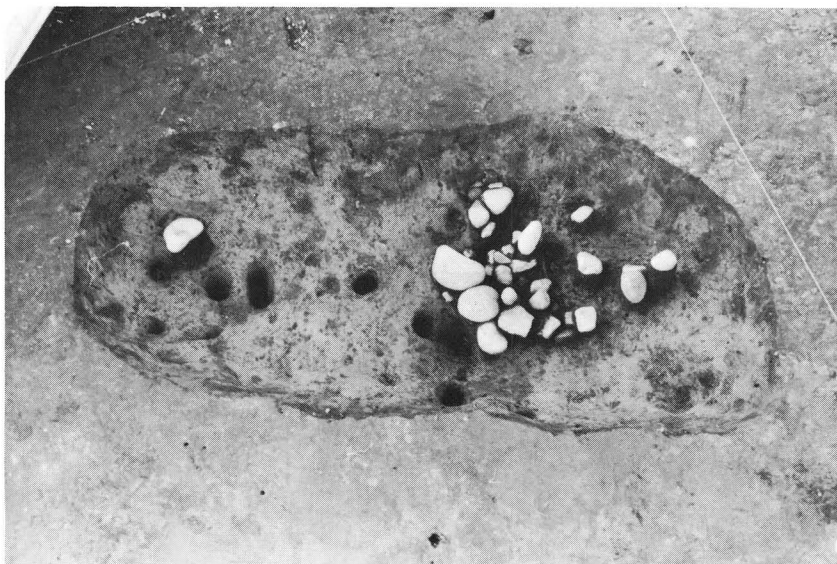
81-4T (東より)



83トレンチ調査区溝  
(北より)



80-1D



80-2D



80-3D



80-4D



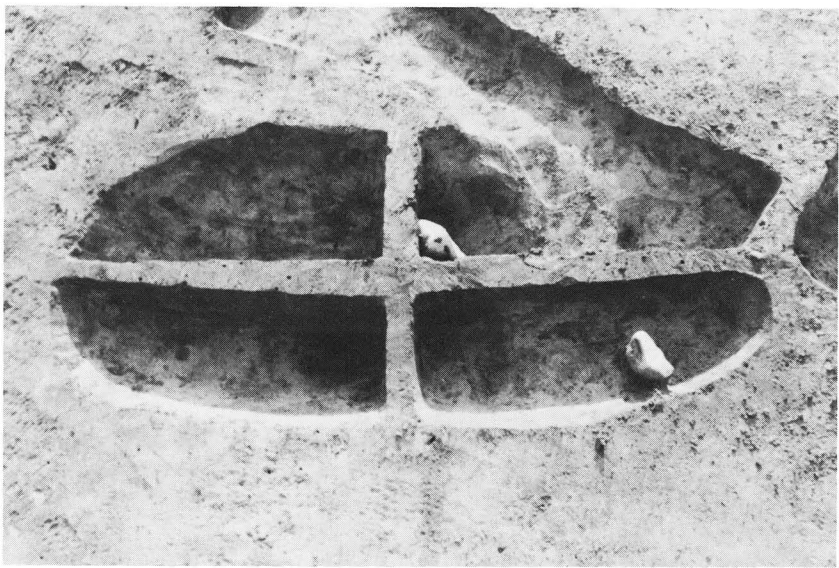
80-4D  
土器出土状况



81-2D



81-4D

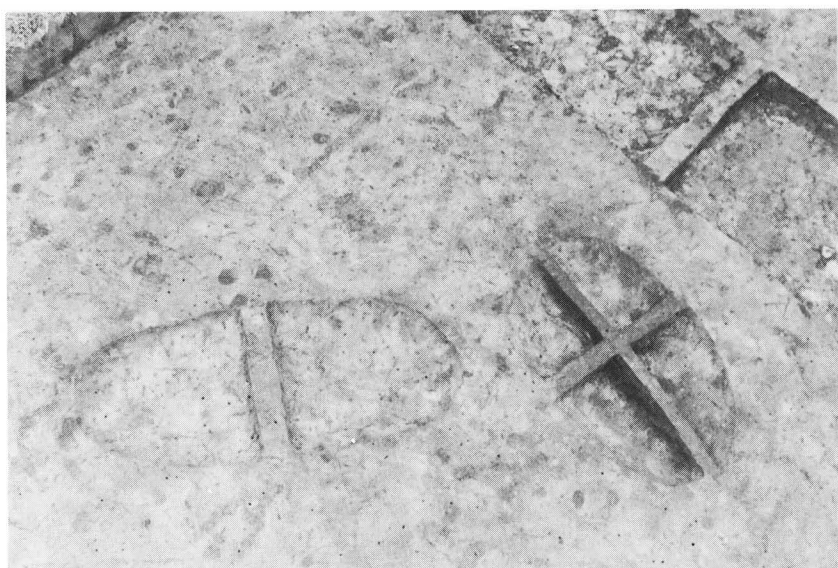


81-6D





81-6D



81-4T

81-7D

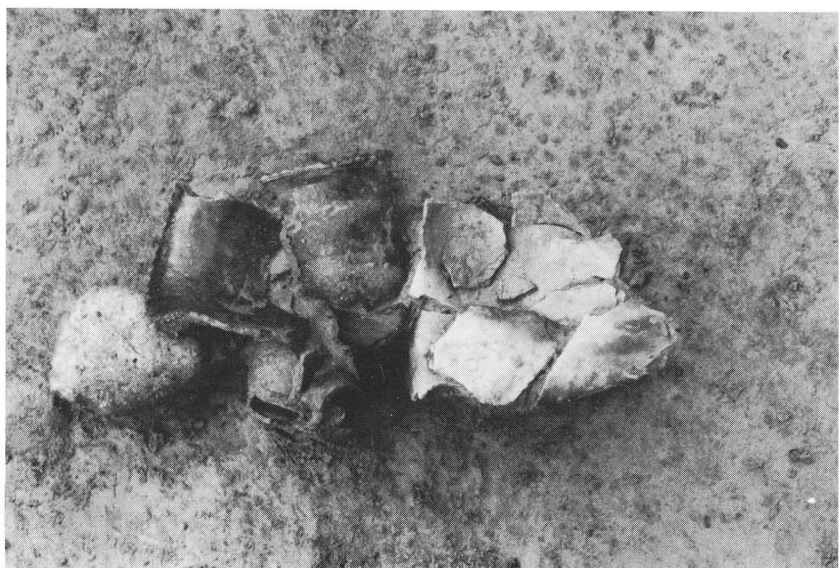
81-8D



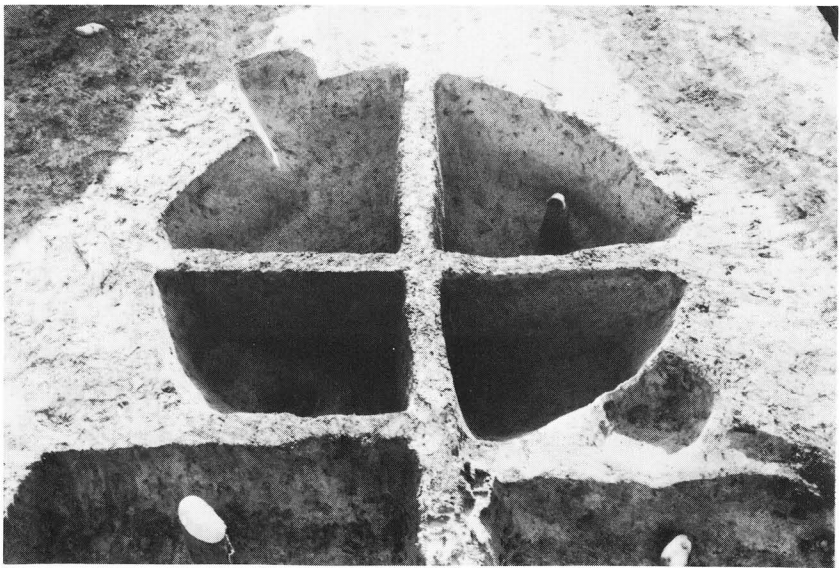
81-10D



81-11D



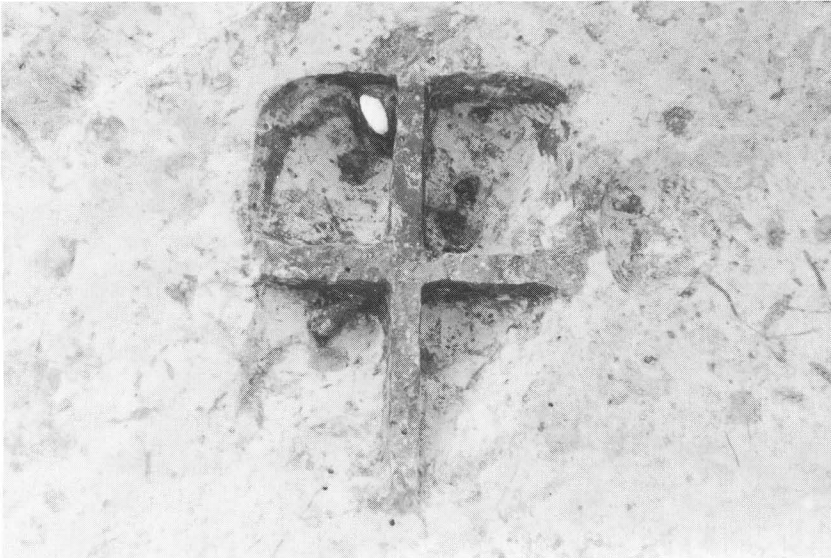
81-11D  
土器出土状况



81-12D



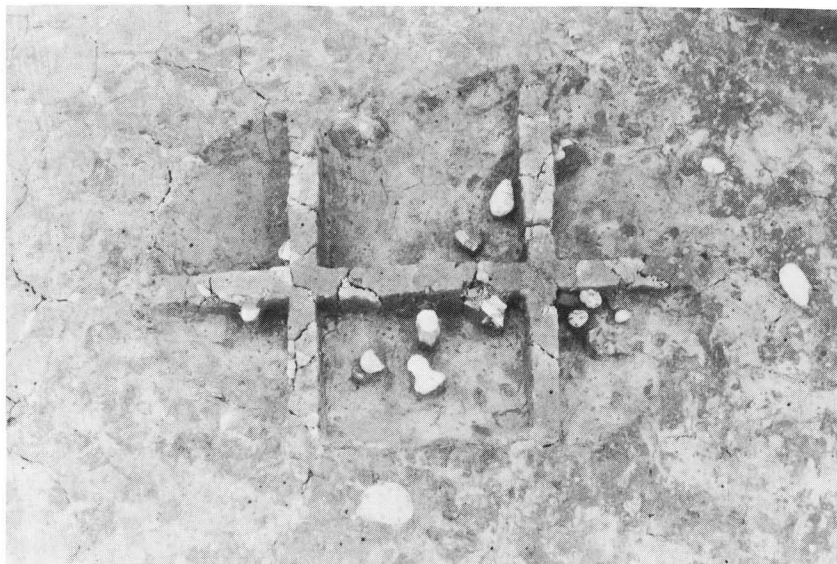
82- 1D



82- 2D



82- 3D

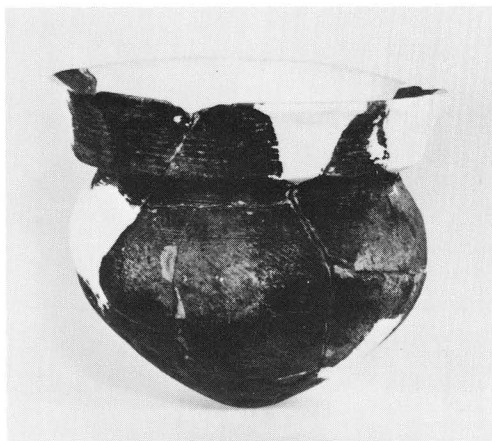


83-1D



83-4D

83-3D 83-2D



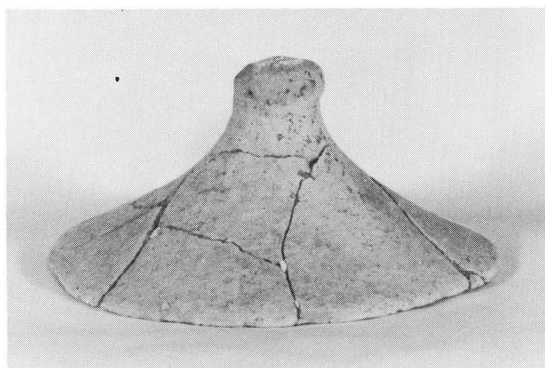
80-2H 11



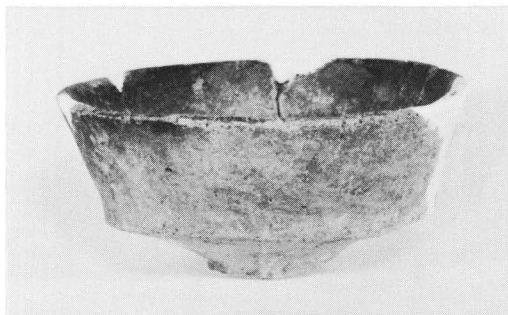
80-2H 13



80-2H 15



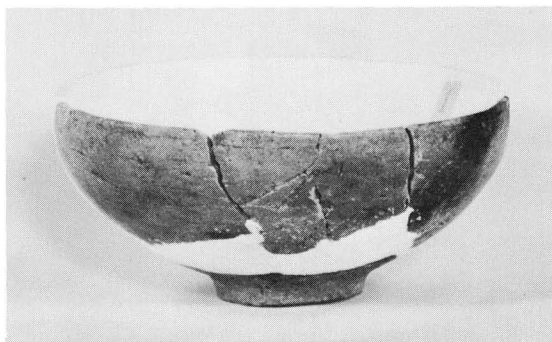
80-2H 20



80-3H 30



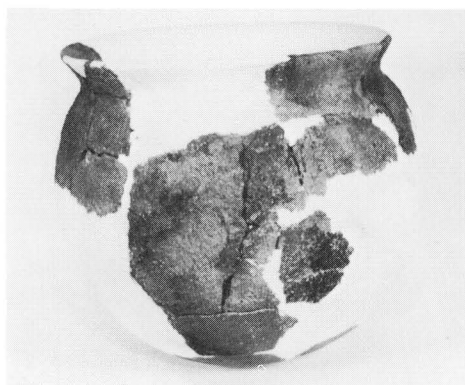
80-3H 40



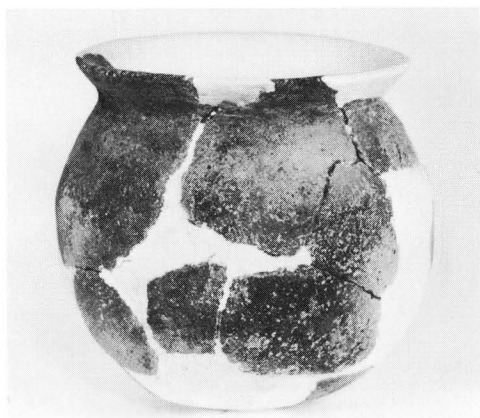
80-4H 9



80-5H 3



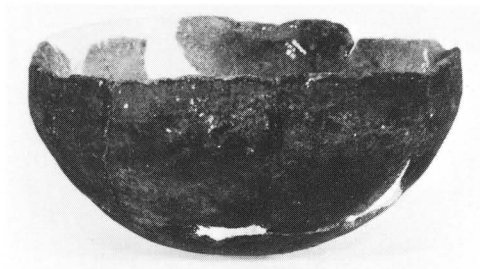
80-5H 4



80-5H 5



80-5H 12



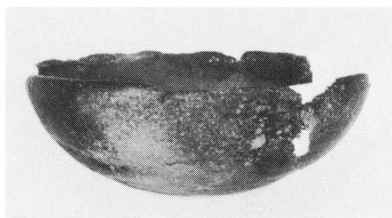
80-6H 6



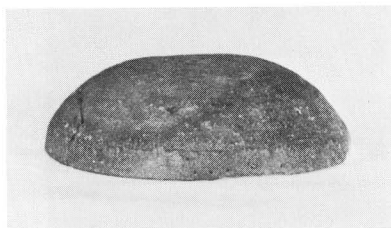
80-5H 7



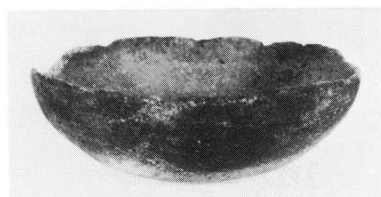
80-5H 出土土器



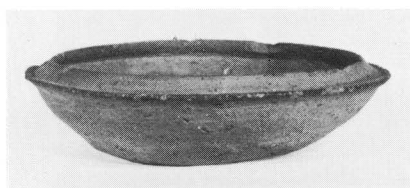
80-5H 8



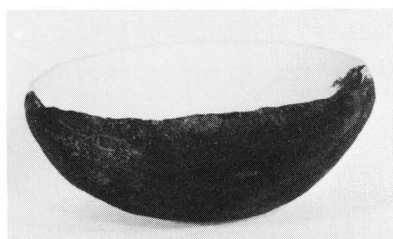
80-5H 14



80-5H 9



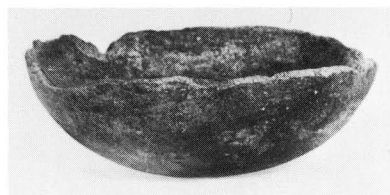
80-5H 15



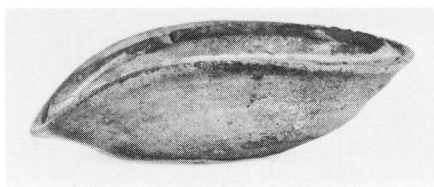
80-5H 10



80-5H 16



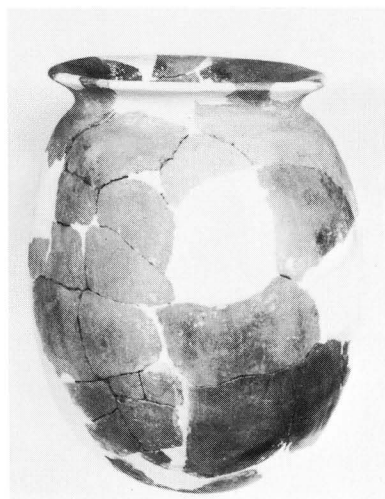
80-5H 11



80-5H 17



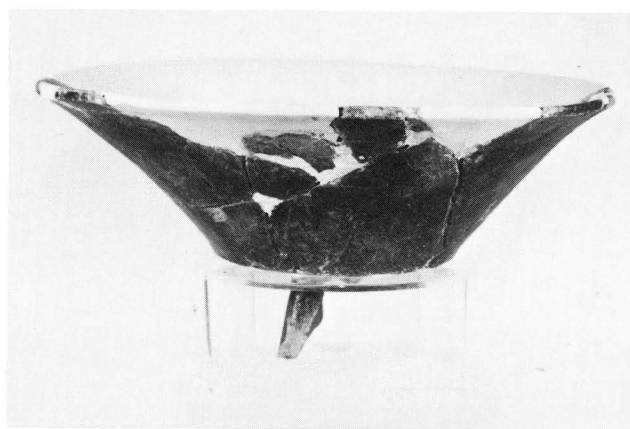
80-5H 13



80-5H 1



80-7H 11



80-7H 13



80-7H 16



80-7H 14



80-7H 17



80-7H 18





80-6H 17



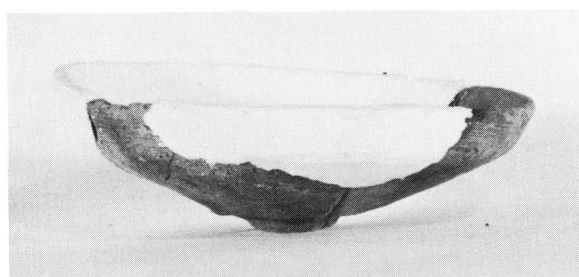
80-6H 18



80-6H 19



80-6H 20



81-1H 28



81-1H 43



81-1H 10



82-1H 1



82-1H 2



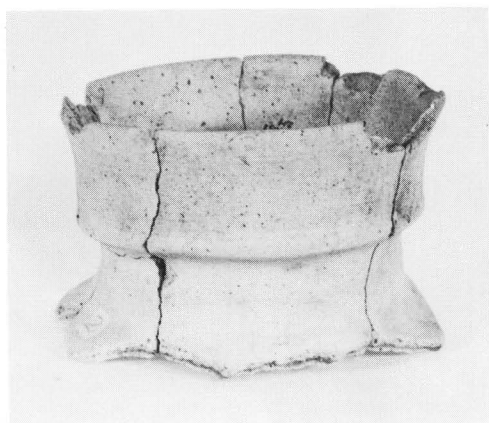
82-1H 6



82-1H 14



82-1H 20



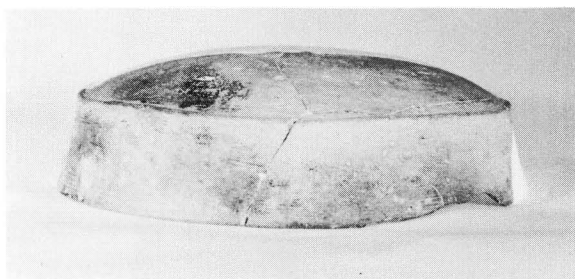
82-2H 8



82-2H 7



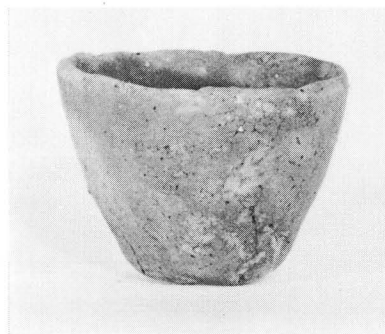
82-2H 18



82-2H 23



82-3H 17



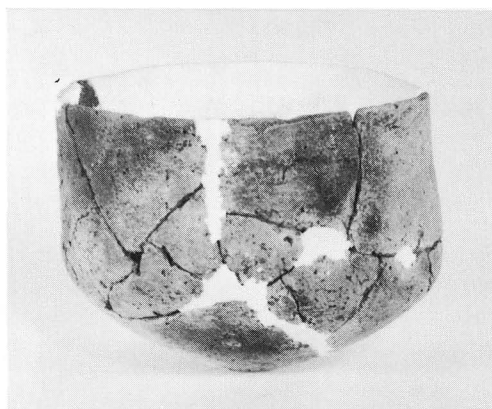
82-3H 19



82-3H 14



82-3H 21



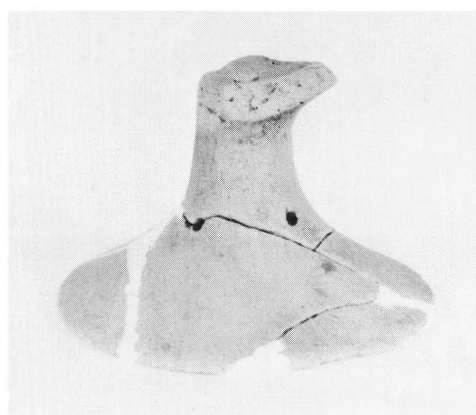
82-3H 23



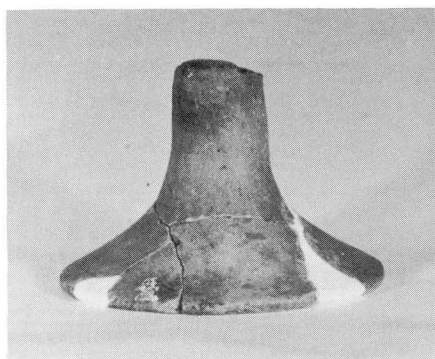
82-3H 40



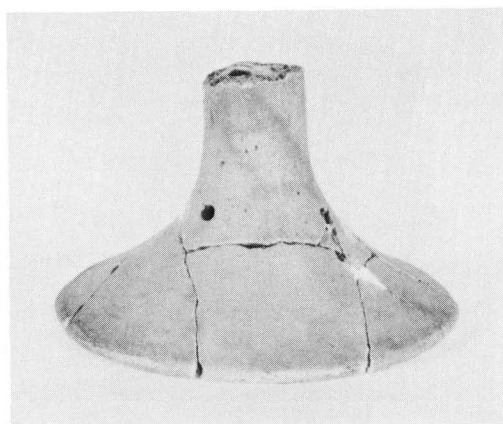
82-3H 25



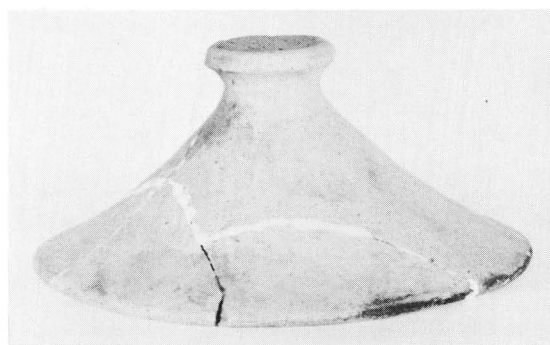
82-3H 26



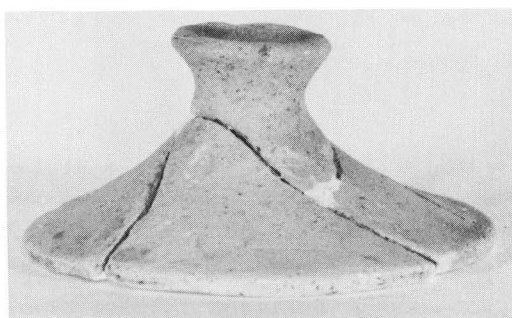
82-3H 27



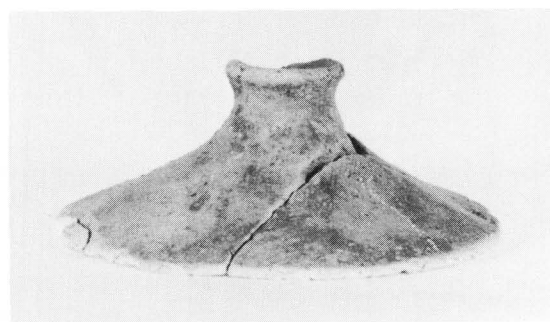
82-3H 28



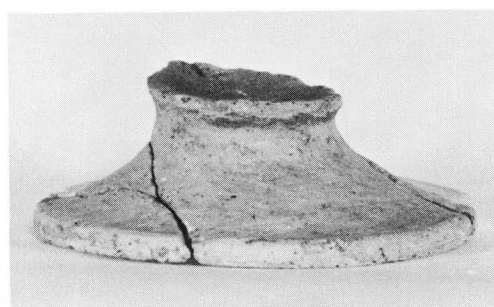
82-3H 42



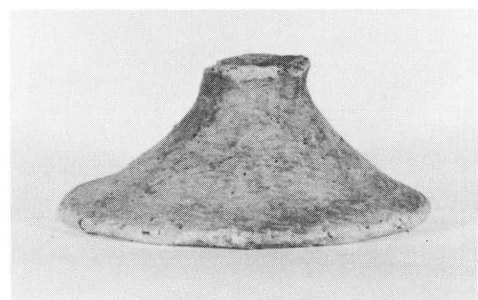
82-3H 43



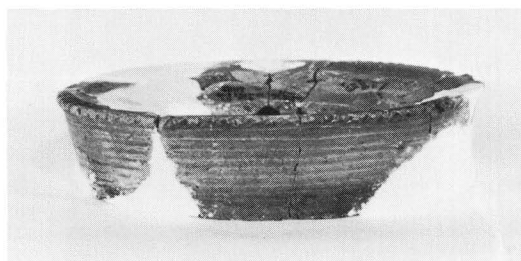
82-3H 44



82-3H 46



82-3H 47



82-3H 41



82-4H 2



82-5H 5



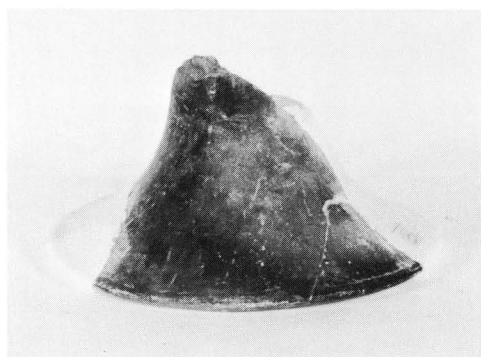
82-4H 7



82-4H 6



82-4H 13



82-4H 14



82-4H 15



82-4H 10



82-4H 11



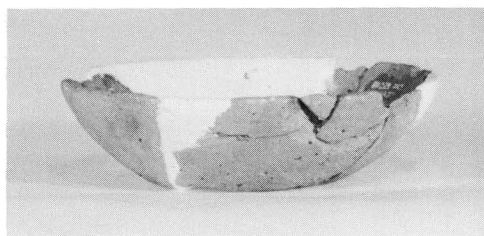
82-4H 出土土器



83-1H 3



83-1H 4



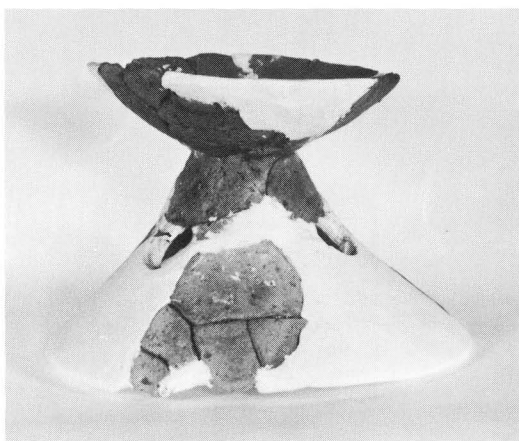
83-1H 5



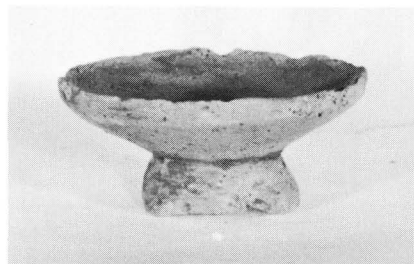
81-4T 5



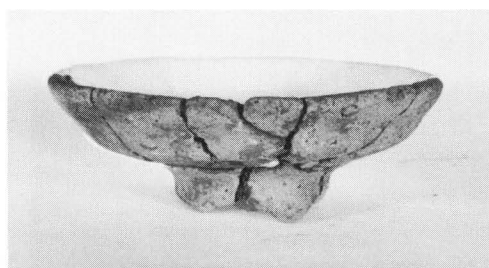
81-1T 8



81-1T 9



81-1T 10



81-1T 11

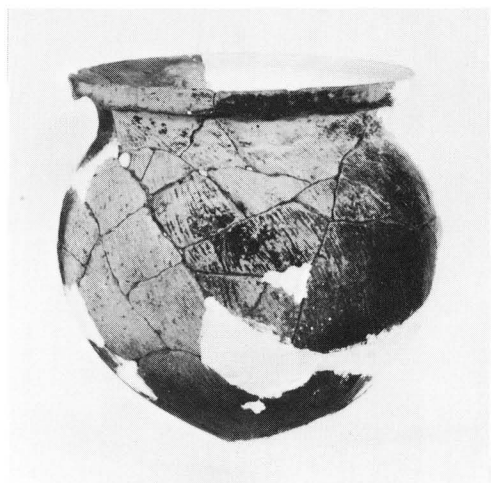


81-2T 1



81-2T 6





81-2T 7



81-2T 8



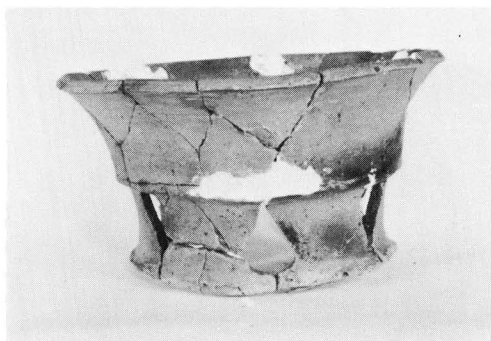
81-2T 15



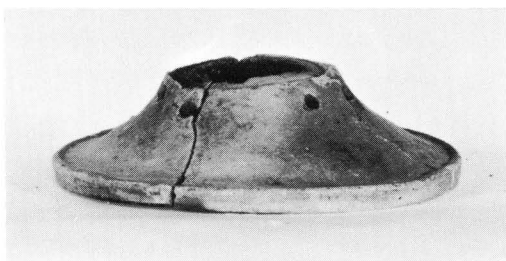
81-2T 19



81-2T 11



81-3D 3



81-3D 4



81-4D 6



81-12D 1



81-12D 3

---

御経塚ツカダ遺跡  
(御経塚B遺跡)発掘調査報告書 I

発行 昭和59年3月

編集 石川県野々市町教育委員会  
発行者

印刷所 北国書籍印刷株式会社

---

